平和への道―教育による人づくり

松前記念館（東海大学 歴史と未来の博物館）所蔵の蔵書のなかに『建学』と題する古い冊子がある．達筆による「建学」の題字が表紙に記され，その下にロダンの《考える人》を想起させるイラストがある．左下に「1」と記されている．奥付に「昭和 21 年 10 月発行」とあるこの冊子は，東海大学の前身にあたる学校の一つである東海科学専門学校の三保校舎の校友会誌（創刊号）である．『東海大学 50 年史』によると，本学の前身である航空科学専門学校と電波科学専門学校を統合した学校名は当初，東海科学専門学校とする予定だったのが，「科学」という文字があることに文部省が懸念を示し校名変更を示唆したことから「東海専門学校」とし，その後，東海科学専門学校と改称したという．旧制東海大学になる少し前の話である．

太平洋戦争後の混乱と食糧難の最中に発行された同誌のなかで，東海大学の創立者は次のように語り始めている．

> 日本歴史は太平洋戦争の無残なる敗北を以て歴史的大断層に當直した．日本前史は終りを告げ，日本後史が諸々の社会現象の中に生への苦しみを続けて居る，混迷の時代である．曙の光は未だしである．〔…〕此の異常な時代に處して我等の学園は如何なる態度を以て望むべきであるか．此の尚き教育の府を如何に健全に，然も日本歴史の将来の基礎事業として役立たしむるか，今我等は静かに内に省りみるべきである．

そして，当時の状況を明治初期の思想的混乱期になぞらえ，明治期に高山樗牛が「此の思想的激流を超越して日本歴史の前途を見極めよ．諸々の大波小波に眩惑されるな．永き時の彼方に不変の星を望んで，堂々として歴史建設の事業に邁進せよ」と語っていたことを紹介し，「片々たる社会的動揺の波に我が学園を難破せしむるな．歴史の濁流に押流されるな．清く高く永き真理の大道を堂々と歩め．而して歴史建設の謙虚なる礎石としての我等の使命を発見しようではないか」と結んでいる（松前重義「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」『建学』1 号，東海科学専門学校，1946 年，p9）．

COVID-19 のパンデミックにはじまり，ロシアの侵攻によるウクライナ戦争の勃発で世界は再び混迷の時代を迎えた．タレントが TV の対談のなかで 2023 年を「新しい戦前」になるのではないかと語ったことが Twitter で話題になるなど，今を生きる私たちの生活世界は，再び時代の閉塞感や不安感に覆われ，脅かされている．本稿では松前記念館の HP で紹介している本学の創立者の言説をいくつか紹介し，今を生きる私たちの使命を発見するためのヒントとしたい．

例えば，戦争について，創立者は次のように述べている．

> これまでの歴史を顧みるとき，『平和』という言葉を盛んに唱えたのは政治家であり，政治家は平和のために存在しているかのごとく見える．だが政治家ほど口で平和を唱えながら，戦争への道を歩いたものはない．かつてヒットラーは，口を開けば平和を唱えたが，その彼

がついに東欧諸国の侵略から，世界大戦にまで誘導するに至った．スターリン，ルーズベルト，あるいはわが国にしても同様である．日本は『大東亜共栄圏』を掲げて戦争に突入した．世界大戦の主役たちは，すべて口を開けば『平和，平和』と唱えた．にもかかわらず，彼等は戦争への道を歩み，あの惨たんたる第二次世界大戦を展開したのである．このように平和というものは，人類が到達したいと念願し，希望しながら，真の平和の時代を持ち来すことができないでいる．平和の問題はそれほど悩み多い人類の歴史的課題である．〔…〕しからば，一体平和は何によってもたらされるか．何が真の平和への道を開拓するものであるか．人類にはその能力はないのかどうか．そう問われる時代が今来ているのである．我々は一方的に物を見てはいけない．歴史的に，総合的に長い人類の歴史の過去を顧み，また明日を洞察して解決への道を発見しなければならないのである．平和の問題こそは人類に与えられた最大の課題である．いかにして平和を維持し，確立することができるかという悩みのどん底にあるのが，現代なのである．政治の世界もまた，この問題を中心にして動いている．平和というものは，求められて得られないものであるかどうか，その悩みのどん底にある現代を，われわれは認識しなければならないのである．

『松前重義　その国際活動Ⅰ』（東海大学出版会，1991 年）より

また，戦争の原因に共通するのは相互理解の不足であり，それは国家間の問題に限らず，人と人との関係についても同じことが言え，いかに情報が豊富にあっても，その情報が独裁的指導者によって歪められたものであったり，国民が情報を正しく選択，判断する力に欠けていたりしたらマイナスの作用しか持ち得ない，と創立者は述べている．

教育による人づくりに目を向けるならば，創立者自ら教壇に立ち，その歴史観，世界観を述べ，文系，理系を問わず歴史を大観し，広く世界に目を向けることの重要性を学生たちに説いた「現代文明論」の使命について，次のような言説を挙げることができる．

大学を作り，人を育てようとする以上，文明ということについて，はっきりとした考えを持っていなければならない．また，大学において，学問を学び，明日の社会を担おうと志す学生は，文明とはどういうものか，社会がいかにあることが文明なのかということがわかっていなければならない．現代文明を，ただ単に，いわゆる“現代の目”で眺めていたのでは，「現代」ということも「文明」ということも，ついに理解できずに終わるであろう．現代の文明を理解しようとしたら，われわれは，それを人類の歴史の流れの中に把握することを忘れてはならないのである．大きな目で人類の歴史を眺めることによって，はじめて現代とは何か，文明とは何かということもわかってくるのである．

松前重義『現代文明論』（東海大学出版会，1964 年）より

知識と技術のみの習得でなく，自ら得た学問と，歴史を支配する原則を把握し，その歴史観をとおし人生や世界について常に考え，現代に生きる人間として今，何をなすべきかを問いかけることが「現代文明論」の使命である，と創立者は述べている．

「現代文明論」は学部学科の枠を超えた総合科目の先駆けで，全学必修の科目であった．現在でも本学園の各教育機関で教養教育の柱として開講しているこの科目は，本学が掲げる文理融合の理念とも深い関係にある．「グローバルな視点に立って，“ 実践する大学 ” を志向する」という文章のなかで創立者は次のように述べている．

> 人文系と理科系の融合をめざした教育の上に，各個の教育をさらに深めんとするのが本学の出発であり，今後とも変更はない．いま必要なことは，理科と文科の真の融合，理解により人類全体の将来を見こし，その上に立って世界平和の実現に向かって歩むことである．大学としてはグローバルな視野に立つ活動をすること，これが東海大学の使命だと考えて現在までやってきた．これからもこれは変わらない一番大切なことだと思う．〔…〕これを教育の主たる目的に掲げる理由は，大学自体の実践を通じて高等教育を行っていくこと，その実践そのものが一つの教育と考えるからである．単なる知識の伝達に終わるのではなく，教授された知識が学生の内部で発酵して，一つのテーマに向かって大きく育っていくことが本来の教育の姿であると考えるからである．もう一つは，大学が社会の要求に応えうる活動をするという方向である．社会の要求とは現在の日本に迎合することではなく，全人類的見地から求められていることを人類愛の立場から大学として取り組むことである．
>
> 『東海大学新聞』（1977 年 11 月 20 日号）より

また，大学教育にしても，外交にしても，日本は本当にグローバルな視点に立脚しなければだめだ．全人類のためにやる，という理想の上に立って行うべきだ． 日本だけが，東海大学だけが専有するというのでは意味が無い，と創立者は述べている．

創立者が他界して今年で 32 年目を迎える．この間，2008 年には九州東海大学，北海道東海大学と東海大学は統合し，総合大学としてのさらなる拡充を果たし，現在，全国のキャンパスに 23 学部 62 学科・専攻を擁する大学へと成長してきたが，他方，「昭和の怪物」とまで称された本学の創立者の存在や彼が生き抜いた波動の人生は，没後 32 年という月日をはるかにこえた遠い過去になりつつある．元松前記念館館長の橋本敏明氏によると，冒頭で引用した『建学』所収の当時の学生名簿をみると，多くの方が卒業後に創立者の下に集まり，今日の東海大学を築くために一生を捧げられたことが分かるという．

私学の創立者の意志を引き継ぎ，ヒューマニズムの思想に基づきグローバルな視野に立って，文理融合の理念のもと実践する大学を志向すること，世の中の変化に流されず人生の基盤となるものの見方，考え方を培い，歴史を大観することができるような人づくりを地道に進めていくことこそが，平和への近道なのだと思う．それは一人でできるような仕事ではない．大学全体で，教職員全員が一緒になってはじめて成し遂げることができる，地味ではあるが意義深く，尊い仕事なのである．

松前記念館 HP：http://www.kinenkan.u-tokai.ac.jp/

文明研究所所員 / 松前記念館マネージャー
ティーチングクオリフィケーションセンター社会教育学系准教授
篠原　聰

バリ島における多文化共生社会を可能にする伝統の知恵 “*Kearifan Lokal*”

東海林恵子　国立高等専門学校機構八戸工業高等専門学校　総合科学教育科　特命助教

〔論文〕

Local wisdom of Hindu-Muslim social ties in Bali：*Kearifan Lokal*

Keiko Shoji

Abstract

The aim of this article is to consider the social practices under which good relations between Muslims and Hindus in social life have been established in Bali, where Hindus constitute 80% of the population. The harmonious relationship between the two religions in Bali has been reported in articles. (Steer 1994, Kurasawa 2008). However, there have been few reports on the concepts under which friendly coexistence has been maintained and the specific content of such relationships. In this thesis I focus on the suggestion (Sumiai 2017, Suwitha 2017, Budi 2018, etc.) that Balinese religions can coexist because of Balinese concept called *Kearifan Lokal* (Local wisdom), which is based on Balinese traditions. Local wisdom, as a kind of embodied "tacit knowledge," seems to underpin the practice of multicultural coexistence in Balinese society.Then I analyze how this traditional wisdom / local wisdom has been put into practice in Balinese society.

Accepted, Dec 09 2022

はじめに

インドネシアは世界最大のイスラム人口を抱える一方で，様々な宗教の信仰が認められている多宗教（民族）国家である．「イスラム教」「ヒンドゥー教」「仏教」「プロテスタント」「カトリック」の５大宗教を国教としており，どの宗教も憲法上で平等に権利が保障されている．しかし１つの国で複数の宗教が存在するということは，思想・文化・教義などにより社会的対立の要因の一つとなる場合が多い．また一般的に民族的，宗教的な感情が表出すると紛争へと発展する場合もある．もちろん必ず紛争や暴力に至るわけではないが，宗教的配慮はどの社会においても必要であることは言うまでもない．例えば，アンボン[1]やサンピット[2]で起きた紛争や暴力は民族と宗教が結びついた問題が引き金となっている（Bambang W 2013）．

異なる宗教，民族，文化に寛容な「多様性の中の統一」が国是にありながらも国内全体にイスラム化が進み，イスラム保守勢力が影響力を増しつつある．そのため，社会全体の宗教的保守化，不寛容化をどのように止められるかがインドネシア政府における大きな課題となっている現状である．複数の文化社会が成立するためにはイデオロギーが必要である．

本研究の目的は，ヒンドゥー教徒が８割を占めるバリ島で，社会生活におけるイスラム教徒とヒンズー教徒の関係が，いかなる思想および社会的実践のもとで共存し，良好な関係が構築されてきたかを考察することである．バリにおける両宗教のあいだには，調和的な関係が築かれてきたことは，これまでさまざまな研究で報告されてきた（スティア 1994，倉沢 2008 他）．しかし，どのような社会的実践のもとで友好的な共存関係が維持されているのか，その具体的な様相についての報告はこれまでほとんどなされてこなかった．そこで本論では，価値観，規範，倫理，信念，慣習法など人々の社会生活に組み込まれたバリ独自の伝統に基づいた *Kearifan Lokal*（Local wisdom）と呼ばれるバリ特有の概念が両宗教の共存を可能にしているとの指摘に着目する（Sumiai 2017, Suwitha 2017, Budi 2018 など），その上で，この「伝統の知恵」が具体的にどのようにバリ社会で実践されてきたかを分析する．

1. ヒンドゥーコミュニティーとイスラムコミュニティーの歴史

バリに住むバリムスリムとバリヒンドゥーの関係，お

本論文は，『文明』投稿規定に基づき，レフェリーの査読を受けたものである。
原稿受理日：2022 年 12 月 9 日

よびバリムスリムがどのような存在であるかについて，また両者がどのようにして異なる存在でありつつも共生するコミュニティを構築してきたか，歴史を遡り述べる．ただし，両コミュニティの関係性に関してはすでに論じたので[3]簡潔に記述するにとどめる．

バリにおけるムスリムコミュニティーの歴史は古く，何世紀にもわたり存在している．彼らはヒンドゥーからムスリムに改宗したバリ人ではなく 14 世紀頃から様々な地域，様々な理由でバリへやってきたムスリムとされている．マジャパヒト王国の君主 Hayam Wuruk（1350 年～ 1389 年）の治世下の時代に，Dalem Ketut Nglesir（1380 年～ 1460 年）が 1380 年にゲルゲル王国を設立した際に 40 人のイスラム教徒が同行した．これらのジャワ人の入植者たちが最も古いイスラムの祖先であると信じられている（Ambary 1985:39–41）．また別のオーラルヒストリーではメッカ出身のイスラム布教者 2 人とジャワ人のイスラム教徒が，バリの王 Baturenggong（1550 年代）に改宗を試みたが失敗し，彼らやその家族の一部がそのままバリに残り，クルンクンのレバにジャワ人居住区 Kampung Jawa とカランガセムに Saren Jawa というイスラムコミュニティーが作られた（Vickers 1987:38）．また彼らは当時バリ王国から正式に土地と職を与えられた（Vickers 1987:38）．このようなムスリムコミュニティーはバリ東部カランガセムや西部ヌガラ，北部シガラジャなど他の地域でも観察することができる．Slama（2014）は，古くに形成されたコミュニティが現在も残っていることに注目している．そして彼らの子孫はイスラムの教えを堅持しながらバリの文化をも身につけヒンドゥー社会で平和的に共存してきた．このような伝統的なバリムスリムは現在では，ヒンドゥーバリ人たちからニャマ・スラマ（Nyama selama）と呼ばれている．ニャマとは「同胞・兄弟」，スラマは「イスラム」という意味で「イスラムの教えを堅く守っている同胞・兄弟」と捉えられている（スティア 1994：404）．

2. 異なる他者との出会い
―先行研究と問題意識―

この章では，異なる民族・宗教をもった他者がどのようにして自文化と異文化との関係性を紡いでいるのか，そして両者が出会ったとき，社会はどのように変化するか，ということを古典的であるが，John Widdup Berry の「文化変容モデル」（1983,1984）を取り上げ考察していきたい．Berry は異文化間心理学（cross cultural psychology）の第一人者であり，社会の反応を類型化したことでも有名である．大川（2009）によれば，Berry の文化変容モデルは「人類学的研究と心理学的研究を架橋し，文化的変数の特定と体系化という人類学の貢献と，人間行動に関するデータ収集の標準化という心理学の貢献を利用」して生み出されたとしている．

まずは，Berry が類型化した，参入側の文化変容モデルを以下に示す．このモデルは，参入者（個人）が，自身の文化的アイデンティティを保持するのか，または，喪失するのか，ということを，受け入れ社会との関係性から「統合」「同化」「離脱」「周辺化」の 4 つで示したものである（図 1）．

上記の類型は，以下の 4 つのパターンで定義している．

統合（Integration）：自文化と相手文化をともに保持しアイデンティティを統合している．

同化（Assimilation）：自分の文化を保持せず，相手文化との関係を保持している状態．

分離（Separation）：自文化を保持し，相手文化との関係を保持していない状態

周辺化（Marginalization）：自文化を保持せず，また相手文化との関係も保持していない．

Berry は，複数性を持つ異なる他者を受け入れる社会がどのように扱っていくかは，その社会での役割が重要

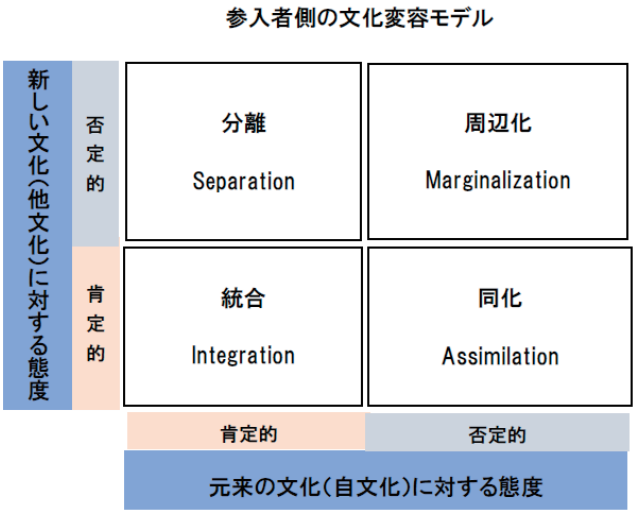

図 1　文化変容モデル Berry（1983, 1984）をもとに筆者作成

だと説いた．つまり受け入れる社会が異なる他者とのその差異を許容する姿勢がなければ，同化や隔離に向かって行くだろう．このことを踏まえ，次に上記の参入者側からみたモデルの対になるモデルとして，受け入れ社会の側から見た 4 つのパターンを併せて見ていく．これは受け入れ社会が参入者をどのくらい受け入れているかで，「多文化」「同化」「隔離」「周辺化」の 4 つのパターンになると言及されている．

多文化：複数の言語や文化を認め，参入者の文化も積極的に受け入れようとする．

同化：当該社会の言語や文化を尊重することを求める．

隔離：居住地やその地域，および職業などを制限して両者の接触を少なくする．

周辺化：同化や隔離に失敗して，参入者が孤立した状態に陥る．

多文化は参入者が自文化を保持し，受け入れ側が参入者を社会の一員として認めている状態であり，このモデルでは最も理想的であるとされている．互いに認め合いながら尊重しあい最終的には多文化共生社会へと向かうことになる．同化は，参入者は自分の持っていた文化を失うが，受け入れ側は参入者を社会の一員として認めている状態にあたる．隔離は，参入者は自分の持っている文化を保持し続けているものの，受け入れ側の社会からは受け入れられていない状態を指し，最後の周辺化は，参入者は自分の持っていた文化も失い，受け入れ側の社会からも受け入れられていない状態で，差別の対象に向かうことにつながる．

この Berry の，社会の側の 4 つのパターンをバリヒンドゥー社会に合わせて考察するならば，14 世紀頃に移民として外島からバリに根を下ろしたムスリムの人びとは，当初は自文化を保持しつつ相対的に独立した集団を維持していたため，上記の類型では「分離」に該当していた．しかしその後の歴史的経緯の中でイスラム教の信仰を守りつつもヒンドゥー文化に適応しつつ共生するに至ったため，「統合」に変化したと評価することができる．しかし，このように論じたとしても「分離」がどのような歴史性を経て「統合」に至ったのか，その実相が具体的に示されたことにはならない．また，グローバリゼーションが進行した現在の世界では，かつて理想化された単純な「多文化共生」を疑問視し，批判的に乗り越えようとする議論も現れつつある（ハージ 2022）．「多文化のバリ島」や「寛容性のバリ島」ということは様々な論文で多く報告されてきた．しかし，先の論文[4]で考察したように，マイノリティであるムスリムコミュニティーおよびニャマ・スラマ（イスラム教のバリ人）の人びとは，バリ文化を受容し，ともに社会で共存しているように見えるが，実際にはそれと異なる側面があり，ヒンドゥー社会の受容はマジョリティであるヒンドゥー社会が支配者であるという強い認識に由来するものであることを報告した．

一見して「統合」に見えるバリ社会が，その現実において，やや異なる側面を持つのだとすると，Berry の示した 4 つの類型には当てはまらない，バリヒンドゥー社会に特有の社会のあり方を理解する必要がある．この点は筆者の目にはさしあたり，次のように映る．バリヒンドゥー社会は，参入者であるムスリムに対して，共同生活に必要な範囲で自分たちの言語と文化を尊重することを求め（同化），また一定の範囲で住居や接触を緩やかにコントロールしながら（隔離），その上で異なる言語や文化を認め，参入者が持つ文化を寛容に受容しようと様々な実践を行っている（多文化）．これにより，異なる文化的背景を持つ他者と共存する社会を構築しているのではないだろうか．

この点をさらに深く追求するべく，本稿では，バリ島での生活に慣例として深く定着している多文化共存のための社会的実践に着目し，これを一種の「暗黙知」として捉えることで，バリ社会におけるヒンドゥーとムスリムの共存のあり方を理解することを試みる．科学哲学者のポランニー（2003）は，「私たちは言葉にできるより多くのことを知ることができる」と指摘し，「暗黙知」の概念を提唱した．ポランニーによると，暗黙知は，科学者による新規な法則の発見や名医による隠れた病理の診断など，きわめて独創性の高い「知」である一方で，目分量で調味料や薬剤の量を調整したり，慣れた手つきで道具を使いこなしたりするような場面で，「身体で知っていること」を通じて発露するような習慣的実践に裏付けられた「知」でもある．バリのローカルな共同体で行われる各種の実践の中には，バリヒンドゥー自身も明確

に言語化しないまま古くから続く慣例として続けているものが多く見られる．これらは身体化された一種の暗黙知として，バリ社会における多文化共生の実践を支えているように思われる．以下では，これら慣例的に続く実践の含意を読み解くことで，バリ社会の持つ「伝統の知恵」がどのような根を，どのような方向に広げているのかを見極める．

3. 両宗教を結ぶ「伝統・地元の知恵」 *Kearifan Lokal*（Local wisdom）

これまでの報告において，バリにおける様々なコミュニティが互いにコミュニケーションをとるための社会的・伝統的組織，およびその実践としての例として，スバック *subak*（灌漑組織），スク / スカ *sekah*（任意集団），ゴトンロヨン *gotongroyong*（相互扶助）などの実践に関しては，これまで多数報告されてきた（吉田 1992 他）．しかし，バリ島独自の多文化共生の概念は上記以外にも，世紀を超えて伝統の習慣としてまた地域住民の伝統の価値観として古くから存在してきた．それらは「地域の知恵」または「伝統の知恵」*Kearifan Lokal*（Local wisdom）と呼ばれているものである．バリヒンドゥーの人びとが行う全ての行動は，地元の知恵と伝統文化から切り離すことができない（Sumiai 2017）．ここでいう伝統とは，ダイナミックであり，時代の変化とともに新たな部分を吸収し常に創造されているものを指すだろう．このバリの多文化共生の伝統的な概念は，民族や宗教を超えた社会的（文化的）な伝統組織によって形成された．これは王国の時代（17 世紀から 18 世紀頃）から存在していたとされ（Suwitha 2016），現在では，このような伝統が拡大，発展し，社会的な紐帯をなす実践として様々な形をとり，異教徒間で行われているのだ．

Budi（2018）は，バリのイスラム教徒とヒンズー教徒の間の社会的関係において，長い間生活様式となっているバリ特有の「知恵」は宗教紛争を最小限にすることができると言及している．バリの伝統の文化的価値体系である地域の知恵は，文化と宗教の間の強固な信頼性であり，バリに住む異教徒間のコミュニティ生活の根源となっている．また Dewi（2017）はバリのイスラム教徒と非イスラム教徒の両方のコミュニティにおいて「地元の知恵」によって寛容な社会生活を作り出したと報告している．ではこの「地元の知恵」または「伝統の知識」と訳される *Kearifan Lokal*（Local wisdom）とはいかなるものなのか，またそのような概念によるいかなる実践が，どのように行われているのか以下に考察していく．

4. ヒンドゥー哲学に基づく伝統の知恵 *Kearifan Lokal* の概念とその実践

異教徒間の調和を確立するための指針としてヒンズー教徒が抱いているカギとなる最も重要な概念を大別すると 1 つ目は，“*Tat Twam Asi*”，2 つ目は “*Menyama Braya*” である（Basir 2018）．また “*Menyama Braya*” には様々な応用形態が存在する．これらの概念はすべてヒンドゥー哲学によるものである．

“*Tat Twam Asi*”，“*Menyama Braya*” に関しそれぞれ考察していき，最終的にはそれをいかにしてバリヒンドゥーが捉え，ヒンドゥーとしての支柱となっているかを紐解いていく．

4.1 「あなたは，わたし」“*Tat Twam Asi*”

Tat Twam Asi とは，サンスクリット語を語源とし，「私はあなたで，あなたは私」を意味する．人間は本質的に「1 つ」であり，その 1 つの人間とは神の創造物で，尊厳すべきものであることを示している（Sumiati 2017）．Sulistiont , Yusuf, Hidayat（2018）はバリヒンドゥーが考える多元的社会を樹木に例え，以下のように説明している．木の根は tat twam asi（私はあなた，つまり人間は本質的に 1 つ），茎は vasudewam khutumbhakam（私たちは家族），menyama braya は枝，葉，花，であり，果実は調和である．つまり，その木は成長し，結果として枝葉が茂り，花，果実を実らせる．木から実った枝葉や花，果実こそが調和（Menyama Braya）であるという解釈ができるのではないだろうか．このような概念は，多元的なヒンドゥー社会が相互に尊重，理解また援助しあい，それが実現となれば，異なる宗教者間での共存が進展していくことができるということを説明していると考察できる．そして人間を一つの秩序の中で等しくさせる概念を持っていることも考察できる．

木の根を「わたしは，あなた」と比喩した *tat twam asi* についてもう少し付け加えたい．これは，古代イン

ド哲学 TAT TVAM ASI（梵我一如）に由来するものであると考察できる．梵我一如とは，梵（ブラフマン：宇宙を支配する原理）と我（アートマン：個人を支配する原理）が，もとは一つのものであり（梵我一如），それを自覚することで輪廻・業報の世界からの解脱をはかるという思想である．つまり，アートマンはブラフマンと同一であり，言換えれば，「自分も他人も全ては一つ」と考えられるものである．社会的実践として，このアートマンとブラフマンの一体性の概念が強く反映されているバリ社会での事例を以下に述べる．

日本人のガムラン（盤打楽器による合奏の民族音楽）奏者の第一人者として有名な皆川（1994）は，バリヒンドゥー社会における人間関係をガムランの「コテカン」に喩えて論じている．先にコテカンについて簡単に説明しておくと，コテカンとはガムランの最も基本的な奏法で，ひとつのパターンを２人の奏者で分担するものである．A パターンと B パターンを組み合わせ C という旋律を浮かび上がらせるものである．皆川は以下のように論じる．自分が演奏するパートは半分の意味しか持たず，仲間のパートと合わさって初めてひとつの音楽的実体が出来上がる．弱い者は強い者に負けぬよう全力を出し，強い者は弱い者に合わせて力を加減する．音楽を完成するためには相手を自分の分身だと思い演奏する．つまり「お前は私の一部で，私はお前の一部である」（1994：170）．また実際の社会においても自分と他人の境界がなく「みんなが自分」とも論じている．

皆川の指摘は，身体性の観点から，さらに次のように展開できるように思われる．コテカンの演奏は２人の奏者が同じパターンを演奏するわけでなく，1 人が A パターンを，もう 1 人が B パターンを分担し，それが合奏において有機的に組み合わさるときに全体として C という旋律が浮かび上がる．近年の身体性認知科学ではこうした現象を「あいだ（in-between）の創発」という観点から説明する（Fuchs & De Jaegher 2009; 田中 2017）．人間の社会的理解（あるいは一般的な他者理解）は，非言語的なコミュニケーションも含めた身体的相互作用の同期と同調によって下支えされており，相互作用が十分にうまく噛み合うときに，コミュニケーション当事者が間主観的に共有できる「あいだ」が創発する．各人は「あいだ」に参入している限り，そこから外れて個体であるときとは異なる仕方で振る舞い，いわば互いの気持ちが手に取るように分かるような状態が出現する．コテカンを演奏する２人の奏者もおそらく，演奏が高度に噛み合っている最中は，この「あいだ」に参入することで「私はあなた」「あなたは私」「みんなが自分」といった自他融合的な状態を活き活きとした身体感覚とともに経験しているのではないだろうか．

まさにアートマンとブラフマンの一体性がよく表されている事例であるが，皆川は一方で，バリ人は保守的で閉鎖的（1994：168）であるとし，家族であれ「自分以外は他人」という冷たい印象を受けると言う（1994：169）．これもまた，身体性の観点からすると示唆に富む指摘であると思われる．先に指摘した「あいだ」は，コミュニケーションにおける身体的相互作用が噛み合うかどうかに依存して，出現したり消滅したりするのである．コテカンを合奏する２人の奏者のように，他者の挙動に自分の挙動を同期・同調させている状態では，バリ人はおそらく自他融合的な状態で，またその一方で，「あいだ」が解消されている場面では，おそらく「自分以外は他人」といういわば冷たいモードで振る舞っているのである．他者との身体的相互作用を，同期させたり，非同期にしたり，ということを社会的文脈に応じて高度に使い分ける文化的所作がバリ人の間では共有されているということであろう．この点は，皆川が一元論的解釈をコテカンに加えている一方で，伝統的にはガムランが二元論的なインドネシアの宇宙観を反映した音楽構造を持っていることとも類比的かもしれない．「あいだ」を通じた自他融合的状態と，二元論的に「自分以外は他人」という状態とをダイナミックに往復することが，バリヒンドゥー文化に根ざした身体的なあり方であると言うことができるかもしれない．皆川はこうも言う．親しくなれば自分と相手の区別がなくなるまで身内に取り込もうとする一方で，彼ら一人ひとりの内には悲しい孤独と戦っており，その孤独と戦う支えになっているのが，宗教と自然との関りである（1994：231）．まさにこのことは，「人と人の関り」，「人と自然との関わり」，「人と神との関り」を示したトリ・ヒタ・カラナ（三者との調和：ヒンドゥー哲学）[5] の概念が暗黙知として身体に取

り込まれているといえるであろう．（トリ・ヒタ・カラナに関しては紙面を変えて論じる）．

4.2　異文化間コミュニケーションのベースとなる *"Menyama Braya"*

"Menyama Braya" とは，インドネシア全土に古くから根付いている村の相互扶助の慣習であるゴトンロヨン *gotong royong* から分派したバリ独自の概念の総称である．まず *gotong royong* についてふれておくと，「自分が持っているもので相手を助ける」という意味で，村単位で関わる道路や公共施設の建築，維持，管理に参加し，社会・組織の構成員同士が互いに助け合う無料奉仕活動のことを指す．これは村社会における共同体への帰属意識の強さが根底にある．この *gotong royong* 精神の下部概念として様々な形で現れたのが *"Menyama Braya"* である．言葉の意味は，nyama は同胞，braya は友人を意味する．また，血縁や親戚を意味する nyama= 兄弟・同胞に由来するもので非ヒンドゥー教徒やその集団を共同体の一部として考えることを指す．*Menyama Braya* という言葉そのものはもともとバリヒンドゥー社会独自で用いられていた文化用語だったが，非ヒンドゥー教徒が移民として 14 世紀頃から移住した後は，異教徒達との社会的関係を指すようになり，その概念や意味は広く捉えられるようになった（Suwitha 2016）．端的に言えば，ヒンドゥー教のバリ人が非ヒンドゥー教徒に対する（主に，対ムスリム）人間相互の愛，隣人愛の精神のことと言え，それはまた親族である，とする考えである．*Menyama Braya* の概念の根底にあるのがトリ・ヒタ・カラナ（ヒンドゥー哲学）による *"belahan pane, belahan payuk celebingkah batan biu gumi linggah ajak liu ada kene ada keto"* だと言いう（Pageh 2013）．その大意は「多くの違いがあるが，我々はそれらを受け入れる必要がある」である．それらは宗教を同質化するのではなく，相違の正当化に基づいているという．

実際に，14 世紀頃から移民としてバリに根を下ろしたムスリムに対し，バリヒンドゥーたちは，彼らをニャマ・スラマ Nyama Slama（Nyama = 兄弟・同胞，Slama ＝ムスリム）と呼んでいる（東海林 2020）．また，ムスリム以外にも，Nyama Kristen（キリスト教の同胞），Nyama Cina（華僑の同胞）と異教徒住民を呼ぶ．要するに *Menyama Braya* という概念の実践とは，前出の「*Tat Twam Asi*」（あなたは，わたし）のいう抽象的な概念が身体化（embodiment），具体化された（to be embodied）ものであると言えるのではないだろうか．では実際には，この概念が具体化され日々の実践として行われているものをいくつか例をあげる．

まずは，*Ngejot* と呼ばれる食事交換である．これは宗教的儀礼や祝うべき行事，祭日の際に異教徒の隣人，仲間に食事を提供し合うことをいう．例えば，イスラム教徒のイドゥルフィトリ（断食空け大祭）には，豚肉を使わない料理作りをイスラム側からヒンドゥー側の隣人や仲間に提供する，一方，またガルンガン [6]（ヒンドゥーの祝日）では豚肉を使ったラワールという伝統のお祭り料理を食べることが習慣になっているが，その際には，ラワールアヤム（アヤム＝鶏肉）という豚肉の代わりに鶏肉を使ったもので，特別に調理し，ヒンドゥー側からイスラム側に提供する．またカトリック側はクリスマスにヒンドゥー側に食事やお菓子を提供する．このように主要な祝日，儀礼の際にそのコミュニティ独自の料理を他宗教の隣人に配ることで，宗教の祝日を無事に迎えられた喜びを自分たちも共に祝っているのだ，ということを表明している．このような実践は，隣人と共に幸せを分かち合う，「家族の絆」とよばれている．他宗教から提供された料理を食すことは，相手に対する嫌悪の情を消失させるための行動でもあり，また互いに，害を及ばさないという相互の信頼関係の意志表示でもあるという（Pitana 2020）[7]．他宗教の食事に関する禁忌を避けるために，わざわざ代用品を使い，互いの宗教的料理を振舞い合う，ということに大変大きな意味が隠されている．つまりヒンドゥー側はイスラム側の食事を頂き，反対にイスラム側はヒンドゥー側の宗教食を頂く．このことは互いの異なる宗教を介してパースペクティヴの交換を行っているのである．

加えて注目すべきなのは，食事交換の実践が相互的であることである．一般に，人口比においてマジョリティとマイノリティが明確に分かれる場合，マイノリティ側が自文化への理解を求めてマジョリティに働きかける工夫はしばしば見られるが，その逆はまず見られない（例えばマイノリティの日系移民が移住先のマジョリティの

味覚に合わせた日本食を現地のフェスティバルで提供するような場合を想定するといいだろう）．しかしバリでは，互いの宗教的お祝い料理を工夫して提供し合う場面では，マジョリティであるヒンドゥー側もまた，イスラム側の食文化を尊重した料理を提供している．つまり，一般的なマジョリティ・マイノリティ関係に内在する立場の優位性を超えて，マイノリティを尊重する態度が見られるのである．この食事交換では，受け入れる側－受け入れられる側が行事によって交代することで，通常は一方向的になりがちな社会実践の相互性が実現されている．田中（2015）は，社会的認知における相互理解の感覚が，対人コミュニケーションにおける非言語的次元も含めた身体的相互作用の同期を通じてもたらされると指摘する．バリにおける食事交換の実践は，まさに「食事」という身体レベルでのコミュニケーションを通じて相互理解を促進する暗黙知として機能していると考えられる．

他の伝統の知恵には，*Ngupoin*，*Medelokan*[8] と呼ばれる相互扶助がある．これらは，冠婚葬祭において儀礼が行われる際に，訪問（慰問）し祝福や弔問を述べ，さらに宿泊施設の提供や儀礼の準備，手伝いをすることを意味する（Basyir 2022）．例えば，ヒンドゥー慣習村（ヒンドゥーコミュニティ）で結婚の儀礼や死の儀礼が執り行われる際にはその村の *banjar* バンジャール（村の下部組織：村のヒンドゥーコミュニティーグループ）の慣習に沿って執り行われる．バンジャールは，最高権力を持つ共同体（ギアツ 1990）とも言われる．簡単に言えば，町内会のようなものでもあり，しかしそれよりももう少し近い親族のような共同体ともいえるものである．いずれにせよ冠婚葬祭時，バンジャールの組員は総出で昼夜を問わず，準備などに取り掛かるのだ．この場合，イスラムのバリ人はバンジャールには加入していないため，本来ならば準備を手伝う必要はない．しかしバリの地に住む同胞として，隣人として，つまりバリ島民として彼らなりの相互扶助を行っているのではないかと考察できる．バリヒンドゥーにとって儀礼，とくに死の儀礼は，人生の中で一番の大イベントである．儀礼を行うために何年も年月をかけ費用を作り，様々なプロセスを経て行う．なぜなら，バリヒンドゥーでは人間は死んでしまったら「終わり」ではないと考えている．魂は永久不滅であり，その魂が天へ昇り，ヒンドゥーの神々の近くで霊となると考えられているのだ．このようなことからバリの死の儀礼（火葬儀礼）はあの世への門出を祝うものであり，その儀礼は豪華にすればするほど残された遺族の社会的信望が高まるとされている．このように，遺族に大きな余波を与える死の儀礼にバリムスリムは，訪問し，儀礼の準備に携わるのだ．言うまでもなく，死と死後をどう考えるかは宗教の根幹をなす論点であり，ムスリムがヒンドゥーと同じ霊魂観を持っているわけではない．にもかかわらず，このように死の儀礼に際して積極的に儀礼に参加する態度は，同胞として同じコミュニティで生きているという自覚を強く示すものではないだろうか．哲学者のハイデガー（2013）は，共通の社会的実践に参与する者として人間（ハイデガーの言う「現存在」）が個別の存在者ではありえないことを示すため「共存在」という概念を提示している．ハイデガーは一般的な意味での社会的実践（社会的生産のための労働）に共同で従事しているとの観点から人間の共同性を強調したが，儀礼ではこのような意味での共同性はさらに強まると言っていいだろう．死者の魂を天へと送るコミュニティの儀礼を同胞として手伝うことは，一般的な社会的活動に共に参与するよりもずっと強く，象徴的な絆で結ばれた「共

図 2　食事交換

イード・アル＝アドハー（Eid ul-Adha: 犠牲祭）当日，イスラムの隣人から菓子と肉煮込みを贈られたヒンドゥー教徒の筆者友人．（首にかけたストールはムスリムから食物を対面で頂く時，頭と首を覆うために使用）

存在」としての自覚を培うことに寄与していると考えられる．

以上が地元の知恵と呼ばれるものと，そこから読み取れる実践的な含意である．筆者はこれまで現地で実際に調査を行ってきたが，ヒンドゥーが異なる他者との共存について具体的にどのような実践をもって多文化社会が構成されているか，どのように彼らと接し，いかなる実践を行っているか，また *Menyama Braya* に関して，詳細説明を要求しても（インタビューなど）具体的，かつ明確な答えを聞き得ることは非常に少なかった．しかし，たとえ，「自分が異なる他者に対し，何を感じているか」ということが意識の上にない状態や，具体的な言葉として説明できないものであったとしても，いや，逆にそうであればこそ，これらは暗黙知として日々の実践を通じてバリ社会を形成しているのである．冒頭で述べたように，バリ社会ではヒンドゥーとイスラムが共存した多文化共生社会であるという報告が多数存在する．本論では，何によって多文化共生社会が実現可能となっているのか，様々な実践（地元の知恵）から実例を挙げてきた．哲学者のメルロ＝ポンティ（2020）は，他者理解の根幹に「間身体性」の次元があることを指摘している．他者を理解することは，抽象的な他者の心や頭の中を理解することから始まるのではなく，他者の身体を知覚し，自己の身体を通じて他者の意図を把握することから始まる．食事交換や儀礼時の訪問は，ヒンドゥーとムスリムが互いの身体を同じ場所に寄せ合い，非言語的で身体的なコミュニケーションを重ねることで成立している．そのようにして積み重ねられる身体的実践が，暗黙知としてバリという土地における共生を支えているのである．当人たちはそうした身体的次元での実践であればこそ，その含意について明確に意識することができないし，インタビューを受けたところで言葉にすることも容易にはできない．だが，そうした実践の中にこそ，人類学的に読み解かれるべき知恵が含まれているのである．

5. おわりに

バリ人の伝統的な考え方や価値観は，時代の変化や必要に応じて他の文化の要素を吸収し，生成してきた．このようなことは異文化に寛容であることを反映している．*Menyama Braya* には長い歴史があることが分かった．このような概念は，単一国家の文脈から言えば，バリの人々の祖先が強く夢見てきた概念である．彼らは他の民族を親戚とみなしていたのだ．

バリ島の多文化主義に関する考察はこれまで多数議論されてきた．Berry が類型化した，参入側の文化変容モデルでは，参入者（個人）が，自身の文化的アイデンティティを保持するのか，または，喪失するのか，ということを，受け入れ社会との関係性から「統合」「同化」「離脱」「周辺化」の 4 つで示したものであった．しかし，バリ社会では 4 つの枠に当てはまらない，もう 1 つの社会的枠組みがあることが，地元の知恵の実践から明らかになった．社会が同化する側，される側という枠組みを超えて，互いが受け入れる側であり，そして同時に受け入れられる側にもなる．つまり参入側と受入側が固定されていないパターンが存在するのである．このことが，多文化共生を可能にしているといえないだろうか．

インドネシアには特有のゴトンロヨン（相互扶助）が全土に根強く残っており実践されている．その実践をさらにバリでは細分化し，様々な形で広く深く発展し今も続いているのだ．それが同民族間での実践に留まらず，「伝統の知恵」としてバリ全土に深く広く根を張り巡らせているのである．これはバリ特有の文化の一つともいえる．この地元の知恵こそが「多様性のバリ」を可能にしている要因であると結論付けたい．バリのように多様な宗教や文化が共生している地域はジャワや外島にもあるが，対立や紛争が絶えない状況である．イスラムマジョリティの国家の片隅で，マイノリティバリとして，地元の知恵は，人びとの生きる知恵としてバリに根ざしている．また地元の知恵はバリという局所的で受け継がれているものではあるが，これがインドネア全土に広まることが国家の目指す「多様性の統一」につながるのではないだろうか．

謝辞：

本稿の執筆にあたり，東海大学文明研究所所長，田中彰吾教授に丁寧かつ熱心なご指導を賜りました．遠く青森から，深く感謝の意を表します．

参考文献

I. M. Pageh（2013）Analisis Faktor Integratif Nyama Bali-Nyama Selam,Untuk Menyusun Buku Panduan Kerukunan Masyarakat Di EraOtonomi Daerah. Jurnal Ilmu Sosial dan Humanior. Vol. 2, No. 2, pp.239-248

大川洋史（2009）「文化変容モデルの誕生―経営学輪講 Berry（1976）―」『赤門マネジメントレビュー』8 巻 7 号　pp.293-408

ガッサン, ハージ（2022）『オルター・ポリティクス―批判的人類学とラディカルな想像力』塩原良和，川端浩平（監修），齋藤剛（その他），前川真裕子（翻訳）明石書店

倉沢愛子（2009）「ヒンドゥーとイスラムの調和的共存」倉沢愛子，吉原直樹編『変わるバリ・変わらないバリ』勉誠出版，pp.69-88

クリフォード・ギアツ（1990）『ヌガラ―19 世紀バリの劇場国家（小泉潤二訳）』みすず書房

スティア，プトゥ（1994）『プトゥ・スティアのバリ案内』鏡味治也・中村潔訳，木犀社

田中彰吾（2022）『自己と他者　身体性のパースペクティヴから』東京大学出版会

マルティン・ハイデガー（2013）『存在と時間　全 4 巻』熊野純彦（翻訳）岩波文庫

ポランニー，マイケル（2003）『暗黙知の次元』高橋勇夫訳　筑摩書房

増野亜子（2016）「バリのムスリムの太鼓ルバナ」『月刊みんぱく 12 月号』pp18-19.

皆川厚一（1994）『ガムラン武者修行』パルコ出版

モーリス・メルロ＝ポンティ（2020）『精選　シーニュ』廣瀬 浩司（翻訳）ちくま学芸文庫

吉田禎吾（1992）『バリ島民』弘文堂

Suwitha ,P（2016）Local Genius in the Rural Area of Bali: from 'Menyama-Braya' to Multiculturalism *International Journal of Linguistics, Literature and Culture* Vol. 2, No. 2, July 2016, pp. 81-90.

Ambary, H.（1985）"Mesjid kampung Ge`lge`l, kabupaten Klungkung（Bali）". *L'Islam en Indonesie II*. Volume. 30, pp. 39–41.

Basyir, Kunawi（2000）CULTURAL Cooperation and DIALOGUE between Muslims and Hindus in Bali *Prajñā Vihāra* Vol.19 No1, January - June 2018, pp.41-58

Shogo Tanaka（2017）Intercorporeality and aida: Developing an interaction theory of social cognition *Theory & Psychology* Volume 27, pp.337-353.

_____（2015）"Intercorporeality as a theory of social cognition" *Theory & Psychology* Volume 25, Issue 4, pp. 455-472.

Basyir, Kunawi（2018）Cultural cooperation and dialogue between Muslims and Hindus in Bali. *Praja Vihara - Journal of Philosophy and Religion*, 19（1）. pp. 41-57.

Budi Sulistiono，Akhmad Yusuf and Irvan Hidayat（2018）Local Wisdom in Muslim Social　Community in Bali Province:A Study of Tolerance. *Advances in Social Science, Education and Humanities Research*, volume 302 pp56-59.

Berry, J. W.（1983）. Acculturation: A comparative analysis of alternative forms. In R. J. Samuda, & S. L. Woods（Eds.）, *Perspectives in immigrant and minority education* pp.65-78. New York: University Press of America.

Berry, J. W.（1984）. Cultural relations in plural societies: Alternatives to Segregation and their sociopsychological implications. In N. Miller & M. B. Brewer（Eds.）, *The psychology of desegregation* .pp. 11-27. Orlando, Florida: Academic.

Slama, M.（2014）"From Wali Songo to Wali Pitu:The Travelling of Islamic Saint Veneration to Bali," Brigitta Hauser-Schaubin and David D.Harnish eds. *Between Harmony and Discrimination:Negotiating Religious Identities within Majority-Minority Relationships in Bali and Lombok*. Leoden: Brill.pp.112-143

Vickers, A（1987）"Hinduism and Islam in Indonesia: Bali and the Pasisir World" *Indonesia*, No. 44, pp. 30-58

Fuchs, T., & De Jaegher, H.（2009）. Enactive intersubjectivity: Participatory sense-making and mutual incorporation. *Phenomenology and the Cognitive Sciences*, 8（4）, pp.465–486.

1）1999 年 1 月 19 日キリスト教徒・イスラム教徒の間でマルク諸島・アンボンの宗教紛争が起った

2）2001 年 2 月 17 日ダヤック族とマドゥーラ族の間に武力衝突が生じ，数十日続いた．

3）東海林恵子（2020）「バリにおけるマイノリティ「バリムスリム」―殺された聖人ワリピトゥをめぐるナラティヴ分析―」東海大学文明研究所『文明 No26』27 頁～ 45 頁

4）同上

5）サンスクリット語で，「トリ＝ 3」，「ヒタ＝安全・繁栄・喜び」，「カラナ＝理由」という意味．神と人（パラヒャンガン），人と人（パウォンガン），人と自然（パルマハン）の調和を重視するヒンドゥー哲学による考え方．これによって人々は幸せに過ごし，喜びを感じることができるという．

6）ヒンドゥーの神々や祖先の霊，また自然霊が地上の寺院に降り立つ日．通常豚肉の内蔵を使ったラワールというお祭り料理を食す．

7）KOMPAS.com 2020,2,18 https://travel.kompas.com/read/2020/02/18/091500327/ngejot-tradisi-lintas-keyakinan-di-bali-yang-sarat-makna?page=all（最終アクセス 2021 年 12 月 12 日）

8）村（desa adat）によって慣習がことなるため名称も異なる．例えば，デンパサール（州都）では Mapitulung と呼ばれる場合もある．

実存現象学的研究――心理学の代案としての「人間科学」

スコット・D・チャーチル＊1，エイミー・M・フィッシャー＝スミス＊2
（監訳：田中彰吾＊3，訳：村井尚子＊4・植田嘉好子＊5・奥井遼＊6）

＊1 Scott D. Churchill. Professor, University of Dallas
＊2 Amy M. Fisher-Smith. Associate professor/Clinical psychologist, University of Dallas
＊3 東海大学教授，＊4 京都女子大学教授，＊5 川崎医療福祉大学准教授，＊6 同志社大学准教授

〔翻訳〕

【凡例】

・本稿は以下の論文の日本語訳である．
Scott D. Churchill and Amy Fisher-Smith. (2022). Existential phenomenological research: A “human science” alternative for psychology. In B. D. Slife, S. C. Yanchar, & F. C. Richardson (Eds.), *Routledge international handbook of theoretical and philosophical psychology: Critiques, problems, and alternatives to psychological ideas* (pp. 473-494). New York, NY: Routledge.
・訳出は二段階に分け，まず，序文を田中が，1 節を村井が，2 節前半を植田が，2 節後半を奥井がそれぞれ訳出し，後に全体の修正および訳注の補足を田中が行なった．
・訳語や文献について補足が必要と思われる箇所には〔……〕として監訳者が補足を加えた．また，ドイツ語，フランス語原典からの引用で日本語訳がある場合は，なるべくそれらを利用したが，訳文を統一する必要から文章を一部改変している．
・イタリックで強調された箇所は，訳文では下線を付して表示した（ただしインタビュー・データからの引用文，書籍の題名を除く）．
・訳文としての読みやすさを考慮し，原著にはない節番号を付した．

私たちは否応なく人間行動に惹きつけられる．心理学をとても魅力的なものにしている一つの理由はこの点にある――私たちは人間の行動，特に理解に苦しむような行動を動機づけるものが何なのか知りたいのである．一例を挙げよう．2021 年の 1 月から 4 月の間に少なくとも六件の銃乱射事件が合衆国では起こっており，その多くで銃撃犯の動機はいまだ解明されていない[1]．このような悲劇的事件に焦点を当てたいわけではないが，こうした出来事ゆえに私たちは悲しむとともに混乱し，人間的な動機を理解したいと思うのである．私たち自身の生活をめぐる状況さえ，私たちを突き動かす．現在のパンデミックのインパクト，そして Covid-19 が予測できない仕方で私たちの行動と精神的健康を形づくった過程を考えてみよう．例えば，アメリカ心理学会が実施したアメリカで進行中のストレスに関する調査によると[2]，私たちの多くは次々生じるパンデミックの影響に引き続き苦闘している．最新の調査結果が示しているのは，パンデミック以降，成人の大多数がより多量の飲酒をし，体重が増加し，睡眠時間が本人の希望より長時間化したり短時間化したりしているということである（[2] ”Key Survey Findings” より）．もっとも，この種の調査は私たちが何をしているかを伝えているだけで，(パンデミックのストレスに対する全般的な行動反応ということ以外には)行為の背景にある動機を必ずしも伝えてはいない．

この誤情報と偽情報の時代において[3]，ソーシャルメディアとその切り抜きは，こうした人間行動について各種の仮説，理論，説明（誇張され，扇情的で，誤解を招くような説明でさえ）の例を重ねて飽きることがないようだ．それが恐るべき銃乱射事件の説明になっているか，私たちが抱えるパンデミックのストレスの背景にある理由と原因の説明になっているか，にはお構いなしである．問題は，これらの「説明」がしばしば誤解を招くものであったり，あからさまな誤りであったりすることだ．実際，先日ニューヨーク・タイムズが伝えたところでは，よく使われる複数のソーシャルメディアの投稿が，未確認で無効な国民健康データベースを証拠として引用

しつつ，Covid-19 ワクチンが Covid-19 ウイルスそれ自体と同程度の死者を生じさせたと主張しているという[4]．ここには心理学が介入できるギャップが広がっている．厳密な方法論に則った応用心理学なら，良質なものと悪質なものを分離し，事実または知識を見分け，人間行動とその背景にある動機に関する意見や誤情報からそれを区別し，私たちを助けてくれると思われるのである．このようなわけで，心理学にまつわる私たちの問いはその方法をめぐる問いにある．心理学の方法は本当に良質なものと悪質なものを分離し，両者の違いをより正確に述べることができるだろうか？ 行動科学において信頼されている科学的方法を通じて，私たちが求める人間行動についての各種の事実と知識に接近できるだろうか？ 人間の行動と動機の意味を把握しようとして科学的方法が用いられるとき，その方法は本当のところ何を得ているのだろうか？

大体において，最も著名な方法は仮説化された因果関係に接近する（そして文書化する）目的のため，最初からすでに構造化されているのを私たちは知っている．すなわち，人間の行動と動機に関して調査後に与えられる説明は，因果的枠組みのもとで様式化されることが予め決まっているのであって，それというのも，方法それ自体がそのように構造化されているからである．このような因果的説明の優位性と，行動科学における経験主義的／実証主義的方法論への因果的説明の埋め込みを目にしながらも，私たちは他方で，心理学にはより広い方法論的伝統があり，多くの学者が方法論の多元性を認め論じていることも知っている[5][6][7][8]．つまり，量的な伝統と質的な伝統がともに存在することを知っているのである．とはいえ，行動科学において確立された方法であり，信頼性と妥当性のある証拠固めをするものとして頼りにされているのは依然として量的方法であって，経験主義と仮説演繹的で因果的な枠組みの伝統に根ざしたものである[9][10][11][12][13]．実際のところ，証拠に基づく知識固めをするのに用いられるそうした量的方法の一例は，心理療法におけるエビデンス・ベースの実践を確立するのに用いられる，二重盲検のランダム化比較臨床試験である[14][15][16]．このような量的研究デザインは真正の実験デザインであり，変数間の仮説的因果関係を分離して知覚できるために最初に称賛されるのである．

著者たちの見るところ，問題は，仮説化された因果関係を強調することで，予め推定された原因の観点から行動をつねに説明してしまう点にある．言い換えると，状況や環境の中に潜在する原因がもたらす結果として解明されるものとして，人間の行動と動機を私たちはつねに枠づけて（それゆえ事前に一定の傾向のもとで見て）いるのである．例えば，Covid-19 の隔離期間中の体重増加は，Covid-19 の状況内部にある影響力や原因（例えば孤独によって増大したストレスといった）の結果として枠づけられる――そして隔離の孤独が体重増加を引き起こすとの結論が与えられるのである．この種の説明は心理学だけでなくその外部でも蔓延しており，一種のあるべき品質を備えるに至っている．言い換えると，量的で科学的な方法に支えられた説明であれば，私たちはそれを見過ごし自明なものとして受け入れているのであって，説明そのものが持つ意義や，そこに含まれうる虚偽の前提について，立ち止まって考えることをほとんどしない．この自明性の一つの理由は，因果性それ自体と，因果性の持つ当然の意味に関する人々の全般的な信念に関連があると著者たちは考えている．この点は後に言及する．

著者たちが問題視しているのは，この認識論的かつ実践的な当然性，また，人間行動にとって説明と原因の占める重みが心理学において十分に理解されていないことである．主流派の心理学で（特に確立された方法論的観点のもとで）ほとんど考慮されていないのは，個人が自らの状況に直面して選択することで行なった行動を理解（understanding）するということである．この理解を通じて，私たちは個人の行動にとって意味ある動機づけの文脈を把握することができる．端的に言って，人々が自らの行動と動機を補強するような意味を作り上げる役割を果たしているような場合でさえ，自らの文脈と状況の中に置かれた行為主体として人々が見なされることはまずない．行動の背景にある意味と志向性，および人間の持つ動機を理解したいと望むのなら，私たちには別のパラダイムが必要である．個人が受動的に従っている外部の因果的な力を強調するのではなく，別の見方を取る必要がある．異なった方法論的枠組み，それも量的なもの

ではなく質的なものが必要なのである．

本章ではまず，行動科学において受容されている科学と方法論の見方の歴史的文脈――上述したような研究デザインへのより伝統的なアプローチ――について，「人間科学」のアプローチを求める歴史的な基礎づけと対比しながらふり返る．両者の違いはまさに，人間行動を原因／結果の観点から説明する試みと，人間行動を有意味な目標／志向の観点から理解する試みとを区別する歴史的な端緒である．第二に，特別な種類の質的方法論である実存現象学的研究（Existential Phenomenological Research, EPR）を代替的な質的アプローチとして提供する．実存現象学的研究は人間の経験を研究するうえで十分に最適化されており，それを因果的に説明するのではなく共感的に理解することを可能にする．第三に，実存現象学的研究を支える実存的な枠組みをさらに洗練させて，質的方法の中により良く位置づけ，個人の主体性を具体的状況において明確化できるようにする．別の言い方をすると，私たちの方法を用いればサルトル[17]（pp. 217 ff）〔邦訳第 I 巻 533 頁以降〕が「純化する反省（purifying reflection）」として記述したものに研究者も接近することができる〔訳注：サルトルの purifying reflection, réflexion purifiante には「純化する反省」と「浄化的反省」の訳語があるが，本稿では「純化する反省」に統一した〕．状況とその意味が主体に対してまさに現れるような仕方で，文脈や状況内での主体の志向性（または行為者の指向）を識別することが研究者にもできるようになるのである．

1．二つの代替的な「科学論」――自然科学的アプローチと人間科学的アプローチ

アカデミックな心理学の歴史を通じて，非常に奇妙なことが起こっている．科学的であろうとして，心理学者たちは自分たちの理論を断固として観察に基礎づけてきたのだが，それは観察の一つの様式，すなわち感覚に基づくデータを記録するという様式に本質的に限定されてきたのである．歴史的に見れば，これはまったく奇妙なことというわけでもない．というのも，科学では「経験主義（empiricism）」が登場し，ある人の発見は机上の空論や「第六感」的な直感ではなく，研究対象との感覚的な接触に基づいて行われるものであると意味するようになったからである．心理学という科学にとっての不幸は，私たち研究者が今日自己自身を見出す状況にある．それは，主題への最も直接的かつ忠実な接近法を提供しうる，まさにそのような知覚の様式を研究者としての私たちが捨ててしまった状況である．実際，心理学の歴史の大半を通じて，私たちは人間と動物を「科学的」な検証のための単なる「対象」とみなし，それを物質的側面に還元可能なもの，物理学，化学，生物学の法則によって支配されているものとしてきた．だが，「主観（subject）」または主体（agent）としての私たちの本性についてはどうだろう？ 主観的経験や主体的行動は，科学としての心理学の視野にはどのようにして収められるのだろうか？ 心理学がその使命を遂行するうえで，科学する方法をひとつ以上に必要とはしていないだろうか？

ブレンターノ[18]は，諸科学の領域を内容よりも接近法（access）に基づいて区別した最初の人物だった．すなわち彼は，科学の内容または主題の規定を，その内容を明確化するうえで活用される接近法の様式に即して位置づけたのである．物質的現実・生命体・感覚ある存在の領域に沿って（これはフッサール[19]とメルロ＝ポンティ[20]が現象学的探究のための「領域的存在論」として後に整理した通りだが）物理科学・生命科学・社会科学を区別するのではなく，諸科学をその「アプローチ」（ジオルジ）に沿って，方法論に従って与えられる「意味領域」（シュッツ）へと区分けしたのである．ブレンターノによると，「外的知覚」は感覚を介して物質的自然の領域（生命それ自体も含む）への接近を私たちに可能にする．一方で，「内的知覚」（これを「内観（introspection）」と混同してはならない）は，心理学の領域をもたらす．心理学の領域は，感覚に還元することのできない「直観」（anschauen あるいは「見ること」）を介して私たちに与えられるのである．ディルタイ[21][22]なら，この「内的知覚」を「理解（Verstehen）」――この語はおおよそ「共感的理解」と翻訳できるが――として明確化するだろう〔訳注：かつては Verstehen を「了解」と訳すことが多かったが近年では「理解」という訳語が定着しつつあるため，本稿でも「理解」で統一した〕．

ブレンターノおよびディルタイとともに，心理学的な

ものの領域は，19 世紀の唯物論的な基礎とその伝統から派生した生理心理学の外側へと拡がり，ディルタイが「人間精神の科学」と名づけたものへと至った．ブレンターノとディルタイが（そして後にはジオルジが）発展させたのは，じつに全く新しい心理学のアプローチだった．ハイデガー[23]が彼独自の生の哲学の生成と関連して書いているように，「問題は，古い理解のしかたの枠内で……新たな概念を獲得することにあるのではない．その反対に．根源的に異なる様式のもとでの理解へと……（自己自身に呼びかけ）気遣うことにあるのだ」（p. 139，強調は引用者）．

興味深いことに，ブレンターノが主著『経験的立場からの心理学』[18]を執筆してからほぼ一世紀後，ロロ・メイ[24]が，アメリカ心理学において両者の区別を「人間のディレンマ」と名づけた枠組みにおいて蘇らせている．すなわち，私たちの主題（人間）は「主観」としてと「客観」としての双方においてアプローチできると述べたのである．ところが，今日においてさえ（さらに 50 年以上が経過したことになるが），心理学者は人間的現実に対して，それがあたかも心理学にとって「客観」でしかないかのようにアプローチし続けている．「心理学において心（Psyche）を守ること」と題されたアメリカ心理学会ロロ・メイ賞受賞講演において，キーンはその所見をこう述べている．

> 科学であること，すなわち，問いではなく答えを求める方法であること，感受性ではなく技能を生み出す方法であることが，罪の起源なのかもしれない．しかし，科学を批判しても決して十分ではないし，意義があるとも言えない……私たちは，心理学者として，私たちの保持する諸価値が自らの仕事に関係ないと偽装するのではなく，諸価値に資するよう意識して科学を用いる必要があるのだ．心は，アメリカ心理学における干し首になり下がった．心理学では，社会の問い，歴史の問い，人生の問いへの感受性を求めることがあまりに稀になっている．（p. 225）

では実際のところ，心理学における心はどのようになってしまったのだろうか．

1-1. 問題の歴史――新たな「科学論」の必要性

さかのぼると一世紀以上も前になるが，ディルタイ[21]は実質的に科学を行うにあたって根本的に異なる二つの方法を対比させている．自然の秩序にとっては「説明（explanation）」（原因－結果を求めること）がその方法となり，「人間精神」（human spirit，Geist）にとっては「理解（understanding）」が必要とされるであろう，ということである．二つの領域それぞれが独自の「科学論」（Wissenschaftslehre）〔訳注：「知識学」や「学問論」と訳すこともある〕――あらゆる学問における「何を」（存在論的前提）と「いかに」（認識論的指向）をともに定義するのに役立つ哲学的基礎づけ――に値する．実際，ディルタイは，ブレンターノがフィヒテ『全知識学の基礎』[26]の仕事を発展させて作った道案内に従っている．『全知識学の基礎』は，ブレンターノとディルタイが登場する一世紀前に，科学と哲学の言説へと「科学論（theory of science）」を最初に導入したのだった．

「人間科学」アプローチの支持者が本質的に論じたのは，探究の「何を」が人（person）であるとき，そこに接近するための「いかに」もそれに応じて調整せねばならないということである．たとえば，人間が無機物や分子とは根本的に異なると考えるのなら，私たちのアプローチもそのことを考慮に入れる必要がある．人というものが，自らの行う選択によって自らを定義するものであると理解されるのであれば，私たちが用いる科学的アプローチは，研究を進める生きられた状況内での人間的自由を，観察し時には発見さえできるよう仕立てる必要がある[27]．「精神（Geist）」および「精神の（Geistes）」（それぞれ「精神（spirit）」および「精神に帰属する（belonging to the spirit）」という意味である）という用語を導入することで，ディルタイは，ゲーテまで遡るドイツ的伝統を呼び起こしたのである．その伝統とは，研究対象として人間の「精神」と「精神による知の方法」(注 1)について，ともに同時に関心を持つというものである．この表現を英語に訳す際のひとつの問題は，「精神」という語が，科学論では必要とされない宗教的含意を備えていることにある．ディルタイは，精神科学（Geisteswissenschaften）または人間精神の科学を発展させるにあたり，その原理を，人についての経験科学がその上に基

礎づけられるようなものに制限している．

ディルタイにとって人間とは，社会的・歴史的・文化的な生の文脈にその根を持つものとして最も良く理解されるのであって[21]，これらの文脈から人為的に切り離して理解されるものではない．それゆえ，ディルタイは，自然界における他の物的対象と同様に人間もまた自然法則の因果的諸力に従っているとする経験主義者／実証主義者の主張には同意しない．言い換えると，人が人であるのは，つねに文脈づけられ，「生の全体」[28]（p. 72）〔邦訳第一巻 243 頁〕に埋め込まれてあることにおいてなのである．全体性，もしくは社会生活における包括的なゲシュタルトの経験の強調もまた，ディルタイが知の基礎として経験上の感覚を強調する実証主義者と経験主義者を拒否した理由である．ディルタイは，事象と他者についての私たちの経験がそれ自体で全体的だと論じている．私たちが環境内で他者や事物に出会うとき，感覚の細切れ（経験主義者が主張する色の斑点のような生の「センス・データ」の細切れ）に出会っているのではない．そうではなく，私たちは意味のある全体，ゲシュタルト心理学者たちが地に対する図として後に記述することになるものに，直接出会っているのである[29]．これこそが還元不可能な「生の表出」というディルタイの概念，すなわち，私たちは分断された感覚印象の混沌ではなく意味深く理解可能なゲシュタルトであるような，豊かで秩序だった現象学的経験の中に埋め込まれているという概念の始まりだったのである．

自然科学と人間科学のアプローチのこうした区別を明確化しようと試みて，ディルタイはこう記している[21]．

> 説明心理学の代表者たちは，（説明的な「原因と結果」）の仮説を大規模に適用するのを正当化するため，物理学や自然科学の例を持ち出すのがつねである．しかし，本研究の冒頭であるこの場所で，次のことを確定しておこう．つまり，人間科学はその対象にふさわしい仕方で独自にその方法を決定する権利を持つということ，これである．……人間学（精神科学）は，何よりも次の点で自然科学から区別される．すなわち，自然科学が対象とする事実は，外から意識に対して現れ…しかも（観察者から）孤立して与えられる．これに対して人間学が対象とする事実は，実在として，生き生きした連関として，内からありのままの姿で与えられる．……われわれは自然を説明し，心的生を理解する．……心理学における仮説は，けっして自然認識におけるのと同じ役割を果たしているのではない．自然認識においては，あらゆる連関は仮説の構築によって成立し，だが心理学においては，まさに連関なるものは生きられた経験においてつねに根源的に与えられている．生は，いつも連関または一貫した全体として現に存在する．（p. 27）〔邦訳は 642-643 頁〕

実証主義者や自然科学の支持者が物的対象の知覚経験を分析しようとしたのと同様に，ディルタイは，生きられた経験に内在する意味，人間経験の「連関」や「一貫した全体」に含まれる意味を分析することを提案する．人間科学を特徴づけるこの並行過程をディルタイは理解（Verstehen）または理解（understanding）とした[21]（p. 52）．言い換えると，「人間科学」的な心理学に固有の焦点は，理解を通じて意味深いものなった「生の表現」であろうし，さらに言うなら，このような共感的理解こそ，人間諸科学における正当な知の基礎とみなされるのである．ディルタイが述べたところでは，理解することにおいて私たちは精神に備わるすべての能力――――感覚する，判断する，想起する，想像する，直観する，感じる，思考する――を用いる[21]（p. 55）．だとすると，「科学的心理学」の学徒として主題との出会いに向かっていく際，感知や直観や想像といった他の様式を排除し，センス・データと合理的説明だけが信頼に値すると主張する切り詰められた認知的アプローチを採用するよう私たちがしばしば教わるのは，なんと皮肉なことであろう．日常生活において私たちが周囲の他者の行動を観察したり，自分自身の行動を観察しようとするとき，私たちは単に感覚を信頼することや，単に因果関係を引き起こすこと以上のことをしている．人間（および動物）の領域にアプローチする際，私たちは洞察や驚きといった能力も用いているのである．実際ディルタイにとって，精神に備わるあらゆる力を合わせて行われる理解というこの反省的方法が明らかにしてくれるのは，究極的には「人の神秘（secret）」[22]（p. 177）であった．

ヴント，ミュンスターバーグ，ジェームズ，フェヒナーといった初期の心理学者たちはみな，自然科学の導きに従った実験に基づく心理学という科学だけではなく，人間または「文化」の心理学もあるのだと主張していた[30]．ミュンスターバーグ[31]は心理学における二つの科学を展開した――心的事象の因果的決定論に基づく説明心理学と，人間の意図を理解することに基づく目的心理学である．ウィリアム・ジェームズもまた，とりわけ『宗教的経験の諸相』[32]において，自然主義的でない心理学の展開を試みた一人だった．最も興味をそそるのはフェヒナー[33]であろう．彼は，

> 「昼の見方」と「夜の見方」を区別し，これらが現実の二つの側面に対応するとした．昼の見方においては，あらゆる事物が魂を持ち，意識をともない，生き生きとしている．他方，夜の見方においては，あらゆる事物が物質的である．昼の見方は「内なる立場」であり，一人称の立場であるのに対して，夜の見方は「外なる立場」であり，三人称の観点である（Heidelberger, 2004, p. 97 による[34]）．フェヒナーは昼の見方を拡大し，存在するあらゆる事物が内面を持つとした．それゆえ，フェヒナー（1860/1966）[35]は精神物理学をこう定義するのである．「肉体と魂の，さらに一般化して言うなら，物的なものと心的なもの，物理的世界と心理的世界の，機能的に独立した関係性についての精緻な理論」[36]．

実際，アルンハイム[37]によると，フェヒナーは一方では「経験主義者」であり，他方では「信仰厚き汎神論者であり，これまで書かれた中で最も詩的なエコロジーを私たちに残してくれた人物」（p. 857）である．心理学史における初期の学者たちを見るにつけ明らかになるのは，アカデミックな心理学の風景にデカルトの遺産が残した足跡は決して小さなものではないということである．

20 世紀初頭において，ディルタイの共感的理解の概念を大事にして人の研究に接近し（ケーラー[38]に見られるように，人だけでなく霊長類にも），デカルトの二元論を克服しようと継続的に努力していたのは，精神分析学者，ゲシュタルト心理学者，そしてドイツの精神医学者たちだった（これらについては，後にフッサール[19]とメルロ＝ポンティ[20]が現象学的探究のための「領域的存在論」を整備していくことになる）．しかしながら，行動主義が科学的心理学の分野を席巻すると[39][40][41][42]，行動の科学に対するこれら「障害物」の居場所は一掃されてしまった[43]．

それでは，ディルタイの人間科学のアプローチはどうなってしまったのだろうか．

1-2. 現代の心理学――人間の主観を作用因へと還元する

現代の心理学者たちは，理解と意味を強調する人間科学の伝統を無視し，説明と因果関係を強調する自然科学の伝統を好む傾向がある．言い換えると，自然主義的な定式化（すなわち原因と結果による説明）と量的アプローチを特権化する傾向があるということである．この傾向がとても強いため，私たちが「因果関係」に訴えるとき，それは典型的にはアリストテレスが作用因（efficient cause）としたものを意味するようになっている（行動科学における因果性に関するより入念な検証については［44］を参照）．

行動科学における作用因は，前件と後件，時間を横断する線形的な関連性を強調する（［13］［45］も参照）．ただし，アリストテレスはもともといかなる結果にも四つの原因を考慮したことに留意することが重要である．因果性にはこうした複数の意味があるにもかかわらず，心理学においても現代文化においても，私たちは因果性についての直接的な認識をひとつだけに，すなわち作用因だけに狭めてきた．私たちが論じるのは次のこと，すなわち，前件と後件との作用因という因果関係の意味は行動科学・社会科学・文化のいずれにも深く浸透しており，異なる種類を想像するのが私たちには難しくなっている，ということである．前件と後件という観点から見た直接的で暗黙の因果性理解は，シュッツ[46]が沈殿した信念として記述したものに沿っている．沈殿した信念とは，科学の領域から日常の言説へと転化し，とても深く浸透したがゆえに当たり前になった信念を言う．この種の因果的枠組みが自然科学の（量的な）方法論に組み

込まれていることはすでに見てきた通りである．たとえば，実質的な実験や疑似実験の計画において独立変数（independent variable, IV）と従属変数（dependent variable, DV）を結びつける関係性が作用因であるが，量的方法においてこの種の因果的関係性が明示的に特定されることは稀である．実際のところ，明示的な特定はおそらく無駄で不要なものとみなされるだろう．しかし当然のことながら，独立変数と従属変数の因果的関係性が広く受容されているため，量的方法論の枠内ではそれが沈澱して当たり前の前提となっていることに背いてしまうのである．ラドニツキー[47]はさらに言及して，科学実践における発想の「石灰化」と呼んでいる．このようにして，因果関係は私たちの前に現れていながら，同時に視界から隠されてもいるのである．たとえば，私たちは，因果関係についての日々の文化的理解においても，伝統的な方法論の観点からしても，虐待のような早期の有害な出来事が不安や抑うつを「引き起こす」と推定する[48][49]．

このように作用因が優勢になってしまったことで，アリストテレスがあげた他の三つの原因――行動科学と社会科学で周辺化され忘却された諸原因――はどうなったのだろうか．作用因に加えて，アリストテレスは，何かを構成する素材や物質を指す質量因，形・型・様式もしくはアリストテレスが事物の「本質」としたものを指す形相因，そして最後に，何かがそれを目指すところの結末・目的・目標を指す目的因，を導入した．アリストテレスにとって，人間の行動を含め，何らかの実体・行動・現象を説明するうえで，これら四つの原因すべてが必要なのである[13]．アリストテレスが四つの原因を強調したにもかかわらず，行動科学において最も一般的な説明は，作用因と質量因だけに通例では切り詰められている[44]．このような縮減が生じたひとつの理由は，心理学が自然科学的アプローチを強調し，そこでは，経験的観察がしばしば質量因および作用因的な説明と結びついてきたことにある．実際にも，神経生物学的な構造および／または化学に訴えて人間行動を説明するような質量因的説明が行動科学では一般的になっている．私たちが示唆しているのはこうした説明が間違っているということではなく，こうした説明が自然科学的な説明の形式から派生してきがちであるということである．

私たちの考えでは，理解と意味を重視する「人間科学」の観点から人を全体として研究するということが，忘却され，周辺に追いやられてきたのである．私たちが読者に乗り込むよう呼びかけたいのは，「自然の科学」と考えられるような心理学ではなく，物質還元主義や数学的定式化へと縮減することのできない精神的または人間的秩序の科学としての心理学なのである．この人間科学的アプローチは，人間の行動と経験を作用因と質量因に還元するのではなく，自由意志を全体像の中に取り戻すことを本質的な方法としている．確かに，私たちは自らが置かれた状況に左右されるが，私たちの経験と行動はそれらに還元できるわけではない．生物学的・環境的・社会的な影響を考慮はするものの，個人についての理解をそうした集団的な「原因」へと還元することは避ける．私たちの考えでは，次節で紹介する実存現象学的研究方法こそ，人間科学のヴィジョンを最も実りあるものにする最良のアプローチである．

2．現象学的に心理学する――自然科学の伝統に代わる「人間科学」

ジオルジが『現象学的心理学の系譜――人間科学としての心理学』[12]という画期的な著作を執筆した当時，質的研究法（という表現が一般に用いられる前だったが）の開発に関心を持つ多くの心理学者が現象学に目を向け始め，「自然の」科学ではなく「人間の」科学としての心理学に哲学的基盤を与えようとしていた．メイら[50]はすでに，実存的精神医学者（ビンスワンガー，ミンコフスキー，シュトラウス，フォン・ゲープザッテル）の仕事を彼らの基礎的なテキスト『実存――心理学と精神医学の新しい視点』に取り入れ，臨床心理学における舞台を整えていた．しかし，実存的現象学の文献に根ざしながら質的心理学の研究方法の開発に真に焦点を当てていたのは，1970年代にデュケイン大学にいたジオルジとその同僚および学生たちだった．現象学に基づく質的研究の発展に寄与した他の拠点としては，ダラス大学，シアトル大学，セイブルック大学，テネシー大学があげられる（この歴史の詳細については，［51］およびChurchill, Aanstoos, & Morley, 投稿中を参照）．

本章の2名の執筆者のうち，チャーチルは過去40年間，フィッシャー＝スミスは過去20年間にわたりダラス大学で現象学的方法を教え，卒業論文プロジェクトに応用するべくその発展にたずさわってきた．というのも，学部が創設された1972年以来，心理学を専攻するすべての学部生が心理学における総合試験として現象学に基づく卒業論文を執筆するよう求められてきたからである．最近では，チャーチルが過去40年にわたる学生との協働に基づいて，入門的な教科書『実存現象学的研究のエッセンシャル』[52] をAPAブックスとして上梓したところである〔訳注：APAはアメリカ心理学会（American Psychological Association）の略称〕．この教科書の目的は，主にアメリカ・カナダ・ヨーロッパの環境で，実存的現象学の文献研究と経験的な心理学研究への応用を半世紀行いながら私たちが皆で学んできたことを集約することにあった．

この方法の基本ステップは，自然主義に基盤を持つ実験心理学が発展させてきた科学の考え方とは根本的に異なる心理科学についての理解で満ち溢れている（心理科学における自然主義の歴史についてのさらなる考察は，［7］を参照）．存在論的な枠組みを発展させ自由・選択・超越といった実存的概念を前面と中心に置き，それにより，研究者が生きられた経験を分析する際の手ほどきとするのである．サルトル[53]（p. 91）〔邦訳166頁〕[17]（211-237）〔邦訳第Ⅰ巻533-546頁〕は「純化する反省」としての現象学的還元を提示したが（心理的決定論と自己欺瞞を生じさせる「不純な反省」と対照させて），このことにより，シュッツが「目的動機（in-order-to motive）」と「理由動機（because motive）」として言及したものを理解するための扉が開かれる．

アリストテレスの「四原因説」の用語を用いてまとめておこう．従来の実験的研究の方法は，人間の行動と経験の「質量因」および「作用因」を探索する．これは操作化または観察可能性という要求（すなわち質量因）の中に，そして処置変数と従属尺度との間に仮定される原因と結果の関係性の中に求められるものである．実存心理学は現象学的な基盤を備え，人間の行動と経験の「形相因」と「目的因」をむしろ目指すものである．後者のアプローチは，さまざまな「種類」の経験に備わる「本質」（すなわち「形相」）に到達すること，また，人間行動に内在する目的論において明らかにされるような，私たちの行動の真の「動機」を把握することに関心を持つ．与えられた状況内であれこれの行動によって成し遂げられる目標（つまり「目的」）を私たちは最終的に問題にするのである．

資料1：実存現象学的研究のプロセスの概要

1. リサーチクエスチョンを策定する
   (a) 一般的なトピックの領域を見つける
   (b) 予備的な反省と調査を行う
   (c) トピックを展開する：探求すべき状況を見つける——あなたが研究しようと望んでいる生きられた経験はどのようなものか
   (d) そこで何を発見したいのか：研究の「何について」を特定する
   (e) そうした研究の「何のために」，または心理学の研究文献に対して持つ関連性を問う．

   ハイデガー[28]による探究の構造についての三重の視点からの分析，そして，学部生の卒業論文プロジェクトを長年指導してきた著者らの経験からしても，心理学的に研究すべき現象と，それを明らかにする生きられた経験とは区別される[54]．

2. リサーチクエスチョンを策定する作業の補助として，関連文献のレビューを行うことが重要である．場合によっては，文献レビューを行うことでリサーチクエスチョンが生じる出発点になることもある．ディレンマ，意見の一致しない領域，不確定なもの，未成熟な帰結に終わっているものを探してみよう．文献レビューを通じて，当初策定されたリサーチクエスチョンにさらに磨きをかけ，「研究関心についての洗練された声明」と呼びうるものにしていく．

3. 経験的アプローチによってデータ収集を行う．フォン・エッカーツバーグ[55]による「協力的対話」としての研究インタビューの考察にならい，共感の役割をより良く理解し，生きられた状況に備わる「意味を把握」しながら深く傾聴するための扉を開く．

4. 「現象学的」な研究は，自己報告からなるデータを基礎としていることで定義されるのではなく，自己報告のデータについて特別な反省の方法があることによって定義される．データ分析への現象学的アプローチで求められるのは，現象学的「還元」に続く「本質直観」を経て現象を発見する仕方である．ここで問われるのは次のことである．記述されたものを読む際に私たちは何をしているのか，情報提供者の言葉に対して私たちはどのように注意を向けているか，私たちはどのような存在論的前提を持っているか，私たちの所見に忍び込んでくる望まざる先入見にどのように対処するか．

5. データ分析の課題を進める際，現れつつある現象について考察を始めてみよう（採石場で見つかった大理石からミケランジェロの彫刻が現れてくる場合のように）．データ，すなわち生きられた経験に埋まっている形相（つまり本質）――さまざまな状況におけるすべての事例に共通するもの――とは何だろうか．不変にとどまりそうなものは何だろうか．個別レベルと一般レベルの双方の分析において，予備的な反省を形作ってみよう．
6. 所見について発信する：研究レポートを執筆する（[52] pp. 73-77 を参照）．

2.1．実存現象学的研究における哲学の本質的な役割

実存現象学的研究（EPR）のパラダイム全体は，それがひとつの方法になる前にまずは哲学的アプローチとして発展してきた．ディルタイ[21]が人間科学の基盤を明確にしつつあったのと同じ頃，フッサールは先駆的な論理学の分析を行っており[56]，それが哲学的現象学の方法の最初の概論[57]への道筋をつけることになった．ジオルジは最終的にディルタイの夢を具現化しようと試みた人物ということになる．

かつてフッサールが現象学にとってのいわゆる「鬨の声」――「事象そのもの」へ――を発して以来，私たちが関心を寄せる事象のまさに本質を求めることが問いとなり，また，そうした事象に接近する固有の様式が問いとなった．フッサールにとって，私たちが還帰すべき事象とは「意識の出来事」だった――フッサールはこれを「志向性」の概念のもとでまとめて擁護した[57]．この語が意味するのはある状況内での単なる志向や目的よりずっと複雑だが，読者はこのアイデアから，人間行動（知覚する，想像する，想起する，感じる，意志する，出会うといった行為を含む）にはそこで達成されるべきある種の目的や「目的因」が常に存在するとの代替案を得ることができる．フッサール[57]による有名な一連の「還元」は，「現実」（「外的世界」で生じる「物事」「事実」「出来事」からから成るもの）から，人間の主観性すなわち「心的現実」の「内的世界」を構成する内在的領域へと，「私たちを連れ戻す」（re-ducere）ものである〔訳注：還元は Reduktion の訳語で，「再び導く」「連れ戻す」を意味するラテン語の reducere に由来する〕．私たちは「還元」という用語を採用するが，ただしそれは，現象学的研究が，経験を意味あるものとして把握できるようにする志向作用へと私たち自信を連れ戻すものである限りにおいてである[(注2)]．意味あるものとは，日常経験の流れにおいて「より深く」「潜在的で」「暗黙の」何かを指している．注意すべきなのは，「志向的である」という語が決して「意図する」ということを意味しない点である．志向性という概念は哲学から借りてきたもので，私たちは自らの心的な生において，経験される世界へとつねに意味深く指し向けられているということを示唆するのである．この方向づけまたは「志向性」は，最も単純な経験でさえも，意味を促進する私たちが現前するという刻印をつねにすでに帯びている，ということを認める方法である．私たちの経験を意味あるものにしているのは，行動と経験にともなう隠れた志向性なのである[52]（pp. 7-8）．

志向性を観察し主題化することが現象学の目的となった．これはまた精神分析の目的にもなった（フロイトがブレンターノのもとで哲学を学んだ限りにおいて）〔訳注：ブレンターノは心理学の基礎的方法として「志向性」の概念を位置づけた最初の人物で，フロイトはウィーン大学でブレンターノの講義を聴講していた〕．事実，フロイト[58]はその悪名高いドーラの症例において，臨床症状の意味を把握する方法を私たちに伝えるべく，「意味」（p. 34），「動機」（p. 35），「志向」（p. 37）という用語をほぼ同義で用いている．これはすでに夢の意味についても彼が実践していたことである（[59]，他に [60] pp. 69-70 も参照）．精神分析と現象学を同族の学問にしているのは，両者がともに，心的な生の表現において露わになる潜在的内容に関心を持っていることにある．両分野のこうした「交差検証」から，メルロ＝ポンティの有名な言明――「現象学と精神分析は平行的ではない．それどころか，両者はともに同じ潜在性を目指しているのだ」[61]（p. 87）――も生じてきたのである．これが実存現象学的研究（EPR）にとって意味するのは，私たちの把握している何ものかが記述の表面にではなくその深層に横たわっているということである[52]（pp. 8-9）．

次の抜粋について考察してみよう．孤独の経験について記述したプロトコル（分析前の生データ）からのものである．

2019年の夏休み，私は大学4年生に進級しようとする年で，その夏の間ずっと両親の家で過ごしました．学校が休みになって帰省する時，私は実家のゲストルームで過ごすんです．というのも，幼い時から大学に入るまで一緒の部屋だった妹が，自分ひとりでその部屋を全部使いたいと言って模様替えしてしまったんで，私のベッドさえその部屋にもうないんです．このこと自体は全く問題なくて，実際に高校3年の終わり頃にかけて，夜遅くまで勉強をするために時折ゲストルームで寝始めていたし．だから，妹よりかなり遅くまで起きている時でも，妹が寝るのを邪魔してはいませんでした・・・〔でもその夏は〕社会的なやり取りから少し離れ始め，自分の部屋で多くの時間を過ごすようになりました．家の周りで見つけて前々からやりたいと思っていたことや忘れかけた趣味で，自分自身を満たそうとしたんです．毎日午前3時頃に眠りに落ち，午後1時頃に起きるのが日課になりました．というのも，家の他のみんなが寝た後も夜更かししているので，どこかに行くことも，誰かと関わることも，何かに参加することも求められないで済むからです．意図的に孤立しようとしていたわけではないのですが，家にいることにどこか居心地の悪さを感じ始めていました．

この孤独の研究に対するヘインズ[62]のアプローチにとって重要だったのは，研究参加者の記述の中に潜在的な志向性をとらえることだった．つまり，参加者の言葉で直接に明らかにされたものよりも，さらに一歩先へと分析を進める必要があった．心理学的研究における意味と理解は，言語の多義性と矛盾の可能性を考慮すると，参加者の語りやデータに明示的には与えられていないものにしばしば依存する．時には，参加者が「否認」や不在といったしかたで，実際にはその場合に該当しない何かを伝えてくる[63]．ヘインズの研究参加者が「意図的に孤立しようとしていたわけではないのです」と述べるとき，研究者はその語りの中に否定や反意を聴くことができ，それゆえ，この参加者が結局のところ，故意にではないにしても孤立している当事者であると「見て取る」（あるいは理解する）ことができるのである．参加者の反意を研究者が見聞きできるかどうかは，データを全体として説明できるかどうか，つまり記述全体の観点から抜粋を見ることにもちろん依存する．

次の分析において，ヘインズ[62]は生きられたものとしての経験に忠実でありながら，参加者の潜在的な志向性をとらえることができている．

参加者の孤独の経験は，彼女が実家でゲストルームへと退く文脈において現れてくる．これは以前の人生全体を通じて快適に感じられていた馴染みのある文脈である一方，参加者の「落ち着かず場違いな」感じや，今までなかったしかたで現れた，近しい家族との間の驚くべき（逆説的な？）関係上の距離へと気持ちを向ける文脈にもなっている．そのため，参加者の孤独の経験は，他者との対人関係からの，特に近しい家族からの，広がる物理的かつ心理的な距離として生きられた．彼女の孤独と他者からの生きられた距離には，倦怠感とやる気のなさがともない，こうした感じに彼女は自分を奪われている．容赦なく襲うこうした情動と絶えず続く孤独感に直面して，参加者は帰属感の喪失を経験している．参加者の孤独の経験の核心にあるのは，家族の間にあってさえも生じるこの帰属感と居場所の喪失なのである．この喪失と向き合う中で彼女は社会的に疲れ果て，「自身の仲間」へと避難していく．彼女と他者の距離が孤独によって広がっていくと，それが緩衝材となって他者から彼女を守ることにもなり，無事で快適な「安全地帯」を生み出した．この「安全地帯」は参加者を魅惑するもので，これによって，自身と他者の分断を架橋するなどという乗り越えがたい課題に挑戦するより，社会的孤立という泡の中で彼女は保たれたのである．

本分析では特に最後の二文において，研究者が参加者の志向性へと自ら調律したのを見ることができる．より「事実上」に近いしかたで参加者によって提示されたもの（例えば「社会的なやり取りから少し離れ始め…」）が研究者によって次のしかたで解明されている．すなわち，「安全地帯」のより深い意味に光が当てられ，参加者が目的を持って，だが暗黙のうちに求めていた，他者から孤立

しつつも保護されるような場所として，その意味が明るみに出されたのである．

2.2. 存在論的基盤――人への「実存的」アプローチ

フッサールの学生であり弟子であるハイデガーによると，私たちを定義するのは，さまざまな可能性に対する私たち自身の自由な（だが常に状況づけられた）投企である．これは，「人間の自由の最も偉大な点は，いかなる状況下においても自分の態度を選択できる自由にある」とするヴィクトール・フランクル[64]の有名な主張を生み出した哲学でもある．実存現象学的研究（EPR）を用いる心理学者がデータを読み込んでいくための鍵のすべてを，次の原理に見出すことができる．（書かれたものであれ書き起こされた経験であれ）データ内のこの瞬間は，この人をとりまく状況と，人生のまさにこの瞬間におけるこの人に命を吹き込む投企とを，どのように明らかにしているのか．以下に見る通り，実存的探求のこの原理は，ハイデガーとサルトルの一節から正しく引き出されるのである．

「実存的」の語源

ハイデガーは名著『存在と時間』[28]の冒頭で「［人間存在の］本質は，その実存のうちにある」と宣言している．「実存」という語は，私たちが自らの存在に向かって，自らの「存在しなければならない（Zu-sein）」――すなわち「まだない」物事の状態――に向かって行動することの「いかに」に関連する〔訳注：『存在と時間』第九節を参照．ハイデガーは人間を「現存在」と呼び，現存在の本質は自らの存在可能性に関わりつつ存在する点にあるとし，また，このような存在のあり方を「実存」と名づけている．ここのZu-seinは現存在がそれに向かって生成すべき自らの本質に関わる〕．ハイデガーにとって，私たちは常に生成する過程の中にある．「実存的」という用語を私たちが自らの方法について用いるときに意味しているのは，身体性と時間を通じて，世界と関与し，他者と相互に関与する一般的な様式のことである．

ヘーゲルの有名な言葉遊び「本質とは，あったところのものである（Wesen ist was gewesen ist）」とは対照的に，ハイデガーは私たちの「本質」についての理解を，（まさに次の瞬間であるとしても）未来においてのみ見出すことのできる何か，すなわち自らの「存在しなければならない」へと効果的に方向づけ直した．そのような「存在しなければならない」は，私たちが自らをどのような状況に見出すかと不可分に結びついている．ハイデガーがこの代表作の残りの箇所を通じて焦点化しているのは，現存在の「存在性格」（p. 70）または単に「実存カテゴリー」と彼が呼ぶもの，つまり私たち自身が自らの存在へと向かう「かかわりかた」（p. 67）を構成しているものである．ハイデガーにとって，私たちが真に自らを見出すのは，「まだない」もの――「すでにあった」ものではなく――においてである（詳細と図解については［65］を参照）．

ハイデガーにとって，私たちが生へと「投げ込まれていること」の最も重要な側面は，私たちが「自己自身が投げ込まれている」をどう自覚するかよりも，私たちが可能性に向かって「自らを前へと投げ出すこと」，すなわち彼が「投企」（Entwurf）と呼ぶものにある．人間の実存は，つねに「被投的投企」（ハイデガー）または「状況づけられた自由」（サルトル）であると理解される〔訳注：投企と被投性について，詳しくは『存在と時間』第四一節を参照〕．データ分析においては，研究参加者がどのように自己自身を人生の状況の中に「投げ込まれている」と見ているか，という点に収集されたデータの焦点が当たりがちになる．実存現象学的研究者として私たちが挑戦するのは，こうした被投性の中で参加者がどのように可能な選択肢を見出しているかを見極めることである．

ハイデガーの実存枠組みの応用

近年の学生が扱った卒論研究のひとつで，気苦労（worry）に関するものの中で，ロンバルドッツィ[66]は研究参加者（仮名「マックス」とされる）について個性記述的な所見を報告している．マックスは，友人も家族も新たな仕事もないままに国をまたいで移住した後に生じた，麻痺するほどの気苦労の経験を言葉にした．ロンバルドッツィは，新しい外国の環境に投げ入れられたことにともなう参加者の苦闘と，可能性の収縮に映るものについて記述している．

マックスにとって気苦労というものは，それが自らを露わにした文脈がなければ理解できない．マックスの物語が始まるのは，彼がかつては保持していたもの（仕事，友人，経済的安定）が今や取り去られ，無職，友人の不在，生活費の増大によって置き換えられるというまったくの新世界においてである．彼の世界がこのように転換することが，マックスにとって気苦労のきっかけとなる．マックスは気苦労する新世界に自分がいるのに気づくだけでなく，問題だと考えるものに向き合うための解決策がないことに気づく．気苦労がマックスにとって意味するのは，自分自身を見出した新世界に適応できないということなのである．環境，他者，そして彼自身との関係は一夜にして変化し，気苦労が立ち現れる状況に自分がいるのに気づく．彼はまた，心配が「ありとあらゆるもの」へと広がっていくのに気づくのである．

ロンバルドッツィ[66]は気苦労の分析を進めるなかで次のことを見出している．マックスが気苦労のサイクルを断ち切って自らの可能性を見出すことができるのは，彼が気苦労そのものに向き合う時ではなく，気苦労のきっかけを作った状況，すなわち彼の世界に向き合うときである．

気苦労を克服する最初のステップとしてマックスが特定したのは「変わり果てたあらゆるものへの喪に服すプロセス」である．マックスにとって気苦労というのは，浮かんでは消える単なる戸惑いではなく，彼の世界および他者との関係性に深く根ざした経験である．気苦労は実存における変化を意味する．かつて状況づけられていたあり方の喪失を悼み，新たに状況づけられたあり方を受け入れそれに適応することが必要なのである．マックスは気苦労を制御できないと感じているが，気苦労それ自体ではなく彼の新世界というより大きな問題に向き合おうとする時，つまり「物事を慎重に特定し進めていく」努力をする時，に制御を取り戻していく．したがって，気苦労が源泉にあることでマックスの主体性が制約されていたのではない．むしろ，新しい世界と新しいあり方を受け入れ適応するのを拒否することで，マックスは自分自身の主体性を制約していたのである．

マックスの気苦労の経験をめぐるこの研究者の発見と直観が，いかにハイデガーの実存的枠組み――私たちが「被投的投企」として実存するということ――によって形どられていたか，読者も理解できるだろう．ロンバルドッツィ[66]の分析が強調しているのは，気苦労それ自体がマックスの主体性を「制約」し，彼が機能しない「原因」を作っていたのではないということである．このように説明するなら，臨床場面における気苦労についての，典型的な心理学的説明となっていただろう．そうではなくて，実存現象学的分析によれば，マックスは彼自身に抗って，気苦労の世界に自分を閉じ込めておくやり方を図らずも見つけてしまったということなのである．この気苦労の世界から初めて抜け出すことができたのは，マックスが「新しい世界」――新たな文脈，新たな状況と可能性，すなわち新たな「存在の仕方」――を「受け入れた」時だった．本分析において，強調されるのは因果的説明ではない．研究参加者によって生きられ，研究者によって理解されたところの，実存的に形どられた気苦労の意味なのである．

研究者の「先行所持」の成熟

データを読み込むさいに視点なしではいられないため，どのような概念を分析の指針とするかについて選択的であることが重要である．現象に対する私たちの直観は，ハイデガーが理解の「先行構造（fore-structure）」と呼ぶものによって，つねにすでにふるい分けられている[28]（pp. 191–192）．この構造を構成するのは次のものである．（a）あらかじめ持つこと，もしくは，私たち自身の生において研究課題が「かつて所持されていたこと」で馴染みがあるということ，（b）あらかじめ見ること，これはデータへの私たちの関心の向け方を指す，（c）あらかじめ摑むこと，すなわち，私たちが主題に出会う際に持ち込むより形式的な概念（それゆえ事前に批判的に吟味する必要がある）(注3)〔訳注：以上の先行構造については『存在と時間』の第三二節を参照〕．

理解にともなうこれらの「先行構造」を通して，ハイ

デガーは，他者の経験の意味を把握する際に何を議論の俎上にのせるかを現象学者が知り，それを明示することの重要性を強調した．ハイデガーにとってみれば，ひとは「与えられたもの」を理解するうえで，私たちが保持する経験的知識を構成する意味連関（彼はこれを「先行所持」と呼ぶ）を通じてごく自然にふるいにかけている．ここからハイデガーはさらに一歩を踏み出し，人間の経験を私たちが分析するうえで道標となる，より形式的で概念的な図式を発展させた．この目的のため，ハイデガーは自らの 1921 年のアリストテレス講義までさかのぼり，個人の「事実的生」の諸次元へといたる戸口として役立つだろう「実存カテゴリー」を明瞭に論じ始めるのである．それぞれの実存的「存在性格」は，人間経験の汎用性のある「地平」に関連している（世界性，共同存在，情態性，時間性など）．ハイデガーが「実存カテゴリー」を展開するまさにその理由は，見方を変えて実存カテゴリーをレンズとして用い，世界内存在という独特のしかたで個別の人を私たちが理解できるよう仕分けられるようにすることにある[注4]．実存カテゴリーは「レンズ」または「導きの光」となり，データの「意味を見抜くこと」を助けてくれる．言い換えると，私たちは実存的現象学の研究者として，ハイデガーにならって概念的枠組みに備わる確固たる役割を認め，それを通じて個別の人生を理解するという課題にアプローチするのだし，最終的には，質的研究者として，データを理解するという課題にアプローチするのである．この点は，現象学的研究を遂行するさいによく言われる「先入見すべてを括弧に入れよ」という命題とは重要な対照をなしている．

ここまで，『存在と時間』で提示されたハイデガーの豊かな概念的図式の表面をなぞってきたに過ぎないが，これらが暗に示しているのは人間存在の「気づかい構造（care-structure）」と呼ばれるものである．すなわち，私たちは自らに特有の「事実的生」に埋め込まれているのと同時に，自らの状況内での可能性と究極的には自らの自由を「計算する」のである〔訳注：「気づかい」をめぐる時間性については『存在と時間』の第六六節を参照〕．さまざまな講義録やこの代表作で示されているように，ハイデガーが「実存カテゴリー」として布置したものには，実際にはもっと多くのものがある．『存在と時間』だけでも 20 個に区別できる「等根源的」な実存カテゴリーをハイデガーは特定している．一方でヴァン・デン・ベルク[67]は，これらすべてをわずか四つの主題へと抽出する方法を見出している．すなわち，世界・身体・他者・時間に対する人の関係性である．現象学の伝統を学生たちに紹介しながら気づいたことだが，ヴァン・デン・ベルクのこの著作から始めると，実存現象学的研究（EPR）の存在論的基盤を伝える出発点として助けになるのと同時に，質的研究の企てにおける導きの光としてこれら「実存カテゴリー」の概念を応用できるということを，切実かつ説得的に示してくれる．

実存的超越性と「循環的」因果性

実存現象学的アプローチにおいて，人間心理の因果性について話題にすべきことがあるとすれば，それは「循環的」因果性（以下で示す）であって，作用因によって表される線形的な決定論ではない．例えば，ヨーロッパで列車に乗っている際に私たちが出会ったとすると，私たちが話題にするのは，どこから来たところなのかということより，どこへ行こうとしているのかということだろう．旅を旅にしているのは目的地であって，その逆ではないからである．「いずれにしても，「循環的な因果性」というものがあるのだ．循環的因果性によって，私がそうなりたいと願う自己を投企すると，それが現在の瞬間における私の選択の基礎を作り，今度はそれが私の「過去」を取り出して変容させるのである．……朝に鳴るアラームは，私がベッドから起きて一日を始める「理由」ではない．アラームに何か意味があるとすれば，それは私の「～になりたいという投企（project-to-be—in）」に対して持つ意味であり，この場合は，時間通りに出勤するような人になることにとっての意味である．それゆえ，アラームの音で目覚めることは，私が選択したところの自己になるという可能性を実現することなのである．私たちのあらゆる「主体的」な行為の構造はこのようなものであろう．さらに，私たちは自らの行為すべてに責任を負っているのであって，言いわけの余地はない．公園の芝生に足を踏み入れないのは，「立入禁止」と標識に書いてある「から」なのだろうか．それとも，朝に鳴るアラームと同様，私の自由な投企と実現すべき自己が付

与する重みを標識が帯びているからだろうか」[52]（pp. 13-14）．サルトル[17]は実存的な観点をこのようにまとめている．「いずれにしても，一つの選択が問題なのである……人間存在の特徴は，「人間存在は言いわけなしに存在する」ということである」（pp. 708-709）〔邦訳は第Ⅲ巻 315 頁〕．私は自らのなした行為を遡及的にとらえ，私自身に備わる一定の特徴（過去の投企・状況）を把握する．これらの特徴は，自らの行為に照らしてみると，自らの行為の「動機」として役立っていたことが理解できるのである．このような意味で，人がこれから向かう先こそ，その人がこれまでいたところの意味を決定するのである．サルトル[17]にとって，

> あらゆる行動は志向的であるはずである．事実，あらゆる行動は一つの目的をもっているはずであり，その目的が，今度は，一つの動機に関係する……いいかえれば，私の未来の時間化は，私の過去の方を指し示す．そして，現在は行為の出現である……．未来が現在と過去のうえに立ち戻って，それらを照らすのと同様に，動機に動機としての構造を付与するためにあと戻りするのは，私のもろもろの企ての総体である．（pp. 436-437）．〔邦訳は第Ⅲ巻 27-29 頁〕

したがって，フッサール[57]が述べているように，目的を求めることは手段を求めることを動機づける．あらゆる行為には確かに動機があるのだが，その動機は行為の「原因」ではなく，行為そのものの構造の一部なのである．シュッツ[46]は二種類の動機を区別することで，動機づけについての現象学的な理解を洗練させた．すなわち，「理由」動機と「目的」動機であり，それぞれが異なる種類の反省と相関する．今度は，現象学的直観へと向かうサルトルの方法論に目を向けてみよう．

2.3. 方法論的基盤――不純な反省（線形的決定論）vs 純化する反省（循環的因果性）

実存現象学的アプローチの循環的因果性に接近し，作用因果性の定式にはめ込まれた線形的決定論からこれを区別するために，サルトル[17][53]は，人間的な事象を概念化する二つの道を定めている．第一の（しかも最もありきたりな）ものは「不純な反省」を通る道であり，これは「心理学的決定論」（私たちの行為の意味を過去すなわち先行要因に割り当て，私たちの未来のありようを確率的な軌跡の結末へと縮減するような時間の概念）をもたらす．もうひとつは，「現象学的還元のおこなう純化する反省」[53]（p. 91）〔訳注：邦訳 166 頁では「浄化的反省」となっているが本稿では「純化する反省」に統一した〕と彼が呼ぶものを通って人間の行動を概念化することである．これは，人間の行為の基盤を私たちの「投企」[68]（pp. 91ff, 150ff）〔邦訳 103 頁以降〕に再設定するものである．投企とは，あらゆる瞬間の行為において私たちがそうなろうとしているところの「存在可能性」（“to be”）に他ならない．サルトルの言葉を借りれば，「われわれにとっては，人間は……まず，状況ののりこえによって，つまり，他人が彼をしてそうあらしめた所以のもので彼が何かをつくり出すことに成功するかによって特徴づけられる．……これこそ私たちが投企と名づけるものである」（p. 91）．

人間行動について因果的説明に甘んじることの自己欺瞞

サルトルが「不純な反省」あるいは「自己欺瞞（bad faith）」と呼んだものにおいて，私たちは，自らの過去の行為を原因（作用因）や動機として，既存の情況をとらえる傾向がある．こうした見方の何が「悪（bad）」で「不純」なのかというと，これが自由の否定であり，自由な存在としての私たちの「本性」を否定するに等しいからである．心理学分野の多くは，人間を自己欺瞞（self-deception）に向かわせるようなこの傾向に加担しており，その結果，私たちは自らの行為に責任を負うことよりも，その理由や原因を見つけることに腐心するようになっている〔訳注：サルトルの bad faith, mauvaise foi の邦訳は「自己欺瞞」で定着しているが，直訳すれば「悪しき信念」「不誠実」となるため，原著者は文字通りの自己欺瞞を意味する self-deception を追記している〕．

> 心理的決定論は，一つの理論的な考えかたであるよりも，まず一つの弁解的な態度である．あるいは，あらゆる弁解的な態度の根拠であると言ってもいい．

（……）心理的決定論は，私たちのうちに，事物の存在のしかたに比すべき存在のしかたをもった相対立する力が存在すると主張する．心理的決定論は，私たちをとりまいている空虚を埋め，過去から現在へ，現在から未来へのつながりを再建しようと試みる．[17]（p. 40）〔邦訳は第 I 巻 156-157 頁〕

心理的決定論によれば，過去が現在を生み出す．例えば，私がいま感じている怒りは，憎らしい人がその場に現れたことによって「引き起こされた」ものである．シュッツ[46]ならこれを「理由動機」の一種として言及するだろう．別の言い方をすれば，私を傷つけた相手を憎らしいと知覚するよう動機づけているのは，私自身には何の価値もないとする自己懸念から逃れようとする私の投企であるとも言える．他者が憎らしく見えることは，単に所与のものとして私が経験する不純な反省であって，実際のところは私の意識によってなされた選択の相関物である．他者が憎らしく見えるよう私を動機づけているのは，正確には，他者に傷つけられる場面から逃れたいという私の願望なのである．シュッツなら，私が傷つきから逃れようとしていることを目的動機として，すなわち他者が憎らしく見える経験を意味づける動機として記述するだろう．

解きほぐしてみよう．要するに，「未来において私を待ち受ける自己」こそが，私の現在の行為を動機づけるのであって，その逆ではないということである．「未来の自己」は現在の自己によって決定されるのではないし，ましてや現在の自己は過去の私の行為によって決定されてなどいない．心的な生に直線的な決定論は存在しない．では，なぜ私たちはそうした説明に屈してしまうのだろうか．サルトルによれば，私たちは「自己欺瞞」によってそうした説明に屈してしまう．というのも，弁解の言葉や外界を非難する言葉を借りて自らの責任から逃れるほうが，多くの場面でより容易だからである．それゆえ，上述した例のような情動の経験においては，私たちの情動が他者を明らかにしながら（例えば「憎らしい」というように）他者を共同構成するさいの，私たちの有責性がしばしば見過ごされている．注目すべきことに，サルトルにとって，私たちが自らの責任（すなわち自らの自由）から逃れようとしてもしなくても，私たちには主体性がある．したがって，実存現象学的研究（EPR）を展開するうえで焦点となるのは，研究参加者がそれを自覚しているかどうかにかかわらず，参加者があらゆる状況において自らの自由と志向性をどのように発揮しているか明らかにすることなのである（［69］を参照）．

純化する反省――研究参加者の自己欺瞞を「見抜く」

事例として，ディアス[70]のパフォーマンス不安の研究について検討しよう．ディアスは，大学バスケットボールの試合前と試合中にパフォーマンス不安の体験を語った一人の研究参加者の記述を分析した．その試合は本人にとって重要だったため，未来の自己の観点からして何が賭けられているかは一部で明らかだった――すなわち，バスケットコート上での熟達した選手であり，チームメイトを勝利に導いているという姿である．この分析において，ディアス[70]は，不純な反省と純化する反省を「先行所持」あるいは解釈的な概念枠組みとして活用し，それを通じて研究参加者の動機づけを解明している．まずは参加者の記述そのものについて考えよう．

どうして彼女（コーチ）は私に緊張しないでほしいのか，私だってプレーに支障が出るような生理的反応をどれほど避けたいか，こうしたことについて私は過剰に考え始めました．緊張から引き起こされかねないミスを避けようと思えば思うほど，心拍数が上がっていくのを生理的に感じました．もし彼女（コーチ）が事前にもっと伝えてくれていたら，時間をとって準備して試合に臨めたのにと思います．出場経験はこれまでにもありますが，いつもは試合展開を見る時間が最初にありました．というのも私はたいてい途中出場だったので，試合のスピードに合わせたり，選手の出方を見たりする準備の時間があったのです．

個性記述的な観点から，ディアス[70]は次のように分析する．

ゲームの開始時刻が迫ってくると，時間がないと参加者は感じる．事前に試合のことを教えてもらってい

れば，開始時刻までにパフォーマンス不安と向き合い，折り合いをつける時間があったのに，と嘆いている．そこで参加者は，こうすれば不安を防げたはずだというシナリオを作り出し，自身のパフォーマンス不安に対する弁解を試みようとする．不安をコーチングのせいにすることで弁解を生み出し続けるのである．もしコーチングがもっと違っていたら不安はなかったかもしれない．だから，社会的状況での不安が意味しているのは，高リスク状況にともなう不安と，そこから帰結する責任とを，彼女自身からそらすということである．彼女のパフォーマンス不安は，試合への備えが足りないと感じるほどに大きくなる．彼女がパフォーマンス不安を自らのものとして引き受けず，コーチをそのスケープゴートとして利用し続ける限り，不安をそらそうとする欲求も持続することになる．彼女は自らの不安を合理化している．試合の「最初」からプレーするように伝えること，これは通常コーチがしないことなのだが，コーチがそれをせず，試合の「スピード」に合わせる十分な時間を彼女は取れなかった，と自分に言い聞かせているのである．

実存現象学的アプローチを取ることでディアス[70]が示しているのは，参加者の未来の自己と「投企」（すなわち熟達した選手であること）が，参加者が非難と弁解の物語に陥ることで，いかにしてサルトルのいう「自己欺瞞（bad faith）」（または「自己欺瞞（self-deception）」）へと，あるいはシュッツのいう「理由動機」へと成り果てるか，ということである．参加者は，自らのパフォーマンス不安の共同構成に責任を持つのではなく，不安の爆発と選手としての力量不足について弁解している．彼女はコーチを非難してもいる（例えば，コーチが試合に出るための準備時間を十分に与えてくれていたら，これほどの不安は経験しなかったかもしれないと嘆いている）．これらはすべて，少なくともサルトル的な見方からすれば，弁解ないし「理由動機」という態度であり，参加者が自らの「投企」と，および自己の責任を含むその帰結と向き合うのを暗に避けていることを示しているのである．

サルトルは選択から逃げるのではなく，正面から向き合うよう促している．これは研究者としての私たちの仕事への取り組み方にも通じるだろう．「純化する反省」の態度とは，線形的決定論の観点で考えるのを除去する態度である．この決定論が不純な反省と相関しているとすれば，循環的因果性や志向性と自由の可能性は，サルトル自身の純化する（すなわち現象学的な）反省と相関するものである．現象学的「還元」（ラテン語 re-ducere すなわち「連れ戻す」に由来）を介して「本源的時間性」（あるいは循環的因果性）へと私たち自身を連れ戻すべく，不純な理論化という弁解や自己欺瞞は棄却される．現象学には，上述した「本源的」ないし「原初的」時間性への還帰が含まれる．これによって最終的に明らかになるのは，人間の行為を最も良く定義するのは「自由の係数」だということである．すなわち，状況が私たちに及ぼす影響ではなく，むしろ状況に直面して私たちがなす諸選択に目を向けるのである．このように，私たちが現在と過去を規定するのは未来へと向かう動きにおいてなのであって，その逆ではない．

別の事例として，スポール[71]の社交不安の研究を考えてみよう．この研究では，他の学生集団の前でスペイン語での発表を行おうとした時に生じた，圧倒されて身が固まるような不安の経験を参加者が記述している．スポール[71]もディアス[70]と同じく，サルトルによる純化する反省を用いて，参加者の「投企」あるいは志向性を明らかにしている．すなわち，スポールはデータ分析を行いながら，社交不安の状況の中の参加者にとって，賭けられていたものは何だったのか，と問いかけるのである．ディアスの研究参加者は最終的に「自己欺瞞」に陥り，「理由動機」を取って状況内での自らの責任を回避しようとしたが，スポールの研究参加者は弁解の言葉には移行しない．私たちは，実存現象学の研究者として，ハイデガーの被投的投企の概念およびサルトルの純化する反省の概念を，データに向かう際の解釈姿勢として用い，それにより，参加者の志向性（「投企」）――さらには潜在的志向性でさえ――として記述できるものをデータの中に見出そうとする．これはすべて，研究対象とする人間的現象（ここでは社交不安）の意味を明らかにするためである．スポール[71]は，先行する因果関係に言及して社交不安を説明しようとするのではなく，社交不

安を生みだしている志向性を明らかにすることによって，それを理解しようとするのである．

この参加者の社交不安は次の文脈で生じている．すなわち，スペイン語を発話することについて高い期待を抱いているものの，同級生の前で流暢に話す能力はないと自分を低く見積もっているという文脈においてである．発話することに先立って彼女はすでに同級生に比べて見劣りすると決めつけており，話したくても流暢に言葉にする能力がないという不釣り合いを認識して強調している……．この不釣り合い，社交不安状況における，参加者が目指す自己（優れた力を発揮することを期待する自己）と現在の自己（自らの能力を疑う自己）との不釣り合いが，時間的・身体的に表現されているのである．スペイン語を同級生の前で話せるかどうか予期不安が生じると，社交不安の状況は「永遠に続き」，時間が流れなくなる．この状況が続くと，彼女の不安は身体的に現れる．同級生の視線を前に，彼女の身体は自分のものではなくなる．「胸が締め付けられ」，「足がガクガクし」，ポインターを落としてしまう．パニックに陥った身体が不安に取って代わり，彼女自身も把握していない自己――震える声と震える体を持ち，他者の視線によって固まってしまった自己――を露わにし始める．社交不安状況のあいだずっと，参加者は他者の前に立つ自分に過度な焦点を当て続けている．凝視の対象になっており，他者の視線に射抜かれるように感じている．この過程で，彼女は自分自身が他者の前の対象であるとますます感じるようになる．この凝視する視線によって，彼女はその場に釘付けにされたように感じるのである．

このデータ分析では，参加者の「投企」あるいは未来の自分，つまりスポール[71]が言うところの参加者の「目指している自己（aimed-at-self）」が明らかにされている．実際，社交不安を生じさせているのはこの「目指している自己」すなわち「実力を発揮する自己」であって，「目指している自己」と現在の自己ないし「自己の能力を疑う」自己との食い違いを本人が知覚することで，社交不安が生じるのである．言い換えると，スポール[71]の分析で重要な発見となっているのは，参加者が自分自身をどのように実存的に位置づけているかである――すなわち彼女は，ある状況のなかに投げ入れられ，自らの能力を疑いながらも，自分に対して大きな期待を投げかけている人なのである．この実存的な位置づけが，社交不安の経験の一部を共同で構成している．分析はまた，参加者が他者の眼差しによってますます精査され対象化されるように感じることも示している．実際に参加者はこの眼差しによって「固まった」と感じている．したがって，参加者の「目指している自己」「現在の自己」，および他者との関係には，関心を寄せる世界に対して彼女がどのように志向的に構えているかがよく現れている．ここに実存現象学的研究（EPR）の真の強みがある．実存現象学的研究は，参加者の志向的な「投企」，世界や状況内での他者に対する志向的な構えに接近する能力を研究者に与えるが，まさにこの状況づけられた文脈がさまざまな現象を生じさせているのである．実存現象学的アプローチはまた，意味と理解を重視する．スポール[71]の分析でも，社交不安の先行要因や作用因に注目するのではなく，参加者にとって「永遠に続き」，「パニックに陥った身体が取って代わる」，社交不安状況の意味が強調されている．言葉を換えると，実存現象学的アプローチは，社交不安の意味に備わる時間性と身体化された変数を緻密に調べ，それにより，生きられた経験についての理解を深めるのである．

3．結論

20年前，アーネスト・キーン[25]は，行動を呼びかけながら心理学に挑戦を挑んでいる．

自然科学という乗り物は，心理学をアメリカ社会に統合するうえで重要だった――それは心理学に正当性を与え，機会を作り，支援を集めるよき原動力であった．……しかし，自然科学はまた拘束衣でもあった．心理学を詩・小説・芸術・音楽から遠ざけ，心のロゴス（logos of the psyche）にこれらの分野がもたらす洞察とアプローチをより困難でより周辺的なものにした．現象学は心理学に対してひとつの方法を提供する．その方法は，科学の向こうへ私たちの視野を拡大する

とともにアメリカ文化を新たに開拓し，そこで私たちは自然科学に代えて真の人間科学を行うことができるのである．

自然科学として構想された心理学に代わる洗練された代替案を発展させるには，単に説明や因果的思考を避ければいいというものものではない．私たちは，志向性を見出し，理解し，言葉にする能力も発展させねばならないのである．つまり，量的方法に代わる質的方法をあれこれ提案するだけでは不十分であって，特に新たな質的方法が，量的方法にともなう実証主義的傾向を免れていない場合にはなおさらである．人間についての真の科学を発展させるには，代替的な「科学論」，あるいはジオルジ[12]が端的にアプローチと呼ぶものに立脚する質的方法を発展させる必要がある．哲学に形どられた質的研究――特にそれが実存現象学の伝統に根ざしたものなら――人間行動の学徒に対して新たな地平を開き示す．これらの新たな地平を可能にするのは，人間科学として構想された心理学，すなわち，人間的な意味，動機，志向，価値に直接向かっていく心理学，の存在論的な基盤である．

長年にわたってこの方法を共に教えてきた私たちの経験から言えるのは，他の方法では見えない人間経験の諸次元を発見することに，学生たちが深い喜びを感じているようだということである．しかし本当の挑戦が求められるのは，このような発見を自分でできるようにする方法を教えるときである．これは教育学と科学が出会う場所であり，そこで私たちは，私たち自身および学生の関心を，方法論的文献を読むことから，実際に現象学的に心理学することへと向け直し始めるのである．

注

1. ドイツ語 Geisteswissenschaft（精神科学）に付与されている属格の Geistes-（精神の）の持つ両義的な「二重の意味」について熟考してみると興味深い．Geistes- は，慣例的なやり方で「客観的属格（objective genitive）」として，Geist を研究の「object（対象）」として読解することもできるし，非慣例的な（だが際立ってハイデガー的な）やり方で「主観的」ないし所有的属格として，すなわち，精神が所有し，精神が実行する科学（ここでは精神が主語であり，自らを理解する能力を所有しているとみなされる）．さらなる議論は，チャーチル[72]（pp. 70-73），およびハイデガー[73]（p. 102）を参照．同様に，Wissenschaft がアンビバレントに翻訳されていることに着目するのも興味深い．この言葉が自然と結合すると「自然科学」となるが，精神と結合すると「人間学（human studies）」に格下げされる．この語に「科学」を取り戻して人間科学としたのはジオルジ[12]だった．
2. 心理学者が超越論的領域まで「全行程」を行き尽くさないとしても（「完全な還元の不可能性」をめぐるメルロ = ポンティ[74]（p. xix）の議論を参照），私たちはフッサールの基本的手法から学ぶことができる．それは私たちにとって，自然主義的態度（つまり，説明的な心理学が心的な生を理解するうえでの答えをすべて保持しているとの信念）を括弧に入れ，自明なものから，人間の経験に含まれるより潜在的な意味へと私たち自身を連れ戻してくれるのである．R・D・レイン[75]は，こうした意味を「データ」ではなく「カプタ（capta）」と呼ぶよう示唆している．というのも，これらは単純な所与ではなく，「とらえどころのない出来事のマトリックス」から「取り出され」または「捕まえられ」なければならないからである（p. 62）．
3. ガダマー[76]（pp. 235-240）による「解釈学的経験の理論」の基礎づけは，まさにこれらのハイデガーの概念の中に見ることができる．
4. 実際にハイデガーは，実存分析家のメダルト・ボスの招きでスイスで 17 年間に渡って開催されたセミナーにおいて，『存在と時間』で最初に提示した実存カテゴリーにつねに立ち返り，精神科医・内科医・その他の医療従事者に，人を理解する実存的アプローチの訓練をする手助けを行なっている[77]．

引用文献

［1］Atkins, C.（2021, April 16）. Mass shootings in the U.S. in 2021. *MSNBC News*. https://www.nbcnews.com/%20news/us-news/mass-shootings-u-s-2021-n1264354

［2］American Psychological Association.（2021, March 11）. *One year later, a new wave of pandemic health concerns*. https://www.apa.org/news/press/releases/stress/2021/one-year-pandemic-stress

［3］Fisher, M.（2021, May 7）. 'Belonging is stronger than facts:' The age of misinformation. *The New York Times*. https://www.nytimes.com/2021/05/07/world/asia/misinformation-disinformation-fake-news.html

［4］Qiu, L.（2021, May7）. No, Covid-19 vaccines are not killing more people than the virus itself. *The New York Times*. www.nytimes.com/live/2020/2020-election-misinformation-distortions/no-covid-19-vaccines-are-not-killing-more-people-than-the-virus-itself

［5］Churchill, S. D.（1991）. Reasons, causes, and motives: Psychology's illusive explanations of behavior. *Theoretical & Philosophical Psychology, 11*, 24–34. http://dx.doi.org/10.1037/h0091 504

［6］Fisher-Smith, A., Sullivan, C., Macready, J., & Manzi, G.（2020）. Methodology matters: Researching the far right. In A. Winter, G. Macklin, & J. Busher（Eds.）, *Researching the far right: Theory, method, and practice*（pp. 197–211）. Routledge.

［7］Koch, S., & Leary, D. E.（Eds.）.（1985）. *A century of psychology as science*. McGraw-Hill.

［8］Wertz, F. J.（1999）. Multiple methods in psychology: Epistemological grounding and the possibility of unity. *Journal of Theoretical and Philosophical Psychology, 19*（2）, 131–166.

［9］American Psychological Association Presidential Task Force on Evidence-Based Practice.（2006）. Evidence-based practice in psychology. *American Psychologist, 61*, 271–285.

［10］Cook, T. D.（2018）. Twenty-six assumptions that have to be met if single random assignment experiments are to warrant "gold standard" status: A commentary on Deaton and Cartwright. *Social Science and Medicine, 210*, 37–40.

［11］Cook, T. D., Shadish, W. R., & Wong, V. C.（2008）. Three conditions under which experiments and observational studies produce comparable causal estimates: New findings from within-study comparisons. *Journal of Policy Analysis and Management, 27*（4）, 724–750.

[12] Giorgi, A. (1970). *Psychology as a human science: A phenomenologically based approach*. Harper & Row.（早坂泰次郎監訳『現象学的心理学の系譜――人間科学としての心理学』勁草書房，1981 年）
[13] Robinson, D. (1995). *An intellectual history of psychology* (3rd ed.). University of Wisconsin Press.
[14] Barlow, D. (2004). Psychological treatments. *American Psychologist, 59* (9), 869–878.
[15] Chambless, D. L., & Crits-Christoph, P. (2006). The treatment method. In J. C. Norcross & L. E. Beutler, & R. F. Levant (Eds.), *Evidence based practices in mental health* (pp. 191–200). American Psychological Association.
[16] Deaton, A., & Cartwright, N. (2018). Understanding and misunderstanding randomized controlled trials. *Social Science and Medicine, 210*, 2–21.
[17] Sartre, J. P. (1956). *Being and nothingness: An essay on phenomenological ontology* (H. Barnes, Trans.). Philosophical Library (Original work published 1943).（松浪信三郎訳『存在と無（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）』筑摩書房，2007 年・2008 年）
[18] Brentano, F. (1995). *Psychology from an empirical standpoint*. Routledge (Original work published 1874).
[19] Husserl, E. (1989). *Ideas pertaining to a pure phenomenology and to a phenomenological philosophy, Second Book: Studies in the phenomenology of constitution* (R. Rojcewicz & A. Schuwer, Trans.). Kluwer (Original work written circa 1928 and published posthumously in 1952).（立松弘孝・別所良美・榊原哲也訳『イデーンⅡ（1・2）』みすず書房，2001 年・2009 年）
[20] Merleau-Ponty, M. (1963). *The structure of behavior* (A.L. Fisher, Trans.). Boston: Beacon Press, 1963. (Original work published 1942)（滝浦静雄・木田元訳『行動の構造』みすず書房，1964 年）
[21] Dilthey, W. (1977a). Ideas concerning a descriptive and analytic psychology (1894) (R. M. Zaner, Trans.). In W. Dilthey (Ed.), *Descriptive psychology and historical understanding* (pp. 21–120). Martinus Nijhoff (Original work published 1924).（大野篤一郎・丸山高史編訳「記述的分析的心理学」『ディルタイ全集第 3 巻』所収，法政大学出版局，2003 年）
[22] Dilthey, W. (1977b). The understanding of other persons and their expressions of life (K. L. Heiges, Trans.). In W. Dilthey (Ed.), *Descriptive psychology and historical understanding* (pp. 121–14). Martinus Nijhoff (Original work published 1927).（長井和雄・竹田純郎・西谷敬編訳「他人と彼らの生の表出の理解」『ディルタイ全集第 4 巻』所収，法政大学出版局，2010 年）
[23] Heidegger, M. (2001a). *Phenomenological interpretations of Aristotle: Initiation into phenomenological research* (R. Rojcewicz, Trans.). Indiana University Press (Original lecture course presented 1921–22 and published 1985).（高田珠樹訳『アリストテレスの現象学的解釈』平凡社，2008 年）
[24] May, R. (1967). *Psychology and the human dilemma*. Norton.
[25] Keen, E. (2012) : Keeping the psyche in psychology. *The Humanistic Psychologist, 40* (3), 224–231 (Original APA address presented in San Francisco 2001) http://dx.doi.org/10.1080/08873267.2012.642218
[26] Fichte, J. G. (1982). *Foundations of the Science of Knowledge*. Cambridge University Press (Original work published 1794–1795).（木村素衛訳『全知識学の基礎（上・下）』岩波書店，1949 年）
[27] Howard, G. S., & Conway, C. G. (1987). The next steps toward a science of agency. *American Psychologist, 42*, 1034–1036. https://doi:10.1037/0003-066X.42.11.1034
[28] Heidegger, M. (1962). *Being and time* (J. MacQuarrie & E. Robinson, Trans.). Harper & Row (Original work published 1927).（熊野純彦訳『存在と時間（一・二・三・四）』岩波書店，2013 年）
[29] Wertheimer, M. (1923/1938). *Untersuchungen zur Lehre von der Gestalt II* [Investigations in Gestalt Theory II]. Psychologische Forschung, 4, 301–350. In W. D. Ellis (Ed.), *A sourcebook of gestalt psychology* (pp. 71–88). Routledge & Kagan Paul. https://psychclassics.yorku.ca/Wertheimer/Forms/forms.htm
[30] Wundt, W. M. (1916). *Elements of folk-psychology: Outlines of a psychological history of the development of mankind* (E. L. Schaub, Trans.). Allen (Original work published 1912).
[31] Münsterberg, H. (2004). *Psychology and life*. Kessinger Publishing (Original work published 1899).
[32] James, W. (2007). *The varieties of religious experience*. Wilder Publications (Original work published 1901).（桝田啓三郎訳『宗教的経験の諸相（上・下）』岩波書店，1969 年・1970 年）
[33] Fechner, G. T. (1861). *Ueber die Seelenfrage: Ein Gang durch die sichtbare Welt, um die unsichtbare zu Finden* [On the question of the soul: A walk through the visible world to find the invisible]. Amelang.
[34] Heidelberger, M. (2004). *Nature from within: Gustav Theodor Fechner and his psychophysical worldview* (C. Klohr, Trans.). University of Pittsburgh Press.
[35] Fechner, G. T. (1966). *Elements of psychophysics* (H. E. Adler, Trans., D. H. Howes & E. G. Boring, Eds.). Holt, Rinehart & Winston (Originally published 1860).
[36] Kugelmann, R. (2021, June). *The metaphor of the "threshold" of consciousness in Frederic Myers' theory of the subliminal self*. Paper presented at the annual meeting of Cheiron: The International Society for the History of the Behavioral and Social Sciences.
[37] Arnheim, R. (1985). The other Gustav Theodor Fechner. In S. Koch & D. E. Leary (Eds.), *A century of psychology as science* (pp. 856–865). McGraw-Hill.
[38] Köhler, W. (1971). Methods of psychological research with apes (M. Henle, Trans.). In M. Henle (Ed.), *The selected papers of Wolfgang Koehler* (pp. 197–223). Liveright (Original work published 1921).
[39] Watson, J. B. (1913). Psychology as the behaviorist views it. *Psychological Review, 20*, 158–177.
[40] Watson, J. B. (1924). *Behaviorism*. Norton.（安田一郎訳『行動主義の心理学』ちとせプレス，2017 年）
[41] Skinner, B. F. (1953). *Science and human behavior*. Macmillan Publishing Company.（河合伊六他訳『科学と人間行動』二瓶社，2003 年）
[42] Skinner, B. F. (1987). Whatever happened to psychology as the science of behavior? *American Psychologist, 42* (8), 780–786.
[43] Skinner, B. F. (1975). The steep and thorny way to a science of behavior. *American Psychologist, 30* (1), 42–49. https://doi.org/10.1037/0003-066X.30.1.42
[44] Slife, B. D., & Williams, R. N. (1995). *What's behind the research? Discovering hidden assumptions in the behavioral sciences*. Sage.
[45] Rychlak, J. F. (1981). *Introduction to personality and psychotherapy: A theory construction approach* (2nd ed.). Houghton Mifflin Company.
[46] Schütz, A. (1967). *The phenomenology of the social world* (G. Walsh & F. Lehnert, Trans.). Northwestern University Press (Original work published 1932).（佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成――理解社会学入門』木鐸社，2006 年）
[47] Radnitzky, G. (1970). *Contemporary schools of metascience (Second Edition)*. Humanities Press.
[48] Caspi, A., Hariri, A. R., Holmes, A., et al. (2010). Genetic sensitivity to the environment: The case of the serotonin transporter gene and its implications for studying complex diseases and traits. *American Journal of Psychiatry, 167*, 1–19.

[49] Bradley, R. G., Binder, E. G., Epstein, M. P., et al (2008). Influence of child abuse on adult depression: Moderation by the cordicotropin releasing hormone receptor gene. *Archives of General Psychiatry, 65*, 190–200.

[50] May, R., Angel, E., & Ellenberger, H. F. (Eds.). (1958). *Existence: A new dimension for psychiatry and psychology*. Simon & Schuster. (伊東博・浅野満・古屋健治訳『実存――心理学と精神医学の新しい視点』岩崎学術出版社)

[51] Churchill, S. D. (2000a). Phenomenological psychology. In A. E. Kazdin (Ed.), *Encyclopedia of psychology* (Vol. 6, pp. 162–168). Oxford University Press and American Psychological Association.

[52] Churchill, S. D. (2022). *Essentials of existential phenomenological research*. American Psychological Association.

[53] Sartre, J. P. (1948). *The emotions: Outline for a theory* (B. Frechtman, Trans.). Philosophical Library (Original work published 1939). (竹内芳郎訳「情動論粗描」『自我の超越・情動論粗描』所収，人文書院，2000 年)

[54] Churchill, S. D. (2018a). Explorations in teaching the phenomenological method: Challenging students to "grasp at meaning" in human science research. *Qualitative Psychology, 5* (2), 207–227.

[55] von Eckartsberg, R. (1971). On experiential methodology. In A. Giorgi, W. F. Fischer, & R. von Eckartsberg (Eds.), *Duquesne studies in phenomenological psychology* (Vol. 1, pp. 66–79). Duquesne University Press.

[56] Husserl, E. (1968). *Logische Untersuchungen: Zweiter Band: Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis—I. Teil (5 Auflage)* [Logical investigations: Vol. 2. Investigations in phenomenology and the theory of knowledge—part 1 (5th ed.)]. Max Niemeyer Verlag (Original work published 1901). (立松弘孝・松井良和・赤松宏訳『論理学研究（2・3・4)』みすず書房，2015 年)

[57] Husserl, E. (1962). *Ideas: General introduction to pure phenomenology* (W. R. B. Gibson, Trans.). Collier Books (Original work published 1913). (渡辺二郎訳『イデーン Ⅰ（1・2)』みすず書房，1979 年・1984 年)

[58] Freud, S. (1963). Fragment of an analysis of a case of hysteria (1905) (J. Strachey, Trans.). In P. Rieff (Ed.), Dora: *An analysis of a case of hysteria* (pp. 1–112). Simon & Schuster (Original work published 1905). (金関猛訳『あるヒステリー分析の断片――ドーラの症例』筑摩書房，2006 年)

[59] Freud, S. (2010). *The interpretation of dreams* (J. Strachey, Trans.). Basic Books (Original work published November 1899). (高橋義孝訳『夢判断（上・下)』新潮社，1969 年)

[60] Bettelheim, B. (1982). *Freud and man's soul.* Norton. (藤瀬恭子訳『フロイトと人間の魂』法政大学出版局，1989 年)

[61] Merleau-Ponty, M. (1969). Preface to Hesnard's L'oeuvre de Freud (A. L. Fischer, Trans.). In A. L. Fischer (Ed.), *The essential writings of Merleau-Ponty* (pp. 81–87). Harcourt, Brace & World (Original work published 1960).

[62] Haynes, M. (2020). *Moments of connection and disconnection: A phenomenological investigation of the lived experience of aloneness* [Unpublished senior thesis]. Department of Psychology, University of Dallas.

[63] Angel, S. (2013) Grasping the experience of the other from an interview: Self-transposition in use. *International Journal of Qualitative Studies on Health and Well-Being, 8* (9), 1–7. https://doi.org/10.3402/qhw. v8i0.20634

[64] Frankl, V. (1959). *Man's search for meaning.* Washington Square Press. (池田香代子訳『夜と霧』みすず書房，2002 年)

[65] Churchill, S. D. (2013). Heideggerian pathways through trauma and recovery: A "hermeneutics of facticity." *The Humanistic Psychologist, 41* (3), 219–230.

[66] Lombardozzi, E. (2021). *Paralyzing freedom: A phenomenological inquiry into agency and worry* [Unpublished senior thesis]. Department of Psychology, University of Dallas.

[67] van den Berg, J. H. (1972). *A different existence: Principles of phenomenological psychopathology*. Duquesne University Press. (早坂泰次郎・田中一彦訳『人間ひとりひとり――現象学的精神病理学入門』現代社，1976 年)

[68] Sartre, J. P. (1963). *Search for a method* (H. Barnes, Trans.). Vintage Books (Original work published 1960). (平井啓之訳『方法の問題（サルトル全集第 25 巻)』人文書院，1962 年)

[69] Churchill, S. D. (2000b). "Seeing-through" self-deception in narrative reports: Finding psychological truth in problematic data. *Journal of Phenomenological Psychology, 31* (1), 44–62.

[70] Diaz, V. (2021). *Performance anxiety: A phenomenological analysis* [Unpublished senior thesis]. Department of Psychology, University of Dallas.

[71] Spall, M. (2021). *A phenomenological inquiry into social anxiety* [Unpublished senior thesis]. Department of Psychology, University of Dallas.

[72] Churchill, S. D. (2018b). On the empathic mode of intuition: A phenomenological foundation for social psychiatry. In M. Englander (Ed.), *Phenomenology and the social context of psychiatry* (pp. 65–93). Bloomsbury.

[73] Heidegger, M. (1999). *Ontology: The hermeneutics of facticity* (J. van Buren, Trans.). Indiana University Press (Original lecture course presented 1923 and published 1988). (篠憲二訳『オントロジー（ハイデッガー全集第 63 巻)』創文社，1992 年)

[74] Merleau-Ponty, M. (1962). *Phenomenology of perception* (C. Smith, Trans.). Routledge & Kegan Paul (Original work published 1945).(中島盛夫訳『知覚の現象学』法政大学出版局，2015 年)

[75] Laing, R. D. (1967). *The politics of experience*. Ballantine. (笠原嘉・塚本嘉壽訳『経験の政治学』みすず書房，2003 年)

[76] Gadamer, H-G. (1975). *Truth and method* (G. Barden & J. Cumming, Ed. & Trans.). Crossroad. (Original work published 1960). (轡田收他訳『真理と方法（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)』法政大学出版局，2012 年・2015 年・2021 年)

[77] Heidegger, M. (2001b). *Zollikon seminars: Protocols—conversations—letters* (M. Boss, Ed., F. Mayr & R. Askay, Trans.). Northwestern University Press (Original work published 1987). (木村敏・村本詔司訳『ツォリコーン・ゼミナール』みすず書房，1997 年)

俳優・緒形拳関係資料目録　その 1

馬場弘臣

東海大学教育開発研究センター教授，文明研究所員兼任

〔研究報告〕

1．俳優・緒形拳

戦後の日本を代表する俳優として知られた緒形拳は，1937（昭和 12）年 7 月 20 日，東京府東京市牛込区（現・東京都新宿区）で生まれた．俳優を志したのは，今はなき劇団新国劇（1917 年～ 1987 年）で島田正吾（1905 年～ 2004 年）と並ぶ看板役者であった辰巳柳太郎（1905 年～ 1989 年）の「王将」に憧れたからであるという．「王将」は将棋の棋士で，関西名人を名乗った坂田三吉（1870 年～ 1946 年）をモデルにした戯曲で，劇作家・北條秀司（1902 年～ 1996 年）の代表作の一つであった．緒形はその北條の紹介で，1958（昭和 33）年，新国劇に入団した．それから 2008（平成 20）年 10 月 5 日に 71 歳で亡くなるまで，その俳優人生はちょうど 50 年を数えている．

新国劇入団から順調にキャリアを重ねた緒形は，1960（昭和 35）年 6 月，明治座で公演された「遠い一つの道」において，ボクサー白木保役で初めて主役を務めた．緒形にとってさらに大きな転機となったのが，1965（昭和 40）年に放映された第 3 回 NHK 大河ドラマ「太閤記」で，主演の豊臣秀吉に抜擢されたことであった．大河ドラマに主演したことで緒形は，俳優として一躍全国区の名声を得ることになる．緒形はこれ以降，新国劇で主役を務めることが多くなった．また，第 4 回 NHK 大河ドラマ「義経」でも弁慶役を演じたこともあって，新国劇以外にも活躍の場を広げていくこととなった．

ところが，1968（昭和 43）年 10 月，緒形は 10 年間在団していた新国劇を退団した．その後緒形は，積極的にテレビの世界に活躍の場を広げていくことになるが，それ以上に緒形が目指したのが映画の世界であった．映画界での大きな転機となったのが，1979（昭和 54）年に野村芳太郎監督作品「鬼畜」（松竹）で，第 2 回日本アカデミー賞最優秀主演男優賞を受賞したことであった．「鬼畜」では他にも第 21 回ブルーリボン賞，第 33 回毎日映画コンクール，第 52 回シネマ旬報ベスト・テン等々，主要な賞を総なめにした．また，この翌年，主演を務めた今村昌平監督作品「復讐するは我にあり」（松竹）は，第 4 回日本アカデミー賞作品賞を受賞し，その後も 1984（昭和 59）年には，今村昌平監督作品「楢山節考」（東映），五社英雄監督作品「陽暉楼」（東映），相米慎二監督作品「魚影の群れ」（松竹富士）の 3 作品で，第 7 回日本アカデミー賞最優秀主演男優賞を受賞した．「楢山節考」は第 36 回カンヌ国際映画祭（フランス）において，パルム・ドールを獲得している．さらに，1987（昭和 62）年，深作欣二監督作品「火宅の人」（東映）で，3 回目の日本アカデミー最優秀主演男優賞を受賞するなど，1970 年代末から 90 年代の始めにかけての映画界を席巻したといえよう．

テレビの世界では，1982（昭和 57）年に放映された NHK 大河ドラマ「峠の群像」の大石内蔵助役で 2 回目の主役を務めるなど，大河ドラマへの出演は 9 回を数えている．また民放でも，1972（昭和 47）年に，今に続く時代劇の必殺シリーズの第 1 作目「必殺仕掛人」（ABC 朝日放送）で主演の藤枝梅安役を演じたほか，名無しの探偵シリーズ（日本テレビ，1982 年～ 1996 年），「迷宮課刑事おみやさん」（ABC 朝日放送，1985 年）等の探偵物，「愛はどうだ」（TBS，1992 年），「ポケベルが鳴らなくて」（日本テレビ，1993 年）等のトレンディードラマ，単発ドラマでも「炎の料理人・北大路魯山人」（日本テレビ，1987 年），「静寂の声 乃木希典・静子の生涯」（ABC 朝日放送，1990 年）等の人物物から，「山田太一シリーズ：タクシー・サンバ」（NHK，1981 年），「破獄」（NHK，1985 年），最後の主演ドラマ「帽子」（NHK，2008 年）等，評価の高いドラマに多数出演し，数々の

賞を受賞している．さらに，ドキュメンタリーでも，「ネイチャリングスペシャル　神々の峰・アンデス大自然行」（テレビ朝日，1986 年）をはじめとするネイチャリングスペシャルシリーズ，TBS テレビ開局 40 周年記念番組の「萬里の長城」（TBS，CCTV（中国中央電視台），1991 年），「日本海大紀行」（TBS，1995 年），最後のドキュメンタリーとなった「NHK スペシャル　プラネットアース」（NHK，BBC，ディスカバリーチャンネル，2005 年～ 2006 年）等々，貴重な映像を残されている．

このように緒形拳は，新国劇の舞台から始まって，映画，テレビとまんべんなく活躍した稀有な俳優であった．最後に，新国劇について，付言しておきたい．劇団を飛び出すことで，一度は袂を分かつ形となった緒形であったが，1970 年代の後半頃から雪解けがはじまり，1979（昭和 54）年 4 月に新橋演舞場で開催された新国劇の公演に，退団後初めて特別出演が叶うことになった．また，新橋演舞場で 1987（昭和 62）年 8 月に開催された公演は，新国劇創立 70 周年記念公演であり，同時に劇団の解散公演となった．緒形はここで「王将」の坂田三吉役を演じた．緒形にとって，新国劇はまさに役者としての魂のふる里と言ってもよい存在であり，晩年も新国劇に対する熱い思いを語っていた．緒形最後の舞台が，師・島田正吾が演じたひとり芝居で，新国劇伝統の「シラノ・ド・ジュベラック」を元にした「白野」であったことは，何よりもその俳優人生を物語るものであったといえよう．

2. 資料の整理と目録

緒形拳が残した資料の整理方法については，また別稿を準備したいと思う．一言だけ付言しておけば，緒形の資料群を全体的に眺めてみれば，おそらく一流の俳優であれば，残ったであろうと思われる資料がほぼもれなく残されているのではないだろうか．次から次へと舞台，映画，テレビなどの仕事が入ってくれば，当然，過去のことより未来のことが重要になってくる．今はやりの断捨離を第一に考えるのが普通であろう．もちろん，資料として残しておくのにも場所が必要となる．そうした中で，俳優としての資料がこれだけ残されていたことは，芸能史，大衆文化史における偉大なる遺産だといえよう．

具体的に資料を整理していく上で，特に留意したのは次の 3 点であった．第 1 は，どれだけわかりやすい形で資料を残してゆくかということである．これについては資料の種類ごとに分類してファイリングしていくことにした．資料整理のための用品にも分類のあり方にもいろいろと試行錯誤を繰り返したが，資料群の全体を①台本，②パンフレット，③ポスター，④チラシ，⑤写真，⑥スクラップブック，⑦通信（書簡・葉書等），⑧自筆書画，⑨物品，⑩その他の 10 項目に分けて，それぞれに応じたクリアーファイルを使ってファイリングすることとした．これが第 2 点目である．なお，クリアーファイルを使ったのは，中身がいつでも見えるようにするためである．

第 3 点目は，それぞれの資料番号をどのようにするかというのが問題であった．当初は，資料が保管された場所の見取り図を作成して，資料の原秩序を重視する方向で進めていたが，蔵などの一定の場所に保管されてきたわけではないので，早晩，そうした方法は断念せざるを得なかった．そこで，資料の種類ごとに，例えば台本ならば「D」，パンフレットならば「P」といった第 1 次分類と併せて，それが舞台であれば「B」，映画であれば「E」，テレビドラマであれば「T」という記号をつけた．また，舞台であれば公演開始日，映画であれば公開日，テレビドラマであれば放映日を，「西暦年＋月＋日」として数値化し，同日の台本やパンフレットなどがあった場合は，枝番をつけることとした．本表の「資料番号」はそうしてつけた番号である．

緒形の資料整理は，2017 年度からスタートしたが，最初は蔵書の整理から始まった．その数も 4,200 冊を超えていて，これを目録化するのにかなりの時間を要した．また，これと並行して，緒形の全出演作品目録の作成を急いだ．公演や公開，放送開始日を資料番号のキーとするということもあったが，何より舞台にせよ，映画にせよ，テレビドラマにせよ，出演作品が膨大かつ多岐にわたるため，まずはその全体像を把握する必要があった．この全出演作品目録を基礎として，台本をはじめとする個々の資料を整理していくのである．

ただし，これらの資料整理が本格化する 2020 年度から，新型コロナウイルス（COVID-19）が流行したために，

なかなか整理作業は進まなかった．また資料整理作業の成果として，2019 年 10 月～ 11 月には本学 11 号館付属図書館展示室にて，さらに 2020 年 10 月～ 12 月にかけて横浜市歴史博物館おいて展示会を開催したが，この段階では整理作業としてはまだ十分とはいえなかった．2021 年度から大学院生や学生のアルバイトを増やしたものの，結果的に整理作業が進んだのは新型コロナウイルスが落ち着きを見せた本年度であったといっても過言ではない．まだ全体の作業が終了したわけではないが，とりあえず，①台本，②パンフレット，⑤写真，⑥スクラップブック，⑦通信，⑧自筆書画については，一応の整理がついて目録を公開できるようになった．もっとも，これらについても今後新たな所蔵資料が出てこないとは限らない．また，それぞれの資料目録はかなりの量になるため，今回は第 1 弾として，①台本と⑥スクラップブックの資料目録を公開することとしたい．

①台本は，すべてが残されているというわけではない．自宅の建て替えもあって，古い台本はほぼ処分されていた．そもそも舞台，映画，テレビドラマを合わせて 700 件以上の作品に出演されているのであるから，そのすべての台本を残すことは難しいであろう．ただし，映画であれば「鬼畜」「復讐するは我にあり」「楢山節考」，テレビドラマでいえば「破獄」「百年の男」といった話題作については，きちんと残されている．また，台本には本人はもちろん，共演者のサインがあるものあった．さらには，かなりの書き込みがある台本もあり，出演作に向かう緒形の姿勢を垣間見ることができる．

⑥スクラップブックは，デビュー当時から没年に至るまで，205 冊におよぶ一大資料群である．自分の出演作品に関するスクラップブックを残しておくのは，恩師である北條秀司がそうであったので，その影響だと思われる．ただし，緒形はその大部分をスクラップを収集する専門の業者に依頼して作成してもらっている．新聞や雑誌の切り抜きが主であるが，新聞であれば，地方新聞まで含めて広い範囲で集めているので，これだけでも俳優・緒形拳の研究のみならず，それらが評価された当時の社会背景までを知ることができる一大資料群といえよう．ただし，緒形自身によるスクラップブックは，一覧表のうち 182 番までである．1961（昭和 36）年 8 月から翌年 10 月のスクラップブックがもっとも古く，2005（平成 17）年 1 月から 2008 年 10 月までの冊子が最後であった．183 番から 199 番までの 17 冊は，緒形のマネージャーであった岡田満世氏の手によって整理されたもので，200 番から 205 番までの 6 冊は，緒形が残していた古い雑誌や，スクラップの切れ端などを今回の作業でまとめたもので，これらの総計が 205 冊なのである．いずれにしても，稀に見る貴重なスクラップブックであることは疑いのないところであり，芸能文化史や大衆文化史，さらにはアーカイブ学など，さまざまな研究の進展に期待したいところである．

※資料目録の作成には以下の皆さんが当たった．記して　感謝の意を表する次第である．
浦安衣香　岡崎佑也　岡田満世　郷上涼　小玉春奈
重村つき　瀬戸優香　馬場美穂　目七哲史（五十音順）

〔参考文献〕

・馬場弘臣「演劇アーカイブズの可能性―劇作家北條秀司資料について―」大石学編『時代考証事始め』（東京堂出版，2010 年）
・馬場弘臣・岡崎佑也「俳優『緒形拳』出演作品目録」東海大学文明研究所『文明』No.25，2020 年
・馬場弘臣「戦後大衆文化史の展開と緒形拳」横浜市歴史博物館×東海大学『戦後大衆文化史の軌跡－緒形拳とその時代』（横浜市歴史博物館，2020 年）
・馬場弘臣「講演録 戦後大衆文化史と緒形拳：俳優アーカイブの可能性」東海大学文明研究所『文明』No.26，2021 年）

①台本

No.	種別	年月日	『資 料 表 題』 （内　容）	発給(発行) →受給(請取)	形態 数量	資料I番号 備考
1	舞台	1959.05.02	『新選組異聞』 第一幕：第一場 伏見の土佐屋敷の一室―元治元年(一八六四年)六月五日の午後―/第二場 元誓願寺裏の或る薪炭商の物置の二階―同じ日の午後六時頃―/第三場 五条あたりの一膳めし屋―同じ日の八時頃―/第四場 縄手三縁寺の新選組詰所―翌日の夕方―/第二幕：第一場 第一幕第三場に同じ―同じ日の夜―/第二場 三条小橋池田屋―同じ時刻―/第三場 第一幕第二場に同じ―続く時刻―/第四場 淋しい街―続く時刻―/第五場 第一幕第二場に同じ―次の日の朝―/第三幕：第一場 第一幕第三場と同じ―同じ日の夕方―/第二場 溝川と橋―続く時刻―	劇団：新国劇 劇場：御園座	冊 1	DBS19590502 書込あり
2	舞台	1960.06.	『遠い一つの道』 第一幕：桑田拳ジム/第二幕：桑田拳ジム/第三幕：温泉マーク紫苑荘の離れ/第四幕：(一)後楽園ジムナジアムの選手控室(二)桑田拳ジム近くのガード下	劇団：新国劇 劇場：大阪新歌舞伎座	冊 1	DBS19600600 書込あり/サインあり
3	舞台	1960.10.01	『丹那隧道』 第一幕：予算分科会会場 大正十三年三月[着工より六年経過]/第二幕：熱海線建設事務所の階上 大正十四年七月[着工より七年経過]―前幕の翌年―/第三幕：三島工区現場詰所とその戸外 昭和四年十一月[着工より十一年経過]―前幕の四年後―/第四幕：三島口現場、坑口に近い空地 昭和五年六月[着工より十二年経過]―前幕の翌年―/第五幕：三島坑道内 昭和五年七月―前幕の翌月―/第六幕：熱海側隧道内の奥部 昭和八年六月十九日[着工より十五年経過]―前幕の三年後―	劇団：新国劇 劇場：明治座	冊 1	DBS19601001 書込あり
4	舞台	1961.02.01	『王将一代　坂田三吉の生涯』 第一幕：大坂天王寺付近の露地―明治三十九年・真夏、夕ぐれ近く―/第二幕：（一)京都木屋町の旅館の二階座敷―大正二年・晩春―（二)その夜半/第三幕：大坂ホテルのサロン―大正十三年、初夏―/第四幕：大坂天王寺附近、坂田家の二階―昭和十一年、陽春の午后―/第五幕：京都嵯峨天竜寺の書院―同年、初冬の夕暮―/第六幕：有馬温泉よもぎ屋の湯治部屋―昭和十八年初夏、薄暮―/第七幕：天王寺附近の長屋―昭和二十一年、秋―	劇団：新国劇 劇場：明治座	冊 1	DBS19610201 書込あり/サインあり
5	舞台	1961.07.01	『海の星』 第一幕・第二幕	劇団：新国劇 劇場：明治座	冊 1	DBS19610701 書込あり/サインあり
6	舞台	1961.10.01	『宮本武蔵　終焉』 通夜童子の巻/小次郎の巻/巌流島の巻	劇団：新国劇 劇場：明治座	冊 1	DBS19611001 書込あり。※本題は「宮本武蔵　通夜童子の巻　小次郎の巻　巌流島の巻」
7	舞台	1961.12.03	『六人の暗殺者』 第一幕目：一 近江屋階下・二 近江屋二階・三 近江屋階下・四 寺田屋・五 近江屋階下/第二幕目・第三幕目・第四幕目・第五幕目・大詰	劇団：新国劇 劇場：新橋演舞場	冊 1	DBS19611203 書込あり
8	舞台	1963.02.28	『喧嘩冨士　新場の兄弟』 第一幕：新場、大工音次の家/第二幕：(一)駿河町越後屋蔵前(二)同塀そと/第三幕/(一)相州戸塚庄兵衛宅の庭先(二)音次の家/第四幕：(一)深川木場、越後屋の隠居所―幕そと―(二)駿河町普請場(三)音次の家―幕そと―/第五幕：(一)普請場/(二)屋根の上	劇団：新国劇 劇場：新宿コマ劇場	冊 1	DBS19630228 書込あり/サインあり

①台本

No.	種別	年月日	『資 料 表 題』 （内　容）	発給(発行) →受給(請取)	形態 数量	資料I番号 備考
9	舞台	1964.03.	『荒木又右衛門』 (一)伊賀上野小田町(二)松の木のある道路(三)鎌谷の門外	劇団：新国劇 劇場：新橋演舞場	冊 1	DBS19640300 書込あり/サインあり
10	舞台	1966.03.03	『義経と弁慶』 第一幕・第二幕・第三幕	劇団：新国劇 劇場：新宿コマ劇場	冊 1	DBS19660303
11	舞台	1967.03.02	『花の吉原百人斬り』 序幕：第一場〈夏の午後〉〈野州屋の庭座敷〉第二場〈翌日の午前〉〈久喜屋の階下〉 第三場〈その夜〉〈寿屋の二階〉/第二幕：第一場〈中秋の夜ふけ〉〈久喜屋の二階〉第二場〈翌日の昼〉〈久喜屋の階下〉第三場〈初冬の夜〉〈久喜屋の二階〉第四場〈翌日の午後〉〈久喜屋の階下〉/第三幕：第一場〈翌春の夕方〉〈野洲屋の庭座敷〉/第二場〈翌々日の夜〉〈仲之町〉/第四場〈つづく時刻〉〈仲之町〉	劇団：新国劇 劇場：御園座（目録では） 台本には「歌舞伎座」と明記。	冊 1	DBS19670302 書込あり/サインあり
12	舞台	1972.10.07	『ケイトンズビル事件の九人』	劇場：紀伊國屋ホール	冊 1	DB19721007- 2 書込あり/サインあり
13	舞台	1977.08.	『王将』 第一部第一幕：大阪天王寺附近の露路坂田三吉の住んでいる家の前—明治三十九年の初夏の一日、夕ぐれに近い時刻/第二幕：(一)京都、木屋町の旅館の二階座敷—大正二年の春の一日—(前幕から七年後)（二)同旅館、その夜半/第三幕：東京芝山内の料亭 紅葉館の奥座敷—大正十年の秋の一日(前幕から八年後) 第二部/第四幕：大阪中の島 大阪ホテル—大正十三年の晩夏の一日(前幕から三年後)/第五幕：(一)四天王寺に近い三吉の二階住居—昭和十一年の春の一日(前幕から十二年後)（二)長屋裏の線路際—前場と同じ日の夜/第六幕：洛西嵯峨 天竜寺の奥まった小書院—前幕と同じ年の初冬の一日 第三部/第七幕：有馬温泉・よもぎ屋—昭和十八年晩春(夕ぐれ)/第八幕：天王寺付近の長屋—昭和二十一年秋	劇団：新国劇 劇場：紀伊國屋ホール他全国78か所	冊 1	DBS19770800 書込あり
14	舞台	1979.04.13	『極付 国定忠治』 第一幕：第一場 赤城天神山不動の森/第二幕：第一場 信州権堂町外れ庚申塚・第二場 信州権堂山形屋店先・第三場 半郷の松並木	劇団：新国劇 劇場：新橋演舞場	冊 1	DBS19790413 書込あり。
15	舞台	1979.07.01	『喧嘩富士　新場の兄弟』 第一幕：新場 大工音次の家/第二幕：(一)駿河町越後屋蔵前 (二)同塀そと/第三幕：(一)相州戸塚庄兵衛宅の庭先 (二)音次の家/第四幕：(一)深川木場越後屋の隠居所 (二)音次の家/幕そと (三)普請場	劇団：新国劇 劇場：御園座	冊 1	DBS19790701 書込あり/サインあり
16	舞台	1979.06.	『朦朧車夫』 第一幕：三の輪寄りの日本堤(初秋の日昏れ近く)/第二幕：(一)泪橋の路地の奥、亀太郎の家(前幕と同じ日の晩)（二)善吉の家	劇団：新国劇 劇場：明治座	冊 1	DBS19790600 書込あり/サインあり
17	舞台	1980.05.	『極付 国定忠治—赤城天神山不動の森より小松原まで—』 第一幕：赤城天神山不動の森/第二幕：第一場 信州権堂外れ庚申塚/第二場 信州権堂 山形屋店先 第三場 半郷の松並木	劇団：新国劇 劇場：読売ホール	冊 1	DBS19800500 書込あり

①台本

No.	種別	年月日	『資 料 表 題』 （内　容）	発給(発行) →受給(請取)	形態 数量	資料I番号 備考
18	舞台	1984.10.	『わが町』 プロローグ/第一幕(昭和二十一年春)：第一場A 大阪河童路地/第一場B 〆団治の家の中/第一場C お鶴の家/第二場 ヤミ市/第三場 他吉の家/第二幕(昭和三十九年夏)：第一場 国鉄何某駅/第二場 他吉の家/第三場 橋のたもと/第四場 他吉の家/第三幕(昭和五十九年秋)：A 河童路地/B 新太郎の家/C 新太郎の家/D 新太郎の家/E マニラ大和館(プロローグの十日後)/F 元の新太郎の家/G スクリーン/H 長屋の表/I 〆団治の家	劇場：中座	冊 1	DB19841000 書込あり/サインあり
19	舞台	1985.01.	『平家物語　建礼門院』 第一幕：西八条清盛館の奥庭―治承元年(一一七七)の五月の夜/第二幕：京都御所の泉殿―治承三年(一一七九)の秋の昼/第三幕：朱雀大路羅生門―寿永二年(一一八三)の夏の夕/第四幕：長門の浦壇の浦の海上―元暦二年(一一八五)の早春の夕/第五幕：洛北大原寂光院―建久元年(一一九〇)の春の昼	劇場：日生劇場	冊 1	DB19850100-1 書込あり。裏表紙無し。※本題は「建礼門院―平家物語より―」
20	舞台	1985.01.	『建礼門院―平家物語より―』 第一幕：西八条清盛館の奥庭―治承元年(一一七七)の五月の夜/第二幕：京都御所の泉殿―治承三年(一一七九)の秋の昼/第三幕：朱雀大路羅生門―寿永二年(一一八三)の夏の夕/第四幕：長門の浦壇の浦の海上―元暦二年(一一八五)の早春の夕/第五幕：洛北大原寂光院―建久元年(一一九〇)の春の昼	劇場：日生劇場	冊 1	DB19850100-2 書込あり/サインあり
21	舞台	1987.08.01	『極付 国定忠治―赤城天神山不動の森より土蔵まで―』 第一幕：赤城天神山不動の森/第二幕：第一場 信州権堂町外れ庚申塚 第二場 信州権堂 山形屋店先 第三場 半郷の松並木/第三幕：上州植木村の庵室/第四幕：土蔵の内	劇団：新国劇 劇場：御園座	冊 1	DBS19870801 書込あり/サインあり
22	舞台	1987.08.26	『極付 国定忠治―赤城天神山不動の森より土蔵の内まで―』 第一幕：赤城天神山不動の森/第二幕：第一場 信州権堂町外れ庚申塚第二場 山形屋の店先 第三場 半郷の松並木/第三幕：土蔵の内	劇団：新国劇 劇場：御園座	冊 1	DBS19870826-1 書込あり/サインあり
23	舞台	1987.08.26	『一本刀土俵入』 序幕/一場 取手の宿 二場 利根渡し/第二幕：一場 布施の川 二場 お蔦の家 三場 軒の山桜	劇団：新国劇 劇場：御園座	冊 1	DBS19870826-2 書込あり/サインあり
24	舞台	1987.08.26	『王将』 第一幕：大阪天王寺付近の露路―坂田三吉の住んでいる家の前/第二幕：(一)京都木屋町の旅館の二階座敷 (二)同旅館―その夜半/第三幕：東京芝山内の料亭 紅葉館の奥座敷	劇団：新国劇 劇場：御園座	冊 1	DBS19870826-3 書込あり/サインあり
25	舞台	1993.03.	『信濃の一茶』 第一幕：柏原村本陣の宿の奥座敷/第二幕：妙恵寺の庫裡/第三幕：村外れのソバ畑/第四幕：黒姫山の麓 巫女の祈祷所/第五幕：妙恵寺の墓地/第六幕：土蔵を住居にしている一茶宅の前	劇場：新橋演舞場	冊 1	DB19930300- 1 書込あり/サインあり
26	舞台	1993.03.	『信濃の一茶』 第一幕：柏原村本陣の宿の奥座敷/第二幕：妙恵寺の庫裡/第三幕：村外れのソバ畑/第四幕：黒姫山の麓 巫女の祈祷所/第五幕：妙恵寺の墓地/第六幕：土蔵を住居にしている一茶宅の前	劇場：新橋演舞場	冊 1	DB19930300- 2 書込あり

①台本

No.	種別	年月日	『資 料 表 題』 （内　容）	発給(発行) →受給(請取)	形態 数量	資料I番号 備考
27	舞台	1994.03.	『大菩薩峠―机　龍之助の巻―』 第一幕：(一)大菩薩峠頂上 (二)御嶽山裏の水車小屋 (三)御嶽山上大試合 (四)霧の御坂/第二幕：(一)江戸本郷湯島妻恋坂 お絹の家 (二)机龍之助の浪宅 (三)上野新坂下/第三幕：(一)御簾の間(京都、島原の廓)/大詰：角屋の裏手	劇場：新橋演舞場	冊 1	DB19940300- 1 書込あり/サインあり
28	舞台	1994.03.	『大菩薩峠―机　龍之助の巻―』 第一幕：(一)大菩薩峠頂上 (二)御嶽山裏の水車小屋 (三)御嶽山上大試合 (四)霧の御坂/第二幕：(一)江戸本郷湯島妻恋坂 お絹の家 (二)机龍之助の浪宅 (三)上野新坂下/第三幕：(一)御簾の間(京都、島原の廓)/大詰：角屋の裏手	劇場：新橋演舞場	冊 1	DB19940300- 2 サインあり
29	舞台	1995.03.	『リチャード三世』 第1場 オープニング/第2場 レディー・アン/第3場 宮廷①/第4場 クラレンス公の暗殺/第5場 宮廷②/第5ａ場 宮廷③/第6場 市民達/第7場 ヨーク公/第8場 エドワード王子の到着/第9場 ヘースティングズ卿の屋敷/第10場 ポンフレット城/第11場 ロンドン塔内の会議/第12場 市長/第13場 代書人/第14場 キングメーカー/第15場 ロンドン塔/第16場 ティレル/第16ａ場 ティレル/第17場 黒装束の女/第18場 クリストファー卿/第19場 バッキンガム/第20場 リッチモンド/第21場 ボズワースの平原/第22場 馬/第23場 終り	劇場：銀座セゾン劇場、札幌市教育文化会館	冊 1	DB19950300- 1 書込あり/サインあり
30	舞台	1995.03.	『リチャード三世』 第1場 オープニング/第2場 レディー・アン/第3場 宮廷①/第4場 クラレンス公の暗殺/第5場 宮廷②/第5ａ場 宮廷③/第6場 市民達/第7場 ヨーク公/第8場 エドワード王子の到着/第9場 ヘースティングズ卿の屋敷/第10場 ポンフレット城/第11場 ロンドン塔内の会議/第12場 市長/第13場 代書人/第14場 キングメーカー/第15場 ロンドン塔/第16場 ティレル/第16ａ場 ティレル/第17場 黒装束の女/第18場 クリストファー卿/第19場 バッキンガム/第20場 リッチモンド/第21場 ボズワースの平原/第22場 馬/第23場 終り	劇場：銀座セゾン劇場、札幌市教育文化会館	冊 1	DB19950300- 2 書込あり/サインあり/付箋多数
31	舞台	2000.02.	『ゴドーを待ちながら』 第一幕・第二幕	劇場：Bunkamura	冊 1	DB20000200
32	舞台	2001.10.	『信濃の一茶　準備稿』 第一幕：柏原村本陣の宿の奥座敷/第二幕：妙恵寺の庫裡/第三幕：村外れのソバ畑/第四幕：黒姫山の麓 祈祷師の家/第五幕：妙恵寺の墓地/第六幕：土蔵を住居にしている一茶宅の前	劇場：新橋演舞場	冊 1	DB20011000-1 書込あり
33	舞台	2001.10.	『信濃の一茶　上演台本』 第一幕：柏原村本陣の宿の奥座敷/第二幕：妙恵寺の庫裡/第三幕：村外れのソバ畑/第四幕：黒姫山の麓 祈祷師の家/第五幕：妙恵寺の墓地/第六幕：土蔵を住居にしている一茶宅の前	劇場：新橋演舞場	冊 1	DB20011000-2 書込あり/サインあり
34	舞台	2002.06.14	『風狂伝‘02　決定稿』 第一場 驀進する夜行列車(夜)/第二場 ガード下の銀次の家(夜)/第三場 理髪店「バーバー・ジョージ」(昼)/第四場 夕暮れのガード下(銀次の住居)(夕)/第五場 本牧のチャブ屋「上海恋々」(夕暮)/第六場 理髪店「バーバー・ジョージ」(夜)/第七場 汽車の中(夜)/第八場 本牧のチャブ屋「上海恋々」(昼)/第九場 ガード下の銀次の家(夜更け)/第十場 本牧のチャブ屋「上海恋々」/第十一場(フィナーレ)ガード下の銀次の家(夜)	劇場：ル・テアトル銀座（東京公演） シアター・ドラマシティ（大阪公演）	冊 1	DB20020614-1 書込あり/サインあり ※本題は「ロマンティックコメディ　風狂伝‘02」

①台本

No.	種別	年月日	『資 料 表 題』 （内　容）	発給(発行) →受給(請取)	形態 数量	資料I番号 備考
35	舞台	2002.06.14	『「風狂伝'02」第一稿』 第一場 驀進する夜行列車(夜)/第二場 ガード下の銀次の家(夜)/第三場 理髪店「バーバー・ジョージ」(昼)/第四場 夕暮れのガード下(銀次の住居)(夕)/第五場 本牧のチャブ屋「上海恋々」(夕暮)/第六場 理髪店「バーバー・ジョージ」(夜)/第七場 汽車の中(夜)/第八場 本牧のチャブ屋「上海恋々」(昼)/第九場 ガード下の銀次の家(夜更け)/第十場 本牧のチャブ屋「上海恋々」/第十一場(フィナーレ)ガード下の銀次の家(夜)	劇場：ル・テアトル銀座（東京公演）	冊 1	DB20020614-2 書込あり/付箋多数
36	舞台	2002.12.10	『60歳のラブレター』	劇場：世田谷パブリックシアター	冊 1	DB20021210
37	舞台	2005.01.	『子供騙し』 第一場・第二場	劇場：紀伊國屋ホール	冊 1	DB20050100 書込あり/サインあり/付箋多数。
38	舞台	2006.08.14	『白野　三場』		冊 1	ODB20060814
39	舞台	2007.03.	『劇団若獅子結成二十周年記念公演　国定忠治―才兵衛茶屋より土蔵大捕物まで―』 第一幕：第一場 赤城山麓室沢村才兵衛茶屋 第二場 赤城天神山不動の森/第二幕：第一場 信州権堂町外れ庚申塚・第二場 信州権堂山形屋店先 ・第三場 半郷の松並木/第三幕：上州植木村の庵室/第四幕：国定村分家の土蔵の中	劇場：大阪・松竹座他全国15か所	冊 1	DB20070300 書込あり
40	映画	1960.09.13	『遠い一つの道②　決定稿』 1「アメヤ横町の運動具店(上野御徒町・夏)」から78「同・中」	製作：東京映画 配給：東宝	冊 1	DE19600913-1 破損あり（表紙に破れ）
41	映画	1960.09.13	『遠い一つの道①』 1「アメヤ横町の運動具店(上野御徒町・夏)」から78「同・中」	製作：東京映画 配給：東宝	冊 1	DE19600913-2 書込あり/サインあり/破損あり
42	映画	1979.04.21	『復讐するは我にあり【第二稿】』 A「五島・青砂浦海岸(昭和十年夏)」から166「教会の前」	製作・配給：松竹・今村プロダクション	冊 1	DE19790421-1 破損あり
43	映画	1979.04.21	『復讐するは我にあり』 1「八木山峠―昭和39年1月4日―」から182「別府湾を望む丘」	製作・配給：松竹・今村プロダクション	冊 1	DE19790421-2 書込あり/破損あり
44	映画	1978.10.07	『鬼畜』 1「T駅・駅前」から166「エンド・マーク」	製作・配給：松竹	冊 1	DE19781007
45	映画	1983.04.29	『楢山節考』 冬：1「雪に覆われた北アルプスの峯々」から152「屋根」	製作・配給：東映・今村プロダクション	冊 1	DE19830429-1 書込あり
46	映画	1983.04.29	『楢山節考　第二稿』 冬：1「雪に覆われた北アルプスの峯々」から152「屋根」	製作・配給：東映・今村プロダクション	冊 1	DE19830429-2 書込あり/破損大
47	映画	1988.03.05	『ラブストーリーを君に』 1「新宿駅・ホーム」から126「山稜」	製作・配給：東映・オスカープロモーション	冊 1	DE19880305 サインあり
48	映画	1985.10.04	『MISHIMA』 1「海(夜)」から114「成層圏(昼間)」	製作・配給：フィルムリンク・インターナショナル ゾエトロープ ルーカス・フィルム	冊 1	DE19851004-1 書込あり/サインあり

①台本

No.	種別	年月日	『資 料 表 題』 （内　容）	発給(発行) →受給(請取)	形態 数量	資料I番号 備考
49	映画	1985.10.04	『MISHIMA　準備稿』 1「海(夜)」から109「断崖(夜)『弄馬』」	製作・配給：フィルムリンク・インターナショナル ゾエトロープ ルーカス・フィルム	冊 1	DE19851004-2 書込あり
50	映画	1983.10.29	『魚影の群れ　松竹作品第一稿』 1「夏の海が光って打ち寄せている」から126「第一登喜丸」	製作・配給：松竹富士	冊 1	DE19831029
51	映画	1992.06.25	『おろしや国酔夢譚　撮影稿』 1「タイトル」から143「海沿いの道」	製作：大映・電通 配給：東宝	冊 1	DE19920625 書込あり/破損大
52	映画	1995.09.02	『さよなら、ニッポン！～南の島の独立宣言～　撮影稿』 1「黒身にスーパー」から149「珊瑚礁(昼)」	配給：東宝株式会社 製作：ライトヴィジョン株式会社 企画製作協力：M．M．i．株式会社	冊 1	ODE19950902 書込あり/サインあり/裏表紙分離
53	映画	1996.06.29	『GONIN2』 2「新宿ピエビル・B1 宝石店《ジュエリー・ピエ》の中(午後)」から「大都会・とある青空駐車場(雨の夜)」	製作：衛星劇場 配給：松竹	冊 1	DE19960629-1 書込あり/サインあり
54	映画	1996.06.29	『GONIN2　準備稿』 1「宝石店《ジュエリー・ピエ》の中(夕)」103「志保の住む家・台所(同じ頃)」	製作：衛星劇場 配給：松竹	冊 1	DE19960629-2
55	映画	1999.01.30	『リュウセイ【仮題】　第二項』 「早川」のシーン	製作：リトルモア	冊 1	DE19990130-1 書込あり。※本題は「流★星」
56	映画	1999.01.30	『リュウセイ【仮題】　決定稿』 「早川」のシーン	製作：リトルモア	冊 1	DE19990130-2 書込あり
57	映画	1999.10.30	『菊―あつもの―　検討稿』 1「北陸地方の小さな街」から139「表の坂道」	製作：シネカノン、日活、アンシャンテ 配給：シネカノン	冊 1	DE19991030-1 書込あり。※本題は「あつもの　杢平の秋」
58	映画	1999.10.30	『菊―あつもの―　検討稿』 1「北陸地方の小さな街」から139「表の坂道」	製作：シネカノン、日活、アンシャンテ 配給：シネカノン	冊 1	DE19991030-2 書込あり/サインあり
59	映画	1999.10.30	『杢平の秋　決定稿』 1「北陸地方の小さな街」から135「表の坂道」	製作：シネカノン、日活、アンシャンテ 配給：シネカノン	冊 1	OPE19991030-3
60	映画	1999.10.30	『杢平の秋　決定稿』 1「北陸地方の小さな街」から135「表の坂道」	製作：シネカノン、日活、アンシャンテ 配給：シネカノン	冊 1	OPE19991030-4 書込あり/表紙に「杢平の秋」と訂正
61	映画	2000.11.04	『殺し』 1「浜崎家(ロッヂ)」から109「坂道・夜」	製作：ミュージアム 制作：ミュージアムピクチャーズ 制作協力：ジャストアンシャンテ モンキープロダクション	冊 1	OPE20001104-1

①台本

No.	種別	年月日	『資 料 表 題』 （内　容）	発給(発行) →受給(請取)	形態 数量	資料I番号 備考
62	映画	2000.11.04	『殺し』 1「浜崎家(ロッヂ)」から113「同・ダイニング」	製作：ミュージアム 制作：ミュージアムピクチャーズ 制作協力：ジャスト アンシャンテ モンキープロダクション	冊 1	OPE20001104-2 書込あり/サインあり
63	映画	2002.09.07	『歩く人』 1「暑寒別川」から95「道F」	製作・配給：モンキータウンプロダクション	冊 1	OPE20020907-1 書込あり
64	映画	2002.09.07	『歩く人』 1「暑寒別川」から95「道F」	製作・配給：モンキータウンプロダクション	冊 1	DE20020907-2 書込あり/サインあり/付箋多数あり
65	映画	2004.08.21	『ミラーを拭く男　初稿』 1「宮城県仙台市・路上(朝)」から118「長野県小諸市・路上」	製作：日本スカイウエイ、パル企画、イエス・ビジョンズ、ビジョンファクトリー、NHKエンタープライズ 配給：パル企画	冊 1	DE20040821-1
66	映画	2004.08.21	『劇場用映画　ミラーを拭く男　準備稿台本』 1「宮城県仙台市・路上(朝)」から109「長野県小諸市・路上(夕)」	製作：日本スカイウエイ、パル企画、イエス・ビジョンズ、ビジョンファクトリー、NHKエンタープライズ 配給：パル企画	冊 1	DE20040821-2 書込あり/サインあり
67	映画	2004.10.09	『ラスト・クォーター～下弦の月～　準備稿』 1「瞳」から180「洋館・ピアノ部屋／夜」	製作：松竹、伊藤忠商事、読売新聞社、日本出版販売、ビー・ビー・ケーブル、ビッグショット 配給：松竹	冊 1	DE20041009-1 書込あり。※本題は「下弦の月～ラスト・クォーター～」
68	映画	2004.10.09	『ラスト・クォーター　決定稿』 1「瞳」から191「洋館・二階 ピアノ部屋／夜」	製作：松竹、伊藤忠商事、読売新聞社、日本出版販売、ビー・ビー・ケーブル、ビッグショット 配給：松竹	冊 1	DE20041009-2 書込あり
69	映画	2004.10.30	『隠し剣　鬼の爪　決定稿』 1「川のほとり」から94「川べり」	製作：松竹、日本テレビ放送網、住友商事、博報堂DYメディアパートナー、日本出版販売、衛星劇場 配給：松竹	冊 1	DE20041030-1 書込あり/サインあり
70	映画	2004.10.30	『隠し剣　鬼の爪　改訂稿』 1「北国の春」から97「同・居間」	製作：松竹、日本テレビ放送網、住友商事、博報堂DYメディアパートナー、日本出版販売、衛星劇場 配給：松竹	冊 1	DE20041030-2
71	映画	2004.10.30	『隠し剣　鬼の爪　決定稿』 1「川のほとり」から94「川べり」	製作：松竹、日本テレビ放送網、住友商事、博報堂DYメディアパートナー、日本出版販売、衛星劇場	冊 1	ODE20041030

①台本

No.	種別	年月日	『資 料 表 題』 （内　容）	発給(発行) →受給(請取)	形態 数量	資料I番号 備考
72	映画	2005.10.01	『蝉しぐれ　決定稿』 1「秋」から167「鏡の如く」	製作：蝉しぐれ製作委員会 配給：東宝	冊 1	DE20051001-1 表紙に印あり
73	映画	2005.10.01	『蝉しぐれ　決定稿』 「プロローグ」から164「鏡の如く」	製作：蝉しぐれ製作委員会 配給：東宝	冊 1	DE20051001-2 書込あり
74	映画	2005.10.01	『蝉しぐれ　決定稿』 「プロローグ」から164「鏡の如く」	製作：蝉しぐれ製作委員会 配給：東宝	冊 1	DE20051001-3 書込あり/サインあり
75	映画	2006.06.03	『佐賀のがばいばあちゃん　決定稿』 1「新幹線・車内」から142「ばあちゃんの家からの道」	製作：プロダクションアマゾン 映画「佐賀のがばいばあちゃん」製作委員会 配給：ティ・ジョイ、東映	冊 1	DE20060603
76	映画	2006.09.16	『ミラクルバナナ　決定稿』 1「和紙工房(イメージ)」から188「バナナ園に続く一本道」	製作：エキスプレス、配給：ミラクルバナナ製作委員会	冊 1	DE20060916 書込あり/サインあり
77	映画	2006.12.01	『武士の一分』 1「タイトル」から88「同・居間」	製作：「武士の一分」製作委員会 配給：松竹	冊 1	DE20061201-1 書込あり
78	映画	2006.12.01	『武士の一分　撮影台本』 1「タイトル」から86「同・居間」	製作：「武士の一分」製作委員会 配給：松竹	冊 1	DE20061201-2 書込あり/サインあり
79	映画	2006.12.01	『武士の一分　改訂稿』 1「タイトル」から88「同・居間」	製作：「武士の一分」製作委員会 配給：松竹	冊 1	DE20061201-3 書込あり
80	映画	2006.12.16	『長い散歩　撮影台本』 1「木曽川の川原」から172「刑務所・外(五年後)」	製作：ゼロ・ピクチャアズ 配給：キネティック	冊 1	DE20061216-1 書込あり/サインあり 付箋あり
81	映画	2006.12.16	『長い散歩　準備稿』 1「木曽川の川原」から169「同・外(五年後)」	製作：ゼロ・ピクチャアズ 配給：キネティック	冊 1	DE20061216-2 書込あり/サインあり
82	映画	2006.12.16	『長い散歩　初稿』 1「バスの窓から見える景色」から178「同・外(五年後)」	製作：ゼロ・ピクチャアズ 配給：キネティック	冊 1	DE20061216-3
83	映画	2006.12.16	『長い散歩　撮影台本』 1「木曽川の川原」から172「刑務所・外(五年後)」	製作：ゼロ・ピクチャアズ 配給：キネティック	冊 1	ODE20061216 サインあり
84	映画	2008.03.01	『ライラの冒険　黄金の羅針盤』	日本語版制作：ギャガ・コミュニケーションズ、東北新社 配給：ギャガ・コミュニケーションズ、松竹	冊 1	DE20080301-1 書込あり
85	映画	2008.03.01	『ライラの冒険　黄金の羅針盤』 登場人物名/場面展開とセリフ	日本語版制作：ギャガ・コミュニケーションズ、東北新社 配給：ギャガ・コミュニケーションズ、松竹	冊 1	ODE20080301-2
86	映画	2008.07.12	『ゲゲゲの鬼太郎　千年呪い歌　撮影決定稿』 1「千年前の漁村(深夜)」から101「エンドロール」	製作：「ゲゲゲの鬼太郎」フィルムパートナーズ 配給：松竹	冊 1	DE20080712 書込あり/サインあり

①台本

No.	種別	年月日	『資 料 表 題』 （内　容）	発給(発行) →受給(請取)	形態 数量	資料I番号 備考
87	映画	2008.07.12	『ゲゲゲの鬼太郎　千年呪い歌　撮影決定稿』 1「千年前の漁村(深夜)」から101「エンドロール」	製作：「ゲゲゲの鬼太郎」フィルムパートナーズ 配給：松竹	冊 1	ODE20080712
88	TVﾄﾞﾗﾏ	1965. 0.	『表題なし（連続テレビドラマ「太閤記」の準備稿）』	不明	冊 1	DTV19650000 破損大/傷み大
89	TVﾄﾞﾗﾏ	1965.10.24	『連続テレビドラマ　太閤記　第四十三回―憤涙―』 「1 タイトル」から「16 広徳寺の一室」まで	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV19651024 書込あり/サインあり
90	TVﾄﾞﾗﾏ	1966.01.30	『連続テレビドラマ　源義経　第五回　熊坂はやて』 「1 タイトル」から「16 千石船の上」まで	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV19660130 書込あり/サインあり。※本題は「大河ドラマ　源義経」
91	TVﾄﾞﾗﾏ	1966.10.02	『連続テレビドラマ　源義経　第四十回　堀河夜討』 「1 タイトル」から「/33 同じ堀河屋形の寝殿」まで	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV19661002 書込あり/サインあり。※本題は「大河ドラマ　源義経」
92	TVﾄﾞﾗﾏ	1973.02.10	『連続カラーテレビ映画　必殺仕掛人　第二十四回　改訂稿』 「1 荒寺(夜)」から「61 寺の表」まで	制作：松竹、朝日放送	冊 1	DTV19730210 書込あり/サインあり
93	TVﾄﾞﾗﾏ	1979.01.11	『赤い嵐　第七話』 「1 『いずみ寿司』・店(夜)」から「34 ある橋の上」まで	製作：大映テレビ、TBS	冊 1	DTV19790111 書込あり/サインあり
94	TVﾄﾞﾗﾏ	1982.11.07	『峠の群像　第四十四回　第一次討ち入り計画』 「タイトル」から「S62 同・墓前(夜)」まで	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV19821107 書込あり
95	TVﾄﾞﾗﾏ	1985.04.06	『ドラマスペシャル　破獄』 「A―1(空撮)初冬の北海道」から「S136 街」まで	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV19850406 書込あり/サインあり
96	TVﾄﾞﾗﾏ	1991.02.24	『大河ドラマ　太平記　第8回「妖霊星」』 「S1 鎌倉の路(夜)」から「S31 柳営内の庭」まで	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV19910224-1 書込あり
97	TVﾄﾞﾗﾏ	1991.02.24	『大河ドラマ　太平記　第8回「妖霊星」』 「S1 鎌倉の路(夜)」から「S31 柳営内の庭」まで	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV19910224-2 書込あり
98	TVﾄﾞﾗﾏ	1995.08.01	『火曜サスペンス劇場　名無しの探偵シリーズ・11「歪んだ季節」（仮題）』 「1 清葉女子学園高等部・門(夕)」から「135 エンディング」まで	製作：STAFFアズバーズ、日本テレビ	冊 1	DTV19950801 書込あり/サインあり
99	TVﾄﾞﾗﾏ	1995.10.21	『ドラマ　第1分冊』 「A1 山里―岡山県××郡」から「S45 もとの寝室」まで	送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV19951021-1 ※本題は「土曜ドラマ　百年の男」
100	TVﾄﾞﾗﾏ	1995.10.21	『土曜ドラマ　百年の男』 「A1 山里―岡山県××郡」から「S78 貯水池」まで	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV19951021-2 書込あり/サインあり。※本題は「火曜サスペンス劇場　名無しの探偵シリーズ12　兄弟」

①台本

No.	種別	年月日	『資 料 表 題』 （内　容）	発給(発行) →受給(請取)	形態 数量	資料I番号 備考
101	TVﾄﾞﾗﾏ	1996.01.03	『正月時代劇　命捧げ候　夢追い坂の決闘！撮影稿　』 「S1 上州・月田村峠の道(六月)」から「S65 道(深夜から早暁)	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV19960103 書込あり/サインあり
102	TVﾄﾞﾗﾏ	1996.02.16	『金曜エンタテインメント　ナニワ金融道　決定稿』 「1 道頓堀(夜)」から「99 走る車の中(夜)」まで	放送局・制作会社：フジテレビ	冊 1	DTV19960216 書込あり
103	TVﾄﾞﾗﾏ	1996.04.23	『火曜サスペンス劇場　名無しの探偵12　愛の彷徨（仮題）』 「1 俺の探偵事務所・表(昼)」から「115 同・前(夜)」まで	製作：STAFFアズバーズ、日本テレビ	冊 1	DTV19960423 書込あり/サインあり。※本題は「火曜サスペンス劇場　名無しの探偵シリーズ12　兄弟」
104	TVﾄﾞﾗﾏ	1996.07.01	『よみうりテレビ連続ドラマ　8月のラブソング（仮題）第1話』 「1 燃え上がる炎」から「88 土門飯店・自宅・居間で」まで	制作協力：共同テレビジョン 制作・著作：よみうりテレビ（日本テレビ系列）	冊 1	DTV19960701-1 ※本題は「八月のラブソング」
105	TVﾄﾞﾗﾏ	1996.07.01	『八月のラブソング　第1回』 「1 燃え上がる炎」から「79 土門飯店・自宅・居間で」まで	制作協力：共同テレビジョン 制作・著作：よみうりテレビ（日本テレビ系列）	冊 1	DTV19960701-2
106	TVﾄﾞﾗﾏ	1996.07.	『金曜エンタテイメント　橋の雨』 「1 隅田川(初夏)」から「169 雨の吾妻橋(夜)」まで	制作協力：ベイシス 制作・著作：共同テレビジョン、フジテレビ	冊 1	DTV19960700 書込あり/サインあり
107	TVﾄﾞﾗﾏ	1996.08.12	『八月のラブソング　第7回』 「1 道」から「66 万座鹿沢口駅・ホーム」まで	制作協力：共同テレビジョン 制作・著作：よみうりテレビ（日本テレビ系列）	冊 1	DTV19960812 書込あり/サインあり
108	TVﾄﾞﾗﾏ	1996.08.19	『八月のラブソング　第8回』 「1 土門飯店・居間」から「76 同・千花の部屋」	制作協力：共同テレビジョン 制作・著作：よみうりテレビ（日本テレビ系列）	冊 1	DTV19960819 書込あり/サインあり
109	TVﾄﾞﾗﾏ	1996.08.26	『八月のラブソング　第9回』 「1 土門飯店・千花の部屋」から「77 同・居間」まで	制作協力：共同テレビジョン 制作・著作：よみうりテレビ（日本テレビ系列）	冊 1	DTV19960826 書込あり/サインあり
110	TVﾄﾞﾗﾏ	1996.10.04	『ドラマスペシャル　最後の家族旅行（仮題）準備稿③』 「1 坂道(夕方)」から「129 同・出発ゲート」まで	放送局・制作会社：TBS	冊 1	DTV19961004
111	TVﾄﾞﾗﾏ	1997.01.05	『大河ドラマ　毛利元就　第一回「親のない子」準備稿改―2』 「○タイトル―毛利元就」から「92 同・松寿丸の居室(深夜)」まで	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV19970105
112	TVﾄﾞﾗﾏ	1998.01.07	『水曜シリーズドラマ　翔ぶ男』 「S1 野原―冬」から「S50 車の中」まで	放送局・制作会社：NHK、NHKエンタープライズ21（現・NHKエンタープライズ）	冊 1	DTV19980107 書込あり/サインあり

①台本

No.	種別	年月日	『資 料 表 題』 （内　容）	発給(発行) →受給(請取)	形態 数量	資料I番号 備考
113	TVﾄﾞﾗﾏ	1998.01.14	『水曜シリーズドラマ　翔ぶ男』 「S1 早朝の冬の道」から「S54 青野家の前の道」	放送局・制作会社：NHK、NHKエンタープライズ21（現・NHKエンタープライズ）	冊 1	DTV19980114 書込あり/サインあり
114	TVﾄﾞﾗﾏ	1998.01.21	『水曜シリーズドラマ　翔ぶ男』 「S1 青野家の前の道(夕暮れ)」から「S38 夜の道」まで	放送局・制作会社：NHK、NHKエンタープライズ21（現・NHKエンタープライズ）	冊 1	DTV19980121 書込あり/サインあり
115	TVﾄﾞﾗﾏ	1998.01.28	『水曜シリーズドラマ　翔ぶ男』 「S1 警視庁」から「S43 闇」まで	放送局・制作会社：NHK、NHKエンタープライズ21（現・NHKエンタープライズ）	冊 1	DTV19980128 書込あり/サインあり
116	TVﾄﾞﾗﾏ	1998.02.04	『水曜シリーズドラマ　翔ぶ男』 「S1 野原―冬(由吉のイリュージョン)」から「S55 同・縁側」	放送局・制作会社：NHK、NHKエンタープライズ21（現・NHKエンタープライズ）	冊 1	DTV19980204 書込あり/サインあり
117	TVﾄﾞﾗﾏ	1999.04.	『山田太一ドラマ　春の惑星』 「1 中堅商社・本社ビル・外観(昼)」から「99 夕焼けの街の鳥瞰」まで	放送局・制作会社：TBS	冊 1	DTV19990400 書込あり/サインあり
118	TVﾄﾞﾗﾏ	2001.11.10	『ハイビジョン大型ドラマ　聖徳太子　第一回（全二回）決定稿』 「S1 地図・朝鮮半島全図」から「S88 倉の中」まで	放送局・制作会社：NHK（大阪放送局）	冊 1	DTV20011110-1 書込あり/サインあり
119	TVﾄﾞﾗﾏ	2001.11.10	『ハイビジョン大型ドラマ　聖徳太子　第二回（全二回）決定稿』 「タイトル」から「S57 倭国・朝廷(六〇八年・秋)」まで	放送局・制作会社：NHK（大阪放送局）	冊 1	DTV20011110-2 書込あり/サインあり
120	TVﾄﾞﾗﾏ	2001.11.10	『ハイビジョン大型ドラマ　聖徳太子　第一回（全二回）NHK大阪』 「S1 地図・朝鮮半島全図」から「S88 倉の中」まで	放送局・制作会社：NHK（大阪放送局）	冊 1	DTV20011110-3 書込あり/サインあり
121	TVﾄﾞﾗﾏ	2001.11.10	『ハイビジョン大型ドラマ　聖徳太子　第二回（全二回）NHK大阪』 「タイトル」から「S57 倭国・朝廷(六〇八年・秋)」まで	放送局・制作会社：NHK（大阪放送局）	冊 1	DTV20011110-4 書込あり/サインあり
122	TVﾄﾞﾗﾏ	2002.08.11	『NHKスペシャル　ドラマ　焼け跡のホームランボール』 「S1『米沢駅』と大書された駅名札(深夜)」から「S54 エンディング」まで	放送局・制作会社：NHK（NHKBSー9ch）	冊 1	DTV20020811 書込あり
123	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.04.11	『金曜ドラマ　ブラックジャックによろしく1』 「1 自転車のペダルを漕ぐ運動靴―」から「115 同・廊下・朝」まで	制作：TBSエンタテインメント（現・TBSスパークル） 製作・著作：TBS	冊 1	DTV20030411 書込あり/サインあり
124	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.04.18	『金曜ドラマ　ブラックジャックによろしく2』 「1 英二郎のアパート・夜」から「67 永大病院駐車場・朝」まで	制作：TBSエンタテインメント（現・TBSスパークル） 製作・著作：TBS	冊 1	DTV20030418
125	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.05.30	『金曜ドラマ　ブラックジャックによろしく8』 「1 雨の通り(橋)・夜」から「51 同・面談室」まで	制作：TBSエンタテインメント（現・TBSスパークル） 製作・著作：TBS	冊 1	DTV20030530 書込あり/サインあり

①台本

No.	種別	年月日	『資 料 表 題』 （内　容）	発給(発行) →受給(請取)	形態 数量	資料I番号 備考
126	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.06.20	『金曜ドラマ　ブラックジャックによろしく11』 「1 永大病院・救急外来室・夜」から「33 永大病院・廊下」まで	制作：TBSエンタテインメント（現・TBSスパークル） 製作・著作：TBS	冊 1	OPTV20030620 サインあり
127	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.06.25	『ドラマ特別企画　ダブルリング（仮題）』 「1 とあるインテリジェントビル内・地下大型金庫」から「107 別の場所(打ち上げ場所)」まで	放送局・制作会社：Joker、TBS	冊 1	DTV20030625-1 書込あり/サインあり。※本題は「ドラマ特別企画　タイムリミット」
128	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.06.25	『ドラマ特別企画　ダブルリング（仮題）準備稿②』 「1 とあるインテリジェントビル内・地下大型金庫」から「103 別の場所(打ち上げ場所)」まで」	放送局・制作会社：Joker、TBS	冊 1	DTV20030625-2
129	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.06.25	『ドラマ特別企画　ダブルリング（仮題）決定稿』 「1 とあるインテリジェントビル内・地下大型金庫」から「107 別の場所(打ち上げ場所)」まで」	放送局・制作会社：Joker、TBS	冊 1	DTV20030625-3
130	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.09.08	『スペシャルドラマ　血脈　決定稿』 「1 東京・佐藤家・座敷(六月の夜)」から「115 夢の舞台」まで	制作：KANOX 制作協力：東通、アックス、テクノマックス、テレビ東京天王洲スタジオ	冊 1	OPTV20030908 書込あり/破損あり/付箋あり
131	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.10.09	『エ・アロール―Et Alors―第1話』 「1 協会」から「47 ヴィラ・エ・アロール・ロビー」まで	放送局・制作会社：TBS、ドリマックス・テレビジョン（現・TBSスパークル）	冊 1	DTV20031009 書込あり/サインあり ※本題は「エ・アロール―E t　Alors―～それがどうしたの～」
132	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.10.16	『エ・アロール―Et Alors―第2話』 「1 公園」から「46 同・読書室」まで	放送局・制作会社：TBS、ドリマックス・テレビジョン（現・TBSスパークル）	冊 1	DTV20031016 書込あり/サインあり
133	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.10.23	『エ・アロール―Et Alors―第3話』 「1 来栖のマンション・ロビー」から「49 公園」まで	放送局・制作会社：TBS、ドリマックス・テレビジョン（現・TBSスパークル）	冊 1	DTV20031023 書込あり/サインあり
134	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.10.30	『エ・アロール―E t Alors ―～それがどうしたの～Et Alors　第4話』 「1 街」から「46 公園」まで	放送局・制作会社：TBS、ドリマックス・テレビジョン（現・TBSスパークル）	冊 1	DTV20031030 書込あり/サインあり
135	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.11.06	『エ・アロール―Et Alors―～それがどうしたの～Et Alors　第5話』 「ヴィラ・エ・アロール・前」から「59 同・前(鉛筆で「ロケ」と修正されている」まで	放送局・制作会社：TBS、ドリマックス・テレビジョン（現・TBSスパークル）	冊 1	DTV20031106-1 書込あり/サインあり
136	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.11.06	『エ・アロール―Et Alors ―～それがどうしたの～Et Alors　第5話』 「ヴィラ・エ・アロール・前」から「59 同・ロケ」まで	放送局・制作会社：TBS、ドリマックス・テレビジョン（現・TBSスパークル）	冊 1	DTV20031106-2 書込あり
137	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.11.13	『エ・アロール―Et Alors ―～それがどうしたの～Et Alors　第6話』 「1 川沿いの道」から「58 ヴィラ・エ・アロール・杏子の部屋」まで	放送局・制作会社：TBS、ドリマックス・テレビジョン（現・TBSスパークル）	冊 1	DTV20031113 書込あり/サインあり/破損あり

①台本

No.	種別	年月日	『資 料 表 題』 （内　容）	発給(発行) →受給(請取)	形態 数量	資料I番号 備考
138	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.11.20	『エ・アロール―Et Alors ―～それがどうしたの～Et Alors 第7話』 「1 杏子の部屋・寝室」から「50 同・前」まで	放送局・制作会社：TBS、ドリマックス・テレビジョン（現・TBSスパークル）	冊 1	DTV20031120-1
139	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.11.20	『エ・アロール―Et Alors ―～それがどうしたの～Et Alors 第7話』 「1 杏子の部屋・寝室」から「50 同・前」まで	放送局・制作会社：TBS、ドリマックス・テレビジョン（現・TBSスパークル）	冊 1	DTV20031120-2 書込あり/サインあり
140	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.11.27	『エ・アロール―Et Alors ―～それがどうしたの～Et Alors 第8話＜改訂稿＞』 「1 ヴィラ・エ・アロール・前」から「58 同・院長室」まで	放送局・制作会社：TBS、ドリマックス・テレビジョン（現・TBSスパークル）	冊 1	DTV20031127 書込あり/サインあり
141	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.12.04	『エ・アロール―Et Alors ―～それがどうしたの～Et Alors 第9話』 「1 ヴィラ・エ・アロール・院長室」から「53 ヴィラ・エ・アロール・前」まで	放送局・制作会社：TBS、ドリマックス・テレビジョン（現・TBSスパークル）	冊 1	DTV20031204 書込あり/サインあり
142	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.12.11	『エ・アロール―Et Alors ―～それがどうしたの～Et Alors 第10話』 「1 ヴィラ・エ・アロール・院長室」から「55 来栖のマンション」まで	放送局・制作会社：TBS、ドリマックス・テレビジョン（現・TBSスパークル）	冊 1	DTV20031211 書込あり/サインあり
143	TVﾄﾞﾗﾏ	2003.12.18	『エ・アロール―Et Alors ―～それがどうしたの～Et Alors 最終話』 「1 街」から「62 ヴィラ・エ・アロール・前」まで	放送局・制作会社：TBS、ドリマックス・テレビジョン（現・TBSスパークル）	冊 1	DTV20031218 書込あり/サインあり
144	TVﾄﾞﾗﾏ	2004.03.01	『月曜ミステリー劇場　ひまわりさん　遺失物係を命ず!　決定稿』 「1 街路(とある夜)」から「107 別の街路」まで	制作協力：国際放映 制作：TBSエンタテイメント 制作・著作：TBS	冊 1	DTV20040301 書込あり/サインあり
145	TVﾄﾞﾗﾏ	2004.07.08	『人間の証明　Proof of the Man　1』 「1 棟居のイメージ」から「79 ジェファーソン・廃車置き場」まで	放送局・制作会社：フジテレビ	冊 1	DTV20040708 書込あり/サインあり w。※本題は「人間の証明」
146	TVﾄﾞﾗﾏ	2004.07.15	『人間の証明　Proof of the Man　2』 「1 陸橋下」から「76 港中央署・表」まで	放送局・制作会社：フジテレビ	冊 1	DTV20040715 書込あり/サインあり
147	TVﾄﾞﾗﾏ	2004.07.22	『人間の証明　Proof of the Man　3』 「1 築地署・表」から「75 港中央署・捜査本部」まで	放送局・制作会社：フジテレビ	冊 1	DTV20040722 書込あり/サインあり
148	TVﾄﾞﾗﾏ	2004.07.29	『人間の証明　Proof of the Man　4』 「1 谷底へ舞い落ちて行く麦わら帽子」から「58 港中央署・捜査本部」まで	放送局・制作会社：フジテレビ	冊 1	DTV20040729 書込あり/サインあり
149	TVﾄﾞﾗﾏ	2004.08.05	『人間の証明　Proof of the Man　5』 「1 港中央署・捜査本部」から「91 杉並区役所」まで	放送局・制作会社：フジテレビ	冊 1	DTV20040805 書込あり/サインあり
150	TVﾄﾞﾗﾏ	2004.08.12	『人間の証明　Proof of the Man　6』 「1 港中央署・捜査本部」から「73 ビル・表」まで	放送局・制作会社：フジテレビ	冊 1	DTV20040812 書込あり/サインあり
151	TVﾄﾞﾗﾏ	2004.08.19	『人間の証明　Proof of the Man　7』 「1 警視庁・科捜研・表」から「64 バー」まで	放送局・制作会社：フジテレビ	冊 1	DTV20040819 書込あり/サインあり

①台本

No.	種別	年月日	『資 料 表 題』 （内　容）	発給(発行) →受給(請取)	形態 数量	資料I番号 備考
152	TVﾄﾞﾗﾏ	2004.08.26	『人間の証明　Proof of the Man　8』 「1 ジェファーソン・バー」から「67 ジェファーソン市警・表」まで	放送局・制作会社：フジテレビ	冊 1	DTV20040826 書込あり/サインあり
153	TVﾄﾞﾗﾏ	2004.09.02	『人間の証明　Proof of the Man　9』 「1 港中央署・捜査本部」から「82 同・内」まで	放送局・制作会社：フジテレビ	冊 1	DTV20040902 書込あり
154	TVﾄﾞﾗﾏ	2004.09.09	『人間の証明　Proof of the Man　10』 「1 港中央署・表」から「84 港中央署・表」まで	放送局・制作会社：フジテレビ	冊 1	DTV20040909 書込あり/付箋あり
155	TVﾄﾞﾗﾏ	2005.01.03	『ナニワ金融道・6　準備稿』 「1 大阪・ミナミ(夜)」から「101 街中(夜)」まで	放送局・制作会社：フジテレビ	冊 1	DTV20050103-1 書込あり。※本題は「新春ドラマスペシャル　ナニワ金融道6」
156	TVﾄﾞﾗﾏ	2005.01.03	『ナニワ金融道・6　準備稿』 「1 大阪・ミナミ(夜)」から「101 街中(夜)」まで	放送局・制作会社：フジテレビ	冊 1	DTV20050103-2
157	TVﾄﾞﾗﾏ	2005.01.03	『ナニワ金融道⑥（仮題）』 「1 大阪・ミナミ(夜)」から「101 街中(夜)」まで	放送局・制作会社：フジテレビ	冊 1	DTV20050103-3 書込あり
158	TVﾄﾞﾗﾏ	2005.01.03	『ナニワ金融道⑥（仮題）』 「1 大阪・ミナミ(夜)」から「101 街中(夜)」まで	放送局・制作会社：フジテレビ	冊 1	DTV20050103-4 書込あり
159	TVﾄﾞﾗﾏ	2005.04.16	『瑠璃の島　第1話』 「1 何かを握っている男の手」から「101 鳩海小学校・教室(朝)」まで	製作協力：ケイファクトリー 製作・著作：日本テレビ	冊 1	DTV20050416 書込あり/サインあり
160	TVﾄﾞﾗﾏ	2005.04.23	『瑠璃の島　第2話』 「前回のダイジェスト」から「64 海を走る郵便船(翌朝)」まで	製作協力：ケイファクトリー 製作・著作：日本テレビ	冊 1	DTV20050423 書込あり/サインあり
161	TVﾄﾞﾗﾏ	2005.04.30	『瑠璃の島　第3話』 「第2話のダイジェスト」から「55」まで	製作協力：ケイファクトリー 製作・著作：日本テレビ	冊 1	DTV20050430 書込あり/サインあり
162	TVﾄﾞﾗﾏ	2005.05.07	『瑠璃の島　第4話』 「1 仲間家・居間(朝)」から「39 けたたましく鳴るクラクション」まで	製作協力：ケイファクトリー 製作・著作：日本テレビ	冊 1	DTV20050507-1 書込あり/サインあり
163	TVﾄﾞﾗﾏ	2005.05.07	『瑠璃の島　第4話　準備稿』 「1 仲間家・居間(朝)」から「38 けたたましく鳴るクラクション」まで	製作協力：ケイファクトリー 製作・著作：日本テレビ	冊 1	DTV20050507-2
164	TVﾄﾞﾗﾏ	2005.05.14	『瑠璃の島　第5話』 「第4話ダイジェスト」から「55 桟橋」まで	製作協力：ケイファクトリー 製作・著作：日本テレビ	冊 1	DTV20050514 書込あり/サインあり/付箋あり
165	TVﾄﾞﾗﾏ	2005.05.21	『瑠璃の島　第6話』 「第5話ダイジェスト」から「44 仲間家・玄関前」まで	製作協力：ケイファクトリー 製作・著作：日本テレビ	冊 1	DTV20050521 書込あり/サインあり/付箋あり
166	TVﾄﾞﾗﾏ	2005.05.28	『瑠璃の島　第7話』 「第6話ダイジェスト」から「45 海辺」まで	製作協力：ケイファクトリー 製作・著作：日本テレビ	冊 1	DTV20050528 書込あり/サインあり

①台本

No.	種別	年月日	『資 料 表 題』 （内　容）	発給(発行) →受給(請取)	形態 数量	資料I番号 備考
167	TVﾄﾞﾗﾏ	2005.06.04	『瑠璃の島　第8話』 「第7話ダイジェスト」から「40 公民館前～広場」まで	製作協力：ケイファクトリー 製作・著作：日本テレビ	冊 1	DTV20050604-1 書込あり/サインあり
168	TVﾄﾞﾗﾏ	2005.06.04	『瑠璃の島　第8話』 「第7話ダイジェスト」から「40 公民館前～広場」まで	製作協力：ケイファクトリー 製作・著作：日本テレビ	冊 1	DTV20050604-2 書込あり/サインあり
169	TVﾄﾞﾗﾏ	2005.06.11	『瑠璃の島　第9話』 「第8話ダイジェスト」から「54 元の浜辺(夕)」まで	製作協力：ケイファクトリー 製作・著作：日本テレビ	冊 1	DTV20050611 書込あり/サインあり
170	TVﾄﾞﾗﾏ	2005.06.18	『瑠璃の島　最終話〈20分拡大〉』 「第9話ダイジェスト」から「62 エンディング」まで	製作協力：ケイファクトリー 製作・著作：日本テレビ	冊 1	DTV20050618 書込あり/サインあり
171	TVﾄﾞﾗﾏ	2005.07.25	『月曜ミステリー劇場　ひまわりさん　遺失物係を命ず!2　初稿』 「1 港町西署管内・住宅街(とある夜)」から「1 11 街路」まで	制作協力：国際放映 制作：TBSテレビ（現・TBSスパークル） 制作・著作：TBS	冊 1	DTV20050725-1 書込あり
172	TVﾄﾞﾗﾏ	2005.07.25	『月曜ミステリー劇場　ひまわりさん　遺失物係を命ず!2　決定稿』 「1 港町西署管内・住宅街(とある夜)」から「1 13 街路」まで	制作協力：国際放映 制作：TBSテレビ（現・TBSスパークル） 制作・著作：TBS	冊 1	DTV20050725-2 書込あり/サインあり
173	TVﾄﾞﾗﾏ	2005.10.15	『山田太一スペシャル　いくつかの夜がすぎて』 「1 名古屋駅前(深夜)」から「74 住宅地の遠景」まで	制作協力：CBCクリエイション 製作・著作：CBC	冊 1	DTV20051015-1 書込あり/サインあり。※本題は「山田太一スペシャル2005 いくつかの夜」
174	TVﾄﾞﾗﾏ	2005.10.15	『山田太一スペシャル二〇〇五　いくつかの夜』 「1 名古屋駅前(深夜)」から「74 住宅地の遠景」まで	制作協力：CBCクリエイション 製作・著作：CBC	冊 1	DTV20051015-2 書込あり/サインあり/付箋あり
175	TVﾄﾞﾗﾏ	2006.10.27	『セーラー服と機関銃　3』 「1 クラブ『シャングリラ』・表(夜)」から「4 9 橋の上(夜)」まで	制作：TBSテレビ 製作・著作：TBS	冊 1	DTV20061027 ※本題は「金曜ドラマ　セーラー服と機関銃」
176	TVﾄﾞﾗﾏ	2006.11.24	『セーラー服と機関銃　完』 「6話から返して」から「67 とある並木の道(夕)」まで	制作：TBSテレビ 製作・著作：TBS	冊 1	DTV20061124 書込あり/サインあり
177	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.01.06	『瑠璃の島　SPECIAL2007　』 「1 瑠璃色の海」から「105 鳩海島の海・船が沖に向かってゆく」まで	製作協力：ケイファクトリー 製作・著作：日本テレビ	冊 1	DTV20070106-1 書込あり/サインあり。※本題は「瑠璃の島　SPECIAL2007 初恋」
178	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.01.06	『瑠璃の島　SPECIAL2007　改訂準備稿』 「1 瑠璃色の海」から「108 鳩海島の海・船が沖に向かってゆく」まで	製作協力：ケイファクトリー 製作・著作：日本テレビ	冊 1	DTV20070106-2
179	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.07.29	『大河ドラマ　風林火山　第三十回「我に正義あり」』 「1 武田の行軍に信濃の地図が重なる」から「3 5 荒波に甲斐を中心とする地図が重なり―晴信、義元、氏康、憲政、村上、景虎の肖像が浮かび上がる―」まで	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV20070729-1 書込あり

①台本

No.	種別	年月日	『資 料 表 題』 （内　容）	発給(発行) →受給(請取)	形態 数量	資料I番号 備考
180	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.07.29	『大河ドラマ　風林火山　第三十回「我に正義あり」』 「1 武田の行軍に信濃の地図が重なる」から「35 荒波に甲斐を中心とする地図が重なり―晴信、義元、氏康、憲政、村上、景虎の肖像が浮かび上がる―」まで	放送局・制作会社 ：NHK	冊 1	DTV20070729-2 書込あり
181	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.08.05	『大河ドラマ　風林火山　第三十一回「裏切りの城」』 「1 前回より」から「37 春日山城・広間」まで	放送局・制作会社 ：NHK	冊 1	DTV20070805-1
182	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.08.05	『大河ドラマ　風林火山　第三十一回「裏切りの城」』 「1 前回より」から「37 春日山城・広間」まで	放送局・制作会社 ：NHK	冊 1	DTV20070805-2
183	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.08.12	『大河ドラマ　風林火山　第三十二回「越後潜入」』 「1 前回より」から「35 琵琶島城・仏間(夕)」まで	放送局・制作会社 ：NHK	冊 1	DTV20070812 書込あり
184	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.08.19	『大河ドラマ　風林火山　第三十三回「勘助捕わる」』 「1 琵琶島城・仏間(夕)」から「24 同・曲輪の広場」まで	放送局・制作会社 ：NHK	冊 1	DTV20070819 書込あり
185	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.08.26	『大河ドラマ　風林火山　第三十四回「真田の本懐」』 「1 前回ラストから―深志城・戦時下の曲輪」から「28 小県の地(夕)」まで	放送局・制作会社 ：NHK	冊 1	DTV20070826 書込あり
186	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.09.02	『大河ドラマ　風林火山　第三十五回「姫の戦い」』 「1 前回より」から「26 積翠寺の離れ」まで	放送局・制作会社 ：NHK	冊 1	DTV20070902
187	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.09.09	『大河ドラマ　風林火山　第三十六回「宿命の女」』 「1 前回より」から「30 同・不動堂」まで	放送局・制作会社 ：NHK	冊 1	DTV20070909 書込あり
188	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.09.16	『大河ドラマ　風林火山　第三十七回「母の遺言」』 「1 躑躅ヶ崎館・不動堂」から「31 同・不動堂に朝の光が射し込む―」まで	放送局・制作会社 ：NHK	冊 1	DTV20070916-1 書込あり
189	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.09.16	『風林火山　第三十七回』 「1 躑躅ヶ崎館・不動堂」から「32 同・不動堂」まで	放送局・制作会社 ：NHK	冊 1	DTV20070916-2 書込あり
190	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.09.16	『大河ドラマ　風林火山　第三十七回「母の遺言」』 「1 躑躅ヶ崎館・不動堂」から「31 同・不動堂に朝の光が射し込む―」まで	放送局・制作会社 ：NHK	冊 1	DTV20070916-3
191	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.09.16	『大河ドラマ　風林火山　第三十七回「母の遺言」』 「1 躑躅ヶ崎館・不動堂」から「31 同・不動堂に朝の光が射し込む―」まで	放送局・制作会社 ：NHK	冊 1	DTV20070916-4
192	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.09.23	『大河ドラマ　風林火山　第三十八回「村上討伐」』 「1 前回より」から「38 塩田城・櫓」まで	放送局・制作会社 ：NHK	冊 1	DTV20070923-1

①台本

No.	種別	年月日	『資 料 表 題』 （内　容）	発給(発行) →受給(請取)	形態 数量	資料I番号 備考
193	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.09.23	『大河ドラマ　風林火山　第三十八回「村上討伐」』 「1 前回より」から「38 塩田城・櫓」まで	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV20070923-2 書込あり
194	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.09.30	『大河ドラマ　風林火山　第三十九回「龍虎激突」』 「1 川中島・地図或いは実景－前回の映像など—」から「41 武田の本陣」まで	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV20070930 書込あり
195	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.10.07	『大河ドラマ　風林火山　第四十回「三国同盟」』 「1 前回より」から「28 小坂観音院・縁側」まで	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV20071007
196	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.10.14	『大河ドラマ　風林火山　第四十一回「姫の死」』 「1 前回より」から「29 木曽谷・藪原砦の陣中(夜)」まで	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV20071014 書込あり/サインあり/付箋あり
197	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.10.21	『大河ドラマ　風林火山　第四十二回「軍師と軍神」』 「1 小坂観音院・庭」から「22 勘助の屋敷・居室(夜)」まで	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV20071021-1 書込あり/サインあり
198	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.10.21	『大河ドラマ　風林火山　第四十二回』 「1 小坂観音院・庭」から「28 春日山城・広間」まで	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV20071021-2
199	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.10.28	『大河ドラマ　風林火山　第四十三回「信玄誕生」』 「1 勘助の屋敷・寝所(夜明け前)」から「33 琵琶島城・一室」まで	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV20071028 書込あり/サインあり/セリフ用紙の挟み込みあり
200	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.11.04	『大河ドラマ　風林火山　第四十四回「信玄暗殺」』 「1 前回より」から「34 勘助の屋敷・庭(夕)」まで	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV20071104 書込あり/サインあり/セリフ用紙の挟み込みあり
201	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.11.11	『大河ドラマ　風林火山　第四十五回「謀略!桶狭間」』 「1 前回より」から「38 同・広間(後日)」まで	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV20071111 書込あり/サインあり
202	TVﾄﾞﾗﾏ	2007.11.18	『大河ドラマ　風林火山　第四十六回「関東出兵」』 「1 躑躅ヶ崎館・不動堂」から「39 同・同・門前の道」まで	放送局・制作会社：NHK	冊 1	DTV20071118 書込あり/サインあり/付箋あり
203	TVﾄﾞﾗﾏ	2008.08.02	『ドラマ（帽子）』 「1 高山帽子店・店内の作業場(夢)」から「70 高山帽子店・居間」まで	制作協力：NHKプラネット 制作・著作：NHK（広島放送局）	冊 1	DTV20080802-1 書込あり/サインあり。※本題は「NHK広島放送局開局80年ドラマ・帽子」
204	TVﾄﾞﾗﾏ	2008.08.02	『ドラマ（帽子）』 「1 高山帽子店・店内の作業場(夢)」から「70 高山帽子店・居間」まで	制作協力：NHKプラネット 制作・著作：NHK（広島放送局）	冊 1	DTV20080802-2 書込あり/サインあり
205	TVﾄﾞﾗﾏ	2008.08.02	『ドラマ（帽子）』 「1 高山帽子店・店内の作業場(夢)」から「70 高山帽子店・居間」まで	制作協力：NHKプラネット 制作・著作：NHK（広島放送局）	冊 1	DTV20080802-3 書込あり/サインあり

①台本

No.	種別	年月日	『資 料 表 題』 （内　容）	発給(発行) →受給(請取)	形態 数量	資料I番号 備考
206	TVﾄﾞﾗﾏ	2008.08.02	『帽子』 「1 高山帽子店・店内の作業場(夢)」から「70 高山帽子店・居間」まで	制作協力：NHKプラネット 制作・著作：NHK（広島放送局）	冊 1	DTV20080802-4 書込あり/サインあり
207	TVﾄﾞﾗﾏ	2008.11.06	『風のガーデン5　カンパニュラ』 「1 アカシア(早朝)」から「75 グリーン・ハウス裏」まで	制作協力：FCC 制作・著作：フジテレビ	冊 1	DTV20081106-1 書込あり/サインあり
208	TVﾄﾞﾗﾏ	2008.11.06	『風のガーデン5「カンパニュラ」改訂稿』 「1 アカシア(早朝)」から「78 グリーン・ハウス裏」まで	制作協力：FCC 制作・著作：フジテレビ	冊 1	DTV20081106-2 書込あり/サインあり
209	TVﾄﾞﾗﾏ	2008.11.13	『風のガーデン6　デルフィニウム』 「1 白鳥病院・通用口」から「89 表」まで	制作協力：FCC 制作・著作：フジテレビ	冊 1	DTV20081113-1 書込あり/サインあり
210	TVﾄﾞﾗﾏ	2008.11.13	『風のガーデン6「デルフィニウム」改訂稿』 「1 白鳥病院・通用口」から「96 表」まで	制作協力：FCC 制作・著作：フジテレビ	冊 1	DTV20081113-2 書込あり/サインあり
211	TVﾄﾞﾗﾏ	2008.11.20	『風のガーデン7　サポナリア』 「1 グリーンハウス(前回)」から「67 イメージ」まで	制作協力：FCC 制作・著作：フジテレビ	冊 1	DTV20081120-1 書込あり/サインあり
212	TVﾄﾞﾗﾏ	2008.11.20	『風のガーデン7「サポナリア」改訂稿』 「1 グリーンハウス(前回)」から「67 イメージ」まで	制作協力：FCC 制作・著作：フジテレビ	冊 1	DTV20081120-2 書込あり/サインあり
213	TVﾄﾞﾗﾏ	2008.11.27	『風のガーデン8　フロックス』 「1 富良野市街」から「59 キャンピングカー」まで	制作協力：FCC 制作・著作：フジテレビ	冊 1	DTV20081127-1 書込あり/サインあり
214	TVﾄﾞﾗﾏ	2008.11.27	『風のガーデン8「フロックス」改訂稿』 「1 富良野市街」から「59 キャンピングカー」まで	制作協力：FCC 制作・著作：フジテレビ	冊 1	DTV20081127-2 書込あり/サインあり
215	TVﾄﾞﾗﾏ	2008.12.04	『風のガーデン9「ラムズイアー」改訂稿』 「1 キャンピング・カー内(前回)」から「55 キャンピング・カー表」まで	制作協力：FCC 制作・著作：フジテレビ	冊 1	DTV20081204 書込あり/サインあり
216	TVﾄﾞﾗﾏ	2008.12.11	『風のガーデン10「ユーフォルビア」改訂稿』 「1 闇の道」から「36 キャンピングカー内」まで	制作協力：FCC 制作・著作：フジテレビ	冊 1	DTV20081211 書込あり/サインあり

⑥スクラップブック

No.	年月日	資　料　名 （内　容）	形態 数量	資料I番号 備考
1	1961.08.15	緒形拳スクラップブック（1961年8月～1962年10月）	冊 1	SBZ19610815
			薄青表紙	
2	1963.01.01	緒形拳スクラップブック（1963年1月～1964年2月）	冊 1	SBZ19630101
			赤表紙	
3	1963.07.03	緒形拳スクラップブック（1963年7月～1966年10月）	冊 1	SBZ19630703
			赤表紙（高倉典江関係）	
4	1964.01.19	緒形拳スクラップブック（1964年1月～6月）	冊 1	SBZ19640119
5	1964.11.03	緒形拳スクラップブック（1964年11月～12月）	冊 1	SBZ19641103
6	1964.12.28	「緒形拳スクラップ」（1964年12月～1965年1月）	冊 1	SBZ19641228
			青表紙	
7	1965.01.01	「太閤記スクラップ」（1965年1月）	冊 1	SBZ19650101
			青表紙	
8	1965.01.03	緒形拳スクラップブック（1965年1月～6月）	冊 1	SBZ19650103-1
9	1965.01.03	緒形拳スクラップブック（1965年1月～9月）	冊 1	SBZ19650103-2
10	1965.01.17	緒形拳スクラップブック（1965年1月～4月）	冊 1	SBZ19650117
			茶表紙	
11	1965.04.18	緒形拳スクラップブック（1965年4月～9月）	冊 1	SBZ19650418-1
			茶表紙	
12	1965.04.18	緒形拳スクラップブック（1965年4月～9月	冊 1	SBZ19650418-2
13	1965.07.06	緒形拳スクラップブック（1965年7月～12月）	冊 1	SBZ19650706
14	1965.07.16	緒形拳スクラップブック（1965年7月～1966年2月）	冊 1	SBZ19650716
			黒表紙	
15	1966.01.24	緒形拳スクラップブック（1966年1月～3月）	冊 1	SBZ19660124
16	1966.04.03	緒形拳スクラップブック（1966年4月～10月）	冊 1	SBZ19660403
17	1968.05.31	緒形拳スクラップブック（1969年3月～9月）	冊 1	SBZ19680531
18	1969.01.14	緒形拳スクラップブック（1969年1月～年6月）	冊 1	SBZ19690114
19	1969.07.24	緒形拳スクラップブック（1969年7月～1970年1月）	冊 1	SBZ19690724
20	1970.01.26	緒形拳スクラップブック（1969年1月～1970年12月）	冊 1	SBZ19700126
21	1970.04.08	緒形拳スクラップブック（1969年4月～1970年9月）	冊 1	SBZ19700408
22	1970.04.10	緒形拳スクラップブック（1970年4月～1971年3月）	冊 1	SBZ19700410
23	1971.01.15	緒形拳スクラップブック（1971年1月～12月）	冊 1	SBZ19710115
24	1971.04.09	緒形拳スクラップブック（1971年4月～年8月）	冊 1	SBZ19710409
25	1971.05.12	緒形拳スクラップブック（1971年5月～10月）	冊 1	SBZ19710512
26	1971.12.15	緒形拳スクラップブック（1971年12月～年1月）	冊 1	SBZ19711215

⑥スクラップブック

No.	年月日	資　料　名 （内　容）	形態 数量	資料I番号 備考
27	1972.06.24	緒形拳スクラップブック（1972年6月～7月）	冊 1	SBZ19720624
28	1972.08.17	緒形拳スクラップブック（1972年8月～10月）	冊 1	SBZ19720817
29	1972.01.22	緒形拳スクラップブック（1972年1月～9月）	冊 1	SBZ19720122
30	1972.10.03	緒形拳スクラップブック（1972年10月～2月）	冊 1	SBZ19721003
31	1972.12.19	緒形拳スクラップブック（1972年12月～1973年3月）	冊 1	SBZ19721219
32	1973.01.12	緒形拳スクラップブック（1973年1月～7月）	冊 1	SBZ19730112
33	1973.02.19	緒形拳スクラップブック（1973年2月～4月）	冊 1	SBZ19730219-1
34	1973.02.19	緒形拳スクラップブック（1973年2月～4月）	冊 1	SBZ19730219-2
35	1973.05.25	緒形拳スクラップブック（1973年5月～6月）	冊 1	SBZ19730525
36	1973.08.03	緒形拳スクラップブック（1973年8月～1974年1月）	冊 1	SBZ19730803
37	1973.12.17	緒形拳スクラップブック（1973年12月～1974年3月）	冊 1	SBZ19731217
38	1974.01.18	緒形拳スクラップブック（1974年1月～6月）	冊 1	SBZ19740118
39	1974.06.04	緒形拳スクラップブック（1974年6月～12月）	冊 1	SBZ19740604
40	1974.12.12	緒形拳スクラップブック（1974年12月～1975年1月）	冊 1	SBZ19741212
41	1975.01.18	緒形拳スクラップブック（1975年1月～5月）	冊 1	SBZ19750118
42	1975.06.02	緒形拳スクラップブック（1975年6月～12月）	冊 1	SBZ19750602
43	1975.09.23	緒形拳スクラップブック（1975年9月～10月）	冊 1	SBZ19750923
44	1976.01.03	緒形拳スクラップブック（1976年1月～6月）	冊 1	SBZ19760103
45	1976.04.19	緒形拳スクラップブック（1976年4月～5月）	冊 1	SBZ19760419
46	1976.07.11	緒形拳スクラップブック（1976年7月～9月）	冊 1	SBZ19760711
47	1977.01.05	緒形拳スクラップブック（1977年1月～6月）	冊 1	SBZ19770105
48	1977.06.30	緒形拳スクラップブック（1977年6月～12月）	冊 1	SBZ19770630
49	1977.07.06	緒形拳スクラップブック（1977年7月～12月）	冊 1	SBZ19770706
50	1977.11.18	緒形拳スクラップブック（1977年11月～1978年1月）	冊 1	SBZ19771118
51	1978.01.06	緒形拳スクラップブック（1978年1月～6月）	冊 1	SBZ19780106
52	1978.07.02	緒形拳スクラップブック（1978年7月～10月）	冊 1	SBZ19780702
53	1978.07.22	緒形拳スクラップブック（1978年7月～10月）	冊 1	SBZ19780722
54	1978.08.29	緒形拳スクラップブック（1978年8月～10月）	冊 1	SBZ19780829

⑥スクラップブック

No.	年月日	資　料　名 （内　容）	形態 数量	資料I番号 備考
55	1978.10.22	緒形拳スクラップブック（1978年10月～12月）	冊 1	SBZ19781022
56	1978.11.07	緒形拳スクラップブック（1978年11月～12月）	冊 1	SBZ19781107
57	1979.01.04	緒形拳スクラップブック（1979年1月～3月）	冊 1	SBZ19790104
58	1979.01.12	緒形拳スクラップブック（1979年1月～3月）	冊 1	SBZ19790112
59	1979.04.02	緒形拳スクラップブック（1979年4月～4月）	冊 1	SBZ19790402
60	1979.04.16	緒形拳スクラップブック（1979年4月～6月）	冊 1	SBZ19790416
61	1979.05.07	緒形拳スクラップブック（1979年5月～6月）	冊 1	SBZ19790507
62	1979.07.04	緒形拳スクラップブック（1979年7月～8月）	冊 1	SBZ19790704
63	1979.09.02	緒形拳スクラップブック（1979年9月～12月）	冊 1	SBZ19790902-2
64	1979.09.22	緒形拳スクラップブック（1979年9月～11月）	冊 1	SBZ19790922-1
65	1980.01.07	緒形拳スクラップブック（1980年1月～9月）	冊 1	SBZ19800107
66	1981.10.27	緒形拳スクラップブック（1981年10月～12月）	冊 1	SBZ19811027
67	1981.11.06	緒形拳スクラップブック（1981年11月～11月）	冊 1	SBZ19811106
68	1981.12.19	緒形拳スクラップブック（1981年12月～2月）	冊 1	SBZ19811219
69	1982.01.01	緒形拳スクラップブック（1982年1月～3月）	冊 1	SBZ19820101
70	1982.01.19	緒形拳スクラップブック（1982年1月～3月）	冊 1	SBZ19820119
71	1982.04.04	緒形拳スクラップブック（1982年4月～5月）	冊 1	SBZ19820404
72	1982.04.22	緒形拳スクラップブック（1982年4月～6月）	冊 1	SBZ19820422
73	1982.06.04	緒形拳スクラップブック（1982年6月～8月）	冊 1	SBZ19820604
74	1982.07.24	緒形拳スクラップブック（1982年7月～9月）	冊 1	SBZ19820724
75	1982.08.22	緒形拳スクラップブック（1982年8月～11月）	冊 1	SBZ19820822
76	1982.09.08	緒形拳スクラップブック（1982年9月～12月）	冊 1	SBZ19820908
77	1982.09.18	緒形拳スクラップブック（1982年9月～12月）	冊 1	SBZ19820918
78	1982.10.17	緒形拳スクラップブック（1982年10月～12月）	冊 1	SBZ19821017
79	1982.11.15	緒形拳スクラップブック（1982年11月～1983年1月）	冊 1	SBZ19821115
80	1983.01.01	緒形拳スクラップブック（1983年1月～3月）	冊 1	SBZ19830101
81	1983.04.07	緒形拳スクラップブック（1983年4月～5月）	冊 1	SBZ19830407
82	1983.04.20	緒形拳スクラップブック（1983年4月～6月）	冊 1	SBZ19830420

⑥スクラップブック

No.	年月日	資　料　名 （内　容）	形態 数量	資料I番号 備考
83	1983.06.16	緒形拳スクラップブック（1983年6月～8月）	冊 1	SBZ19830616
84	1983.07.19	緒形拳スクラップブック（1983年7月～9月）	冊 1	SBZ19830719
85	1983.09.01	緒形拳スクラップブック（1983年9月～9月）	冊 1	SBZ19830901
86	1983.08.22	緒形拳スクラップブック（1983年8月～10月）	冊 1	SBZ19830822
87	1983.10.01	緒形拳スクラップブック（1983年10月～10月）	冊 1	SBZ19831001
88	1983.10.22	緒形拳スクラップブック（1983年10月～1984年1月）	冊 1	SBZ19831022
89	1983.11.16	緒形拳スクラップブック（1983年11月～12月）	冊 1	SBZ19831116
90	1983.12.15	緒形拳スクラップブック（1983年12月～1984年3月）	冊 1	SBZ19831215
91	1984.01.01	緒形拳スクラップブック（1984年1月～3月）	冊 1	SBZ19840101
92	1984.01.18	緒形拳スクラップブック（1984年1月～3月）	冊 1	SBZ19840118
93	1984.02.15	緒形拳スクラップブック（1984年2月～4月）	冊 1	SBZ19840215
94	1984.04.02	緒形拳スクラップブック（1984年4月～6月）	冊 1	SBZ19840402
95	1984.04.20	緒形拳スクラップブック（1984年4月～5月）	冊 1	SBZ19840420
96	1984.07.01	緒形拳スクラップブック（1984年7月～8月）	冊 1	SBZ19840701
97	1984.09.04	緒形拳スクラップブック（1984年9月～12月）	冊 1	SBZ19840904
98	1984.11.15	緒形拳スクラップブック（1984年11月～1985年1月）	冊 1	SBZ19841115
99	1984.12.14	緒形拳スクラップブック（1984年12月～1985年2月）	冊 1	SBZ19841214
100	1985.01.03	緒形拳スクラップブック（1985年1月～2月）	冊 1	SBZ19850103
101	1985.03.07	緒形拳スクラップブック（1985年3月～5月）	冊 1	SBZ19850307
102	1985.04.20	緒形拳スクラップブック（1985年4月～6月）	冊 1	SBZ19850420
103	1985.06.01	緒形拳スクラップブック（1985年6月～8月）	冊 1	SBZ19850601
104	1985.06.18	緒形拳スクラップブック（1985年6月～7月）	冊 1	SBZ19850618
105	1985.09.01	緒形拳スクラップブック（1985年9月～9月）	冊 1	SBZ19850901
106	1985.09.10	緒形拳スクラップブック（1985年9月～11月）	冊 1	SBZ19850910
107	1985.10.01	緒形拳スクラップブック（1985年10月）	冊 1	SBZ19851001
108	1985.10.15	緒形拳スクラップブック（1985年10月～11月）	冊 1	SBZ19851015
109	1985.11.02	緒形拳スクラップブック（1985年11月～12月）	冊 1	SBZ19851102
110	1986.01.01	緒形拳スクラップブック（1986年1月～7月）	冊 1	SBZ19860101

⑥スクラップブック

No.	年月日	資　料　名 （内　容）	形態 数量	資料I番号 備考
111	1986.01.16	緒形拳スクラップブック（1986年1月～3月）	冊 1	SBZ19860116
112	1986.03.14	緒形拳スクラップブック（1986年3月～5月）	冊 1	SBZ19860314
113	1986.04.11	緒形拳スクラップブック（1986年4月～6月）	冊 1	SBZ19860411
114	1986.08.01	緒形拳スクラップブック（1986年8月～12月）	冊 1	SBZ19860801
115	1987.01.01	緒形拳スクラップブック（1987年1月～4月）	冊 1	SBZ19870101
116	1987.02.11	緒形拳スクラップブック（1987年2月～3月）	冊 1	SBZ19870211
117	1987.05.01	緒形拳スクラップブック（1987年5月～8月）	冊 1	SBZ19870501
118	1987.06.16	緒形拳スクラップブック（1987年6月～8月）	冊 1	SBZ19870616
119	1987.08.10	緒形拳スクラップブック（1987年8月～10月）	冊 1	SBZ19870810
120	1987.08.28	緒形拳スクラップブック（1987年8月～12月）	冊 1	SBZ19870828
121	1987.09.08	緒形拳スクラップブック（1987年9月～10月）	冊 1	SBZ19870908
122	1987.12.04	緒形拳スクラップブック（1987年12月～1988年1月）	冊 1	SBZ19871204
123	1988.03.27	緒形拳スクラップブック（1988年3月～12月）	冊 1	SBZ19880327
124	1988.07.10	緒形拳スクラップブック（1988年7月～9月）	冊 1	SBZ19880710
125	1988.09.07	緒形拳スクラップブック（1988年9月～11月）	冊 1	SBZ19880907
126	1988.11.06	緒形拳スクラップブック（1988年11月～1989年11月）	冊 1	SBZ19881106
127	1989.01.01	緒形拳スクラップブック（1989年1月～3月）	冊 1	SBZ19890101
128	1989.01.07	緒形拳スクラップブック（1989年1月～3月）	冊 1	SBZ19890107
129	1989.01.12	緒形拳スクラップブック（1989年1月～5月）	冊 1	SBZ19890112
130	1989.04.03	緒形拳スクラップブック（1989年4月～8月）	冊 1	SBZ19890403
131	1989.05.16	緒形拳スクラップブック（1989年5月～7月）	冊 1	SBZ19890516
132	1989.06.09	緒形拳スクラップブック（1989年6月～8月）	冊 1	SBZ19890609
133	1989.07.09	緒形拳スクラップブック（1989年7月～9月）	冊 1	SBZ19890709
134	1989.08.13	緒形拳スクラップブック（1989年8月～10月）	冊 1	SBZ19890813
135	1989.09.02	緒形拳スクラップブック（1989年9月～10月）	冊 1	SBZ19890902
136	1989.10.05	緒形拳スクラップブック（1989年10月～12月）	冊 1	SBZ19891005
137	1989.11.03	緒形拳スクラップブック（1989年11月～12月）	冊 1	SBZ19891103
138	1990.01.01	緒形拳スクラップブック（1990年1月～4月）	冊 1	SBZ19900101

⑥スクラップブック

No.	年月日	資　料　名 （内　容）	形態 数量	資料I番号 備考
139	1990.01.18	緒形拳スクラップブック（1990年1月～2月）	冊 1	SBZ19900118
140	1990.04.10	緒形拳スクラップブック（1990年4月～6月）	冊 1	SBZ19900410
141	1990.05.10	緒形拳スクラップブック（1990年5月～7月）	冊 1	SBZ19900510
142	1990.05.11	緒形拳スクラップブック（1990年5月～10月）	冊 1	SBZ19900511
143	1990.07.16	緒形拳スクラップブック（1990年7月～年9月）	冊 1	SBZ19900716
144	1990.08.03	緒形拳スクラップブック（1990年8月～10月）	冊 1	SBZ19900803
145	1990.11.01	緒形拳スクラップブック（1990年11月～1991年12月）	冊 1	SBZ19901101
146	1990.11.27	緒形拳スクラップブック（1990年11月～1991年1月）	冊 1	SBZ19901127
147	1991.01.01	緒形拳スクラップブック（1990年12月～1991年2月）	冊 1	SBZ19910101
148	1991.01.08	緒形拳スクラップブック（1991年1月～6月）	冊 1	SBZ19910108
149	1991.03.07	緒形拳スクラップブック（1991年1年3月～4月）	冊 1	SBZ19910307
150	1991.03.31	緒形拳スクラップブック（1991年3月～年4月）	冊 1	SBZ19910331
151	1991.04.19	緒形拳スクラップブック（1991年4月～7月）	冊 1	SBZ19910419
152	1991.06.07	緒形拳スクラップブック（1991年6月～7月）	冊 1	SBZ19910607
153	1991.06.14	緒形拳スクラップブック（1991年7月～11月）	冊 1	SBZ19910614
154	1991.07.09	緒形拳スクラップブック（1991年7月～8月）	冊 1	SBZ19910709
155	1991.08.20	緒形拳スクラップブック（1991年8月～11月）	冊 1	SBZ19910820
156	1991.12.06	緒形拳スクラップブック（1991年11月～1992年1月）	冊 1	SBZ19911206
157	1992.01.01	緒形拳スクラップブック（1992年1月～12月）	冊 1	SBZ19920101
158	1992.01.17	緒形拳スクラップブック（1992年1月～3月）	冊 1	SBZ19920117
159	1992.02.16	緒形拳スクラップブック（1992年2月～4月）	冊 1	SBZ19920216
160	1992.03.27	緒形拳スクラップブック（1992年3月～4月）	冊 1	SBZ19920327
161	1992.04.24	緒形拳スクラップブック（1992年4月～5月）	冊 1	SBZ19920424
162	1992.05.03	緒形拳スクラップブック（1992年5月～7月）	冊 1	SBZ19920503
163	1992.06.04	緒形拳スクラップブック（1992年6月～7月）	冊 1	SBZ19920604
164	1992.08.06	緒形拳スクラップブック（1992年8月～10月）	冊 1	SBZ19920806
165	1992.09.01	緒形拳スクラップブック（1992年9月～10月）	冊 1	SBZ19920901
166	1992.12.19	緒形拳スクラップブック（1992年12月～1993年1月）	冊 1	SBZ19921219

⑥スクラップブック

No.	年月日	資　料　名 （内　容）	形態 数量	資料I番号 備考
167	1993.01.16	緒形拳スクラップブック（1993年1月～7月）	冊 1	SBZ19930116
168	1993.02.09	緒形拳スクラップブック（1993年2月～4月）	冊 1	SBZ19930209
169	1993.03.08	緒形拳スクラップブック（1993年3月～5月）	冊 1	SBZ19930308
170	1993.04.14	緒形拳スクラップブック（1993年4月～6月）	冊 1	SBZ19930414
171	1993.06.12	緒形拳スクラップブック（1993年6月～8月）	冊 1	SBZ19930612
172	1993.08.07	緒形拳スクラップブック（1993年8月～12月）	冊 1	SBZ19930807
173	1994.04.01	緒形拳スクラップブック（1994年4月～5月）	冊 1	SBZ19940401
174	1994.07.19	緒形拳スクラップブック（1994年7月～12月）	冊 1	SBZ19940719
175	1995.01.01	緒形拳スクラップブック（1995年1月～7月）	冊 1	SBZ19950101
176	1995.07.08	緒形拳スクラップブック（1995年7月～1996年1月）	冊 1	SBZ19950708-1
177	1995.07.08	緒形拳スクラップブック（1995年7月～1996年1月）	冊 1	SBZ19950708-2
178	1995.08.01	緒形拳スクラップブック（1995年8月～1996年6月）	冊 1	SBZ19950801
179	1996.01.01	緒形拳スクラップブック（1996年1月～6月）	冊 1	SBZ19960101
180	1996.06.01	緒形拳スクラップブック（1996年6月～8月）	冊 1	SBZ19960601
181	1996.07.19	緒形拳スクラップブック（1996年7月～11月）	冊 1	SBZ19960719
182	1997.08.28	緒形拳スクラップブック（1997年8月～7月）	冊 1	SBZ19970828
183	2000.02.22	緒形拳スクラップブック（2000年2月～2004年1月）	冊 1	SBZ20000222
184	2005.01.03	緒形拳スクラップブック（2005年1月～2008年10月）	冊 1	SBZ20050103
185	2001.01.	緒形拳スクラップブック　舞台　（2001年5月～2007年4月）	冊 1	OSBZ20010100
186	2006.06.09	緒形拳スクラップブック　舞台（白野）　（2006年6月～2007年11月）	冊 1	OSBZ20060609
187	1987.07.	緒形拳スクラップブック　映画　（1987年～2008年1月）	冊 1	OSBZ19870700
188	1996.10.	緒形拳スクラップブック　テレビ1　（1996年10月～2007年12月）	冊 1	OSBZ19961000
189	2008.05.	緒形拳スクラップブック　テレビ2　（2008年5月～11月）	冊 1	OSBZ20080500
190	2002.02.	緒形拳スクラップブック　CM（2002年～2008年11月）	冊 1	OSBZ20020200
191	1964.03.05	緒形拳スクラップブック　新聞1（1964年3月～1967年11月）	冊 1	OSBZ19640305
192	1968.01.17	緒形拳スクラップブック　新聞2（1968年1月～8月）	冊 1	OSBZ19680117
193	1968.08.02	緒形拳スクラップブック　新聞3（1968年8月～年11月）	冊 1	OSBZ19680802
194	1968.11.15	緒形拳スクラップブック　新聞4（1968年11月～2004年4月）	冊 1	OSBZ19681115

⑥スクラップブック

No.	年月日	資　料　名 （内　容）	形態 数量	資料I番号 備考
195	2005.12.25	緒形拳スクラップブック　新聞5（2005年12月～2008年4月）	冊 1	OSBZ20051225
196	2008.10.	緒形拳スクラップブック　新聞（2008年10月）	冊 1 緒形拳死去の新聞	OSBZ20081000
197	1984.06.	緒形拳スクラップブック　雑誌1　1984年6月～2008年10月（年代不明あり）	冊 1	OSBZ19840600
198	1968.02.19	緒形拳スクラップブック　雑誌2　1996年2月～2008年10月（年代不明あり）	冊 1	OSBZ19680219
199	1999.05.20	緒形拳スクラップブック　雑誌3　1999年5月～2008年9月（年代不明あり）	冊 1	OSBZ19990520
200	1986.05.04	緒形拳スクラップブック　雑誌4　1986年5月～2007年12月	冊 1	OSBZ19860504
201	2007.04.15	緒形拳スクラップブック　その他（2004年7月～2007年12月）	冊 1 年代不明あり	OSBZ20070415
202	1957.06.01	緒形拳スクラップブック【雑誌】1957年6月～1966年3月）	冊 1	TSBZ19570601
203	1967.02.01	緒形拳スクラップブック【雑誌】1967年4月～1974年3月	冊 1	TSBZ19670201
204	1975.01.30	緒形拳スクラップブック【雑誌】1975年1月～1978年9月	冊 1	TSBZ19750130
205	1979.02.15	緒形拳スクラップブック【雑誌】1979年2月～1978年9月	冊 1	TSBZ19790215
206	1981.06.01	緒形拳スクラップブック【雑誌】1981年6月～1984年12月	冊 1	TSBZ19810601
207	1985.06.28	緒形拳スクラップブック【雑誌】1985年6月～1992年1月	冊 1	TSBZ19850628
208	1993.07.24	緒形拳スクラップブック【雑誌】1993年7月～1995年11月	冊 1	TSBZ19930724
209	1998.09.01	緒形拳スクラップブック【雑誌】1998年6月～1999年8月	冊 1	TSBZ19980901
210	2000.09.04	緒形拳スクラップブック【雑誌】2000年9月～2002年10月	冊 1	TSBZ20000904
211	2003.01.01	緒形拳スクラップブック【雑誌】2003年1月～2006年8月	冊 1	TSBZ20030101
212	2005.11.01	緒形拳スクラップブック【雑誌】2005年11月～2006年11月	冊 1	TSBZ20051101
213	2007.01.01	緒形拳スクラップブック【雑誌】2007年1月～12月	冊 1	TSBZ20070101
214	2008.01.15	緒形拳スクラップブック【雑誌】2008年1月～12月	冊 1	TSBZ20080115
215	年不明.	緒形拳スクラップブック　年代不明バラ	冊 2	TSBZ年不明0000

本誌への投稿について

1．どなたでも自由に投稿できます。
2．原稿は本誌の目的（「『文明』創刊にあたって」（創刊号に掲載）をご参照下さい）に沿った論文または研究ノートなどで，未発表のものにかぎります。
3．原稿の体裁
①邦文の場合： 20,000 字以内（研究ノートは16,000 字以内），原則として図表は刊行の際のスペースを本文の字数相当に算入してください。他に英文サマリー300 ワード。
②英文の場合： 8,000 ワード以内（研究ノートは6,400 ワード以内），原則として図表は刊行の際のスペースを本文のワード数相当に算入してください。他に邦文サマリー500 字または英文サマリー300ワード。
いずれも，本誌の「執筆要項」に沿った形でご提出下さい。
4．投稿原稿の採否は，編集委員会の委嘱する査読委員の審査に基づき編集委員会が決定します。原稿は採否にかかわらずお返しいたしません。
5．発行：年１～２回
6．「執筆要項」は，東海大学文明研究所のホームページより，ダウンロードできます。

東海大学文明研究所
神奈川県平塚市北金目 4-1-1　〒 259-1292
連絡先：湘南校舎 F 館２F　文明研究所
電　話：0463-58-1211（EXT 3261，4426）
E-mail：bunmei@tsc.u-tokai.ac.jp

文明
Civilizations

No.30 **2022**

編集　委員長　田中彰吾
　　委員　山本和重
　　馬場弘臣
　　山花京子
　　篠原聰
　　吉田晃章
　　五十嶋みゆき

発行日　2023年3月31日
発行者　山本和重
発行所　東海大学文明研究所
神奈川県平塚市北金目4-1-1　〒259-1292
Telephone：0463-58-1211（EXT 3261, 4426）
E-mail:bunmei@tsc.u-tokai.ac.jp

制作　株式会社東海教育研究所
東京都新宿区西新宿7 - 4 - 3 升本ビル7階　〒160 - 0023
Telephone：03 - 3227 - 3700
Facsimile：03 - 3227 - 3701

印刷　新日本印刷　株式会社

※本誌からの無断転載を禁じます。